

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

飯田市市内その2

昭和47年度

日本道
長野

信州大学附属図書館



3470342233

木忠書

鈴木茂蔵

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

—飯田市地内 その2—

昭和47年度

日本道路公団名古屋支社
長野県教育委員会

序

昭和47年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として、飯田市地内その2（阿智・山本・伊賀良・原光寺）17遺跡の発掘調査が4月10日から7月22日にかけて実施された。

この山本・伊賀良地区は、久米川・飯田松川の堆積による新期扇状地が木曾山脈山麓に広がり、東方に続く数段の段丘面と、西南方に形成された盆地状の地形や、中期・古期扇状地の入り組む複雑な地形を示し、そのひとつひとつの扇状地や台地には、それぞれ遺跡が存在し古くから考古学上注目された地域である。中央自動車道は、山本地区では山麓に近い台地状を、伊賀良地区で、新期扇状地の中央部を横切するため、縄文時代から歴史時代の集落址の存在が予想され、今回の発掘調査には大きな期待がかけられていた。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように、山本石子原遺跡で発見された前期旧石器は、その後の第2次調査にその解明を待つようになり、同遺跡の縄文時代早期の土壌群と土器片・石器の多量発見、弥生時代の方形周溝墓群と古墳との関連性の解明、縄文時代前期・中期の集落立地を知る御田・上の平東部・滝沢井尻・小畑外遺跡、弥生時代後期から古墳・平安時代にかけての集落構成を把握できた飯田インター付近の遺跡群、同遺跡群においては、中世住居址群と、柱穴群や特殊遺構の確認さえあって、学界に新知見をもたらすものが多く、調査の成果は極めて多大であった。

報告書刊行に当って、この発掘調査の実務に深いご理解をいただいた日本道路公区名古屋支社、同飯田工事事務所、余寒まだ去りやらない4月から炎暑のきびしい7月にかけて、長期間この調査に補助された大沢団長を始めとする調査団の各位、この調査にご協力いただいた、長野県飯田中央道事務所、飯田市および阿智村当局等関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

昭和48年3月20日

長野県教育委員会教育長 小松 孝 志

例 言

- 1 本書は、昭和47年度に日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいた発掘調査のうち、飯田市地内その2の調査報告書である。
- 2 本書は、契約期間内（昭和48年3月20日）にまとめることが義務づけられており、なお、調査団（飯田班）は三か所の調査及び整理をしているため、整理期間内に資料をまとめるのがやっとであり、その上、本年は飯田本部のなくなることもあって、調査結果についての充分検討・研究することはできない。調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示することに重点をおいた。本年は住居址内出土石器について図示をセレクトした。石器種別の出土数については表を参照してほしい。編纂は神村があつた。
- 3 遺構図において、ドットは焼土を示す。埋壘は○と、◎（伏壘）で表示してある。ピットの深さは数字で表示してある。縮尺については図に示してある。
- 4 図面作成については、調査員が全員であつた。
- 5 石器の実測図の中で「特殊磨石」については、A面—巾0.5～3cm前後の磨面、B面—A面以外の磨面、C部—敲打器として使用している面、D部—凹石として使用された凹部、E部—台石として使用されたダメツツ部と区別し、A～Eの記号で表示してある。
- 6 遺跡の担当者の分組は、調査員協議して決め、それぞれの文末に文責を記した。
- 7 遺物や関係図面、諸記録は、飯田市仲之町の下伊那教育会南別館の土蔵に保管しており、遺物の一部は同所の教育参考館に展示してある。

目 次

○ はしがき	
I 調査状況	1
1 調査にいたるまで	1
1) 中央道関係の経過	1
2) 発掘調査委託	9
3) 発掘調査開始までの準備	14
2 調査の実施と経過	16
1) 調査の開始と経過	16
2) 発掘調査協力者	16
3) 現地指導・見学者	18
3 発掘調査の方法	19
II 飯田市伊賀良・山本地区の概況	20
1 伊賀良・山本地区の環境	20
2 伊賀良・山本地区の遺跡	21
1) 伊賀良地区の遺跡	22
2) 山本地区の遺跡	23
3) 伊賀良・山本地区の古墳	24
III 調査遺跡	30
1 かぶき畑遺跡	30
1) 位置	30
2) まとめ	30
2 柳田遺跡	31
1) 位置	31
2) 遺構と遺物	31
ア住居址 イ土壇 ウその他の遺物	
3) まとめ	33
3 山田遺跡	34
1) 位置	34
2) 遺物	34
3) まとめ	34
4 石子原遺跡	35

1) 位置	35
2) 遺構と遺物	35
ア 埴型文土器とその遺構 イ 縄文時代中期の遺構 ウ 方形周溝墓と墓壇 エ その他の遺物	
3) まとめ	39
5 石ノ原古墳	40
1) 位置と外形	40
2) 古墳築造状態	40
3) 内部構造	41
ア 墓壇 1 イ 墓壇 2 ウ 墓壇 3 エ 墓壇 4	
4) 出土遺物	42
5) まとめ	42
6 ようじ原遺跡	43
1) 位置	43
2) まとめ	43
7 上の平東部遺跡	44
1) 位置	44
2) 遺構と遺物	44
ア 1号住居址 イ 2号住居址 ウ その他の遺物	
3) まとめ	45
8 寺山遺跡	46
1) 位置	46
2) 遺物	46
3) まとめ	46
9 六反田遺跡	47
1) 位置	47
2) 遺構と遺物	47
ア 住居址 イ 土壇 ウ その他の遺物	
3) まとめ	49
10 大東遺跡	50
1) 位置	50
2) 遺構と遺物	50
ア 住居址 イ 土壇 ウ 溝状遺構 エ その他の遺物	
3) まとめ	52
11 酒屋前遺跡	53
1) 位置	53
2) 遺構と遺物	53

	ア住居址 イ竪穴状遺構 ウ柱穴群 エ竪線状遺構 オ溝状遺構 カ!壕 キその他の遺物	
3)	まとめ	60
12	滝沢井尻遺跡	61
1)	位置	61
2)	遺構と遺物	61
	ア住居址 イ柱穴群 ウ方形泥濘墓 エ溝状遺構 オ土壕 カその他の遺物	
3)	まとめ	64
13	小畑外・辻垣外遺跡	65
1)	位置	65
2)	遺構と遺物	65
	ア住居址 イ柱穴群 ウ土器集中地 エ焼土群 オ配石 カ溝状遺構 キ土壕 クその他の遺物	
3)	まとめ	73
14	三壺淵遺跡	74
1)	位置	74
2)	遺構と遺物	74
	ア住居址 土壕 ウその他の遺物	
3)	まとめ	75
15	上の金谷遺跡	76
1)	位置	76
2)	遺構と遺物	76
	ア住居址 イ柱穴群 ウ溝状遺構 エ土壕 オその他の遺物	
3)	まとめ	81
16	大門原B遺跡	82
1)	位置	82
2)	調査	82
	あとがき	83

挿 図 目 次

第 1 図	飯田市地内中央道用地内遺跡分布図及び地形図	106
第 2 図	飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図	107
第 3 図	飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図	108
第 4 図	飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図	109
第 5 図	飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図	110
第 6 図	柳田遺跡・石子原古墳・石子原遺跡構全体図	111
第 7 図	石子原遺跡土壌群及び方形周溝墓	112
第 8 図	石子原古墳実測図	113
第 9 図	上の平東部 1 号・2 号住居址	114
第 10 図	六反田遺跡遺構全体図及び 1 号・2 号住居址	115
第 11 図	六反田遺跡 3 号・4 号・5 号住居址	116
第 12 図	六反田遺跡土壌図及び大東遺跡遺構全体図	117
第 13 図	大東遺跡 1 号・2 号住居址	118
第 14 図	大東遺跡 3 号・4 号住居址及び土壌図	119
第 15 図	大東遺跡土壌図	120
第 16 図	大東遺跡土壌図	121
第 17 図	酒屋前遺跡遺構全体図及び 1 号・2 号	122
第 18 図	酒屋前遺跡 3 号・4 号・5 号・6 号住居址	123
第 19 図	酒屋前遺跡 7 号・8 号住居址	124
第 20 図	酒屋前遺跡 9 号・10 号住居址	125
第 21 図	酒屋前遺跡 11 号・12 号住居址	126
第 22 図	酒屋前遺跡 13 号・14 号住居址	127
第 23 図	酒屋前遺跡 15 号・16 号住居址	128
第 24 図	酒屋前遺跡壁穴状遺構及び柱穴群 1・2	129
第 25 図	酒屋前遺跡精練状遺構及び土壌図	130
第 26 図	酒屋前遺跡土壌図	131
第 27 図	酒屋前遺跡土壌図	132
第 28 図	酒屋前遺跡土壌 D 群	133
第 29 図	酒屋前遺跡土壌図	134
第 30 図	滝沢井尻遺跡遺構全体図及び 1 号・2 号住居址	135
第 31 図	滝沢井尻遺跡 3 号・4 号・5 号住居址	136

第 32区	滝沢井尻遺跡 6号・7号住居址及び柱穴址	137
第 33区	滝沢井尻遺跡方形周溝墓及び溝状遺構 1	138
第 34区	滝沢井尻遺跡溝状遺構 2・3 及び土壌区	139
第 35区	滝沢井尻遺跡土壌区	140
第 36区	小畑外・辻垣外遺跡遺構園及び 1号・2号住居址	141
第 37区	小畑外・辻垣外遺跡 3号・4号住居址	142
第 38区	小畑外・辻垣外遺跡 5号・6号住居址	143
第 39区	小畑外・辻垣外遺跡 7号・8号・9号・10号住居址	144
第 40区	小畑外・辻垣外遺跡 11号・12号住居址	145
第 41区	小畑外・辻垣外遺跡 13号・18号住居址	146
第 42区	小畑外・辻垣外遺跡 14号・15号・16号・19号住居址	147
第 43区	小畑外・辻垣外遺跡 17号・21号住居址	148
第 44区	小畑外・辻垣外遺跡 20号・22号住居址	149
第 45区	小畑外・辻垣外遺跡柱穴群及び土器集中地Ⅱ	150
第 46区	小畑外・辻垣外遺跡配石及び 0号～22号土壌区	151
第 47区	小畑外・辻垣外遺跡 23号～45号土壌区	152
第 48区	小畑外・辻垣外遺跡 46号～69号・112号土壌区	153
第 49区	小畑外・辻垣外遺跡 70号～94号土壌区	154
第 50区	小畑外・辻垣外遺跡 95号～111号土壌区	155
第 51区	三ヶ淵遺跡遺構全体図及び 1号・2号・3号住居址	156
第 52区	上の金谷遺跡遺構全体図及び 1号住居址	157
第 53区	上の金谷遺跡 2号・3号・4号住居址	158
第 54区	上の金谷遺跡 5号・6号住居址	159
第 55区	上の金谷遺跡 7号・8号・10号住居址	160
第 56区	上の金谷遺跡 9号住居址及び 14号土壌区	161
第 57区	上の金谷遺跡 11号・12号住居址及び柱穴群Ⅰ	162
第 58区	上の金谷遺跡柱穴群Ⅱ	163
第 59区	上の金谷遺跡七塚園	164
第 60区	柳田遺跡出土土器	165
第 61区	石子原遺跡出土土器	166
第 62区	石子原遺跡出土土器	167
第 63区	石子原遺跡出土土器	168
第 64区	石子原遺跡出土土器	169
第 65区	石子原古墳及び石子原遺跡出土土器・石製品	170
第 66区	石子原遺跡及び上の平東部遺跡出土土器	171
第 67区	上の平東部遺跡・六反出遺跡及び大東遺跡出土土器	172

第 66 区	六反田遺跡出土土器	173
第 66 区	六反田遺跡出土土器	174
第 70 区	酒屋前遺跡出土土器	175
第 71 区	酒屋前遺跡出土土器	176
第 72 区	酒屋前遺跡 7 号住居址出土土器	177
第 73 区	酒屋前遺跡出土土器	178
第 74 区	酒屋前遺跡出土土器	179
第 75 区	酒屋前遺跡出土土器	180
第 76 区	酒屋前遺跡出土土器	181
第 77 区	酒屋前遺跡土壇 58 出土土器	182
第 78 区	滝沢井尻遺跡出土土器	183
第 79 区	滝沢井尻遺跡 3 号住居址出土土器	184
第 80 区	滝沢井尻遺跡出土土器	185
第 81 区	滝沢井尻遺跡出土土器	186
第 82 区	小垣外・辻垣外遺跡出土土器	187
第 83 区	小垣外・辻垣外遺跡出土土器	188
第 84 区	小垣外・辻垣外遺跡 9 号住居址出土土器	189
第 85 区	小垣外・辻垣外遺跡出土土器	190
第 86 区	小垣外・辻垣外遺跡出土土器	191
第 87 区	小垣外・辻垣外遺跡 20 号住居址出土土器	192
第 88 区	小垣外・辻垣外遺跡出土土器	193
第 89 区	小垣外・辻垣外遺跡土器集中坑Ⅱ出土土器	194
第 90 区	小垣外・辻垣外遺跡出土土器	195
第 91 区	小垣外・辻垣外遺跡出土土器	196
第 92 区	小垣外・辻垣外遺跡出土土器	197
第 93 区	小垣外・辻垣外遺跡出土土器	198
第 94 区	小垣外・辻垣外遺跡出土土器	199
第 95 区	小垣外・辻垣外遺跡出土土器	200
第 96 区	小垣外・辻垣外遺跡出土土器	201
第 97 区	三倉沢遺跡出土土器	202
第 98 区	三倉沢遺跡及び上の金谷遺跡出土土器	203
第 99 区	上の金谷遺跡出土土器	204
第 100 区	上の金谷遺跡 10 号住居址出土土器	205
第 101 区	上の金谷遺跡出土土器	206
第 102 区	上の金谷遺跡出土土器	207
第 103 区	柳田遺跡出土土器	208

第 104回	柳田遺跡・山田遺跡及び石子原遺跡出土石器	209
第 105回	石子原遺跡出土石器	210
第 106回	石子原遺跡出土石器	211
第 107回	石子原遺跡出土石器	212
第 108回	石子原遺跡出土石器	213
第 109回	石子原遺跡出土石器	214
第 110回	石子原遺跡出土石器	215
第 111回	石子原遺跡出土石器	216
第 112回	上の平東部遺跡・寺山遺跡及び六反田遺跡出土石器	217
第 113回	大東遺跡出土石器	218
第 114回	酒屋前遺跡出土石器	219
第 115回	酒屋前遺跡出土石器	220
第 116回	酒屋前遺跡出土石器	221
第 117回	滝沢井尻遺跡出土石器	222
第 118回	小垣外・辻垣外遺跡出土石器	223
第 119回	小垣外・辻垣外遺跡出土石器	224
第 120回	小垣外・辻垣外遺跡出土石器	225
第 121回	小垣外・辻垣外遺跡出土石器	226
第 122回	小垣外・辻垣外遺跡出土石器	227
第 123回	小垣外・辻垣外遺跡出土石器	228
第 124回	三壺淵遺跡及び上の金谷遺跡出土土器	229
第 125回	上の平東部遺跡・寺山遺跡・酒屋前遺跡出土土製品及び石製品	230
第 126回	酒屋前遺跡精錬状態出土土製品	231
第 127回	酒屋前遺跡・滝沢井尻遺跡・小垣外・辻垣外遺跡出土土製品及び石製品	232
第 128回	小垣外・辻垣外遺跡・三壺淵遺跡・上の金谷遺跡出土土製品及び石製品	233
第 129回	柳田遺跡・酒屋前遺跡・小垣外・辻垣外遺跡・上の金谷出土土製円板	234
第 130回	石子原古墳出土鉄製品	235
第 131回	酒屋前遺跡・滝沢井尻遺跡・小垣外・辻垣外遺跡・三壺淵遺跡・上の金谷遺跡出土鉄製品及び古銭	235
第 132回	柳田遺跡・上の平東部遺跡・酒屋前遺跡及び小垣外遺跡埋蔵状態図	237

図 版 目 次

第一図	かぶき畑・柳田遺跡	238
第二図	山本地区遺跡	239
第三図	柳田遺跡住居址	240
第四図	柳田遺跡出土土器	241
第五図	柳田遺跡住居址	242
第六図	石子原遺跡ピット・土壌	243
第七図	石子原遺跡配石	244
第八図	石子原遺跡方形周溝竈	245
第九図	石子原遺跡方形周溝竈	246
第十図	石子原遺跡方形周溝竈	247
第十一図	石子原遺跡・石子原古墳出土遺物	248
第十二図	石子原古墳	249
第十三図	石子原遺跡墓塚	250
第十四図	石子原古墳出土遺物	251
第十五図	石子原遺跡墓塚と出土状態	252
第十六図	石子原古墳出土遺物	253
第十七図	石子原古墳	254
第十八図	伊賀良地区南部の遺跡	255
第十九図	上の平東部遺跡住居址	256
第二十図	上の平東部遺跡出土塑像	257
第二十一図	上の平東部遺跡住居址	258
第二十二図	六反田遺跡住居址	259
第二十三図	六反田遺跡住居址	260
第二十四図	六反田遺跡住居址・土壌	261
第二十五図	大東遺跡住居址	262
第二十六図	大東遺跡住居址	263
第二十七図	大東遺跡住居址	264
第二十八図	大東遺跡土壌	265
第二十九図	伊賀良地区北部の遺跡	266
第三十図	酒屋前遺跡住居址	267
第三十一図	酒屋前遺跡住居址	268
第三十二図	酒屋前遺跡住居址	289

第三十三区	酒屋前遺跡住居址	270
第三十四区	酒屋前遺跡出土土器	271
第三十五区	酒屋前遺跡住居址	272
第三十六区	酒屋前遺跡住居址	273
第三十七区	酒屋前遺跡住居址	274
第三十八区	酒屋前遺跡住居址	275
第三十九区	酒屋前遺跡住居址	276
第四十区	酒屋前遺跡住居址	277
第四十一区	酒屋前遺跡特殊遺構	278
第四十二区	酒屋前遺跡出土土器	279
第四十三区	酒屋前遺跡土壁	280
第四十四区	酒屋前遺跡土壁・溝	281
第四十五区	滝沢井灰遺跡住居址	282
第四十六区	滝沢井灰遺跡住居址	283
第四十七区	滝沢井灰遺跡出土遺物	284
第四十八区	滝沢井灰遺跡住居址	285
第四十九区	滝沢井灰遺跡住居址	286
第五十	滝沢井灰遺跡方形周溝墓	287
第五十一区	滝沢井灰遺跡出土遺物	288
第五十二区	小垣外・辻垣外遺跡住居址	289
第五十三区	小垣外・辻垣外遺跡住居址	290
第五十四区	小垣外・辻垣外遺跡住居址	291
第五十五区	小垣外・辻垣外遺跡住居址	292
第五十六区	小垣外・辻垣外遺跡住居址	293
第五十七区	小垣外・辻垣外遺跡住居址	294
第五十八区	小垣外・辻垣外遺跡出土遺物	295
第五十九区	小垣外・辻垣外遺跡住居址	296
第六十区	小垣外・辻垣外遺跡住居址	297
第六十一区	小垣外・辻垣外遺跡住居址	298
第六十二区	小垣外・辻垣外遺跡住居址	299
第六十三区	小垣外・辻垣外遺跡住居址	300
第六十四区	小垣外・辻垣外遺跡土器集中Ⅱ	301
第六十五区	小垣外・辻垣外遺跡出土遺物	302
第六十六区	小垣外・辻垣外遺跡土壁	304
第六十七区	三壺淵遺跡住居址	304
第六十八区	三壺淵遺跡住居址	305

第六十九回	上の金谷遺跡住居址	306
第七十回	上の金谷遺跡住居址	307
第七十一回	上の金谷遺跡出土遺物	308
第七十二回	上の金谷遺跡住居址	309
第七十三回	上の金谷遺跡住居址	310
第七十四回	上の金谷遺跡住居址	311
第七十五回	上の金谷遺跡出土遺物	312
第七十六回	上の金谷遺跡住居址	313
第七十七回	上の金谷遺跡出土遺物	314
第七十八回	上の金谷遺跡住居址	315
第七十九回	調査関係者	316
第八十回	スナップ	317

目 次

第1表	飯田市伊賀良・山本地元遺跡一覧表	25
第2表	飯田市地内その2 遺構一覧表	84
第3表	秋田市地内その2 遺跡別出土遺物一覧表	85
第4表	飯田市地内その2 住居址一覧表	86
第5表	飯田市地内その2 方形周溝墓・古墳一覧表	91
第6表	土塚一覧表	92
第7表	土製円板一覧表	105

1 調査状況

1 調査にいたるまで

1) 中央道関係の経過

ア 整備計画とその経過

昭和32年4月、高度経済成長政策の一つとして「国土開発縦貫自動車道建設法」が公布され、その中の一つに中央自動車道予定路線も発表された。その後、諏訪回り案に改正され、本線を西の宮線、岡谷から分岐し長野へ通ずるものを長野線と呼ぶ。昭和41年7月に五縦貫道整備計画が決定され、その後道路整備施行命令が日本道路公団に出されている。中央自動車道西の宮線は、小牧・東京間やく360km、そのうち長野県内は、岐阜県中津川市から恵那山トンネルで伊那谷に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓を通過して山梨県に至るやく122kmとなっている。

昭和41年、日本道路公団名古屋支社は飯田市に飯田工事事務所を設置し、その後の進展に伴い恵那山トンネル東工事事務所、伊那市・諏訪市にも工事事務所が設けられた。長野県でもこれに呼応して、県庁内に長野県中央道建設対策本部が組織され、企画部に中央道課が、その出先機関として中央道事務所が、飯田・伊那・諏訪3市に置かれた。このような現地体制の整備につれて、ルート発表・立入測量・設計協議・市杭設置そして用地買収へと業務は段階的に進むのではあるが、現実には遅々として進まず、年月を費やしていたが、昭和45年頃から用地買収も進展し、それに伴って全線がいくつもの工区に分けられて本線工事が発注されている。昭和42年3月恵那山トンネル補助トンネル工事が始まり、昭和44年11月には恵那トンネル本線トンネル工事に着手し、昭和45年には阿智工区から本線工事に入っている。昭和47年後半になると埋蔵文化財発掘調査の終るのを追い駆けるように、飯田・高森・松川・飯島・駒ヶ根工区には大形機械が導入されて整地作業がなされ、長期間人手をかけて掘りあげた遺跡が、短時日のうちに姿を消している。ここで問題になることは、日本道路公団から施工業者への工事仕様書の中に、調査予定の埋蔵文化財包蔵地が記載されていないことがあって、工事によって発掘調査前の遺跡が破壊された例のあったことである。

イ 埋蔵文化財の対策とその経過

縦貫道計画が発表された昭和41年頃、開発が全国的に広まりだして、各地で文化財保護についての問題が取りあげられていた。文化財保護委員会（現文化庁）では、開発機関との間でその保護についての調整を計っていた頃であったので、日本道路公団との間で、昭和42年9月に「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」を取交した。それより先、昭和41年には、中央自動

車道関係県文化財主管課協議会を開催し、文化財の取扱いについて打合せている。県教育委員会では、昭和42年に入って関係市町村連絡協議会を、飯田・伊那・諏訪3地区で開きその対策を打合せる。さらに、昭和42年度庫補助事業として、中央自動車道用地内とその周辺の遺跡分布調査を実施し、下伊那地区147遺跡、上伊那地区112遺跡、諏訪地区90遺跡計349遺跡を確認する。その後ルート発表に伴い補足調査を実施し、中央道用地内には、下伊那地区で63遺跡(含斜坑広場)、上伊那地区83遺跡、諏訪地区44遺跡の計190遺跡の存在を知る。分布調査では埋蔵文化財を除く文化財についても調査しているが、その取扱いについては「覚書」に触れられていないこともあって、関係市町村教育委員会にその交渉が任せられている。「覚書」にもとづいて、埋蔵文化財包蔵地(以下「遺跡」という)の取扱いについては、その下交渉及び発掘調査は各県教育委員会が当ることになっており、文化庁の指導もあって、長野県が中心となり愛知・岐阜・山梨の4県で「中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会」を持ち、この会には日本道路公団関係者も加って、昭和42、43、44年に開催されたが、管轄公団支社の業務進展がまちまちであり、各県の取り組み方も様でないため、充分な連絡調整もできないうちに、愛知・山梨・岐阜県の項で、路線内の遺跡発掘調査が開始されていった。

遺跡の取扱いについては、「覚書」の中で、A・路線計画からはずすもの、B・路線計画の中に入れるが保護するもの、C・路線計画の中に入れ、事前に発掘調査をし記録して保存するもの3区分されている。それに基づいて、中央自動車道用地内遺跡についても、A・B・Cの3区分されていたが、路線決定の後では、その変更が容易でなく、結局190遺跡すべてCとなった。この最終決定は、県教育委員会の意見聴取に基づいて文化庁でなされる。これらの遺跡の発掘調査は、日本道路公団が費用負担して、県教育委員会と契約して実施するように「覚書」で定められている。しかし、県教育委員会では、直営の発掘調査体制を組織することが困難であるとの立場から、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、その中に遺跡調査団をおいて業務を遂行することにし、そこへ指導主事を調査主任として出向させることにした。

この調査体制が確立する前の昭和45年3月に、飯田市上飯田地区の2遺跡(さつみ・古屋垣外)の発掘調査が行われた。この調査は、年度末も迫っているため県教育委員会が受託することは困難なためと、試み的な意味もあって、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、同調査会が受託して実施した。暫定的な措置であったが、長野県下最初の中央道用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査である。

同年4月から、本格的な発掘調査体制確立のために、県教育委員会社会教育課(後に文化課に独立)では、担当指導主事を2名増員し、4名とする。一方では、各地区の関係市町村教育委員会との打合せ会を持ち、日本道路公団名古屋支社との協議も具体化し、6月と7月の現地協議によって昭和45年度の調査地区も決定した。そこで、7月には「長野県中央道遺跡調査会」を再結成した。

昭和45年度は、8月に下伊那郡阿智村地内7遺跡(調査費179万円)、9月に飯田地内その1地区10遺跡(調査費1590万円)の発掘調査委託契約を相次いで結び、9月2日には、下伊那郡阿智村川畑遺跡において、長野県下中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査の厳式を挙行している。翌9月3日から2班編成の調査団によって発掘調査を開始している。10月に上伊那郡宮田村地内その1地区6遺跡(調査費500万円)の発掘調査委託契約を結び、昭和46年3月45年度の業務を完了した。

昭和46年度は、4月に、上伊那郡飯島町内その1地区(調査費1224万円)、8月に下伊那郡高森町内その1地区(調査費3120万円)、9月に下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1杉の水平遺跡(調査費730万円)

の発掘調査委託契約が結ばれ、発掘調査が進められている。なお上伊那郡中田切川橋梁工事先工に伴う上伊那郡飯島町内その2久根平遺跡（調査費123万円）の発掘調査委託契約が、9月に結ばれ、特設調査団が組織され調査を完了している。

昭和47年度は、買収契約も進展し、上下伊那郡下の各工区において工事発注が続出する年とあって、県教育委員会文化課においては、担当指導主事を3名増員し、4班編成の調査団を組織し、飯田・下伊那地区に2班、伊那・上伊那地区に2班づつ常駐させて発掘調査に当たっている。4月に飯田市内その2地区17遺跡（調査費2367.5万円）、上伊那郡飯島町内その3地区8遺跡（調査費677.1万円）、伊那市西春近地区18遺跡（調査費3361.6万円）の発掘調査委託契約が成立し、広範囲にわたる発掘調査が開始されている。さらに、下伊那郡高森町内その2地区5遺跡（調査費2002万円）、下伊那郡松川町内12遺跡（調査費1864.3万円）、駒ヶ根市内8遺跡（調査費563.5万円）の発掘調査委託契約が7月に成立している。8月には、上伊那郡南箕輪村内その1地区5遺跡（調査費1051.5万円）の発掘調査委託契約が結ばれている。さらに飯田市山本地籾石子原遺跡において多量に発見された石器群は、中期ローム層包含の旧石器として、その重要性が認められて第2次調査の再協議が成立し、飯田市内その3（調査費410万円）として発掘調査委託契約が結ばれている。10月には上伊那郡南箕輪村内その2地区4遺跡（調査費514.4万円）と、上伊那郡の天竜川橋梁工事と辰野町平出除構工事に伴う辰野町内その1地区3遺跡（調査費497.2万円）の発掘調査委託契約が成立している。本年度調査された遺跡は、数にして81、面積にして132180㎡と広大であるばかりでなく、遺構・遺物の発見も膨大にして、発掘調査の成果も多大である。45年発掘調査開始以来3年目を終ろうとしている今日、出土遺物の累積も予期以上に多く、関係市町村当事者や、考古学者等からその資料の保存・活用の方途についての要請が提出されている。中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査も、昭和48年度の上伊那地区北半と、諏訪地区の調査や、やがて予想される長野線の発掘調査を含めて、新しい局面を迎えているように思える。

ウ 中央道関係の経過一覽

この経過一覽は、前項のものと重複するものも多いが、10数年にわたる道路建設の過程と発掘調査の経過は、将来活用されることがあると思われるので記載した。中央道建設法案とそれに基づく機関、県の対策機関設置、ルート発表の経過、文化財保護のための協議・諸会合、発掘調査に関する経過については全部記録した。用地買収契約および工事着工については、最初のものだけ記載した。なお、発掘調査委託契約の地区名について、昭和47年度から呼称が変わっているか、ここでは従来の例にならっている。

- 32・4・16 国土開発縦貫自動車道建設法の公布（施行同年7月31日）。
- 32・7・25 中央自動車道予定路線を定める法律制定
- 39・6・16 国土開発縦貫自動車道建設法の一部改正により、中央自動車予定路線は諏訪回りに改正
- 41・7・25 五縦貫道整備計画決定、道路整備地行命令が日本道路公団に出る。
- 〃・8・12 長野県中央自動車道対策協議会開催
- 〃・8・12 志那山トンネル立入調査開始
- 〃・9・22 中央自動車道長野県建設協力会開催
- 〃・9・30 下伊那郡阿智村の一部、飯田市、豊町（14km）ルート発表

- 41・11・16 長野県中央道建設対策本部設置、県企画部に中央道課および飯田中央道事務所設置
- #・12・15 中央自動車道関係県文化財主管課協議会開催（東京）
- 42・2・14 中央道建設用地内文化財の取扱いについて関係市町村連絡協議会開催（下伊那地区）
- #・2・21 " " " "（上伊那地区）
- #・2・22 " " " "（諏訪地区）
- #・3・23 恵那山トンネル（4.7km）ルート発表
- #・3・28 下伊那郡上郷町・飯田市盛光寺・高森町・松川町（14.5km）ルート発表
- #・3・31 恵那山トンネル補助トンネル工事着工
- #・4・15 文化庁で中央自動車道用地内の埋蔵文化財保護対策打合せ会開催
- #・5・4 伊那中央道事務所設置
- #・5・30 中央道建設地域内埋蔵文化財分布調査費国庫補助申請
- #・6・13 中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第1回 長野県庁）
- #・8・1 下伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 147
 -12 (団長 大沢和夫)
- #・11・1 上伊那郡飯島町・駒ヶ根市・宮田村・伊那市・南箕輪村（36.6km）ルート発表
- #・11・10 上伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 112
 -26 (団長 林 茂樹)
- #・11・27 諏訪地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 90
 -12・15 (団長 藤森栄一)
- #・12・16 下伊那郡阿智村飯島・智里地区（5.65km）ルート発表
- 43・2・27 公団名古屋支社と中央道埋蔵文化財の保護措置について協議（43年の発掘調査について）
- #・3・5 公団本社と保護措置について協議（43年の発掘調査について）
- #・7・23 下伊那郡阿智村智里飯島地区、県内のトップをきって用地買取契約成立
- #・10・12 中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第2回 松本市）
- 44・3・18 " " " "（第3回 岐阜市）
- #・7・15 公団名古屋支社と協議（飯田市上飯田地区の発掘調査について）
- #・8・12 上伊那郡辰野町（8km）ルート発表
- #・10・3 飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社から意見聴取（県教委回答 12・11）
- #・10・8 中央道関係市町村教委連絡協議会開催（飯田市）
- #・10・20 飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社との現地協議
- #・10・31 中央道関係市町村教委連絡協議会開催（伊那市）
- #・11・11 恵那山トンネル本線トンネル工事起工式
- #・12・11 公団名古屋支社と協議（45年の発掘調査について）
- 45・1・29 諏訪郡富士見町（11.2km）ルート発表
- #・2・2 公団名古屋支社と協議（上飯田の3遺跡と45年度の発掘調査について）
- 45・2・28 岡谷市と諏訪市の一部（14.7km）ルート発表

- 45・2・24 下伊那郡阿智村殿島地区において、県下最初の平地地区本線工事開始
- ※・2・27 長野県中央道遺跡調査会結成（飯田市上飯田地区の調査に限る）
- ※・3・2 公団名古屋支社と長野県中央道遺跡調査会との間で、上飯田地区2遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 80万円）
- ※・3・5 飯田市上飯田地区さつみ・古屋垣外遺跡の発掘調査開始（～3・21）（副長 大沢和夫）
- ※・3・31 飯田市上飯田さつみ・古屋垣外遺跡発掘調査報告書刊行
- ※・4・22 公団名古屋支社と協議（45年度の発掘調査について）
- ※・4・23 上・下伊那地区中央道用地内遺跡視察（県教育委員会担当者）
- ※・5・8 下伊那郡阿智村～松川町間（57遺跡）埋蔵文化財包蔵地についての意見聴取（県教育委員会回答 5・26）
- ※・5・14 中央自動車道西の宮線起工式（於多治見市）
- ※・6・1 公団名古屋支社と協議（発掘調査上の問題について）
- ※・6・9 下伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（飯田市）
- ※・6・11 下伊那郡阿智村7遺跡・飯田市（上飯田・赤光寺）7遺跡・黒町2遺跡・上郷町1遺跡について、公団名古屋支社と現地協議
- ※・6 昭和45年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査予算案を6月県会に提出
- ※・6・29 上伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（伊那市）
- ※・6・30 諏訪地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（諏訪市）
- ※・7・8 上伊那郡宮田村地内7遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（～10日）
- ※・7・22 長野県中央道遺跡調査会結成準備会・第1回理事会開催（飯田市）
- ※・8・17 下伊那郡阿智村地内7遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 179万円）
- ※・9・1 飯田地区その1地内10遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 1590万円）
- ※・9・2 中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査納入式挙行（下伊那郡阿智村小野川川畑遺跡）
- ※・9・3 下伊那郡阿智村地内7遺跡（川畑・北垣外・橋場・矢平Ⅱ・杉ヶ洞・宮の脇・枅塚）発掘調査開始（終了9・22）
- ※・9・3 両谷市内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～5日）
- ※・9・5 伊沢県教育長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- ※・9・7 諏訪郡富士見町内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～10日）
- ※・9・8 田中県教育次長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- ※・9・22 飯田地区その1地内10遺跡（山岸・天伯B・権現堂前・さつみ・赤坂・宮崎A・宮崎B・大門原B・大門原D・大久保）の発掘調査開始（終了46・1・18）
- ※・10・19 上伊那郡宮田村地内6遺跡（高河原・釈迦堂・宮の沢・元宮神社東・天伯古墳・円通寺）の発掘調査開始（終了45・12・18）
- ※・10・28 公団名古屋支社総務部長、田中県教育次長、菅原堂前・大門原B遺跡視察
- ※・10・29 公団名古屋支社副支社長、大門原B・大門原D遺跡視察
- ※・11・16 長野県中央道遺跡調査会第2回理事会開催（飯田市南光寺大門原B・宮崎A、上伊那郡宮田

村天伯古墳視察、理事会宮田村福祉センター)

- 45・11・17 公団名古屋支社との協議 (昭和46年度発掘調査地区の選定について)
- ※ 11・28 下伊那郡阿智村地内発掘調査報告会開催 (下伊那郡阿智村智里東小学校)
- ※ 12・5 上伊那郡宮田村地内発掘調査報告会開催 (上伊那郡宮田村福祉センター)
- ※ 12・25 茅野市・原村・諏訪市の一部 (12.4km) ルート発表、これをもって県内やく122kmのルート発表完了
- 46・1・12 伊沢県教育長、下伊那郡群町山岸遺跡視察
- ※ 2・1 公団名古屋支社と協議 (昭和46年度の発掘調査地区について、飯田市山本・伊賀良地区用地内遺跡視察)
- ※ 2・2 下伊那郡高森町・松川町・上伊那郡飯島町地内遺跡について、公団名古屋支社と現地協議 (昭和46年度発掘調査地区決定)
- ※ 2・28 上伊那郡宮田村地内中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ※ 3・11 飯田地区その1発掘調査報告会開催(公団・各事務所・市町村教委に対して)
- ※ 3・15 飯田地区その1発掘調査報告会開催 (一般公開)
- ※ 3・20 飯田地区その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ※ 4・1 飯島町地内その1地区(七久保)7遺跡の発掘調査委託契約成立 (委託金額 1224万円)
- ※ 4・12 飯島町地内その1地区(七久保)発掘調査団結式挙行 (飯島町役場)
- ※ 4・13 飯島町地内その1、7遺跡(鑄物師屋・鳴尾天白・鳴尾・尾越・道満・北原東・小段遺跡)の発掘調査開始 (終了46・7・3)
- ※ 4・26 長野県中央道遺跡調査会第3回理事会開催 (伊那市上伊那郷土館)
- ※ 5・24 恵那山トンネル新坑口および土捨場問題協議会、長野県庁企画部長室で開催 (公団名古屋支社、恵那山トンネル東工事事務所、阿智村教育委員会、同建設課、長野県中央道課、飯田中央道事務所、下伊那地方事務所尚工建設課、飯田教育事務所、長野県教育委員会)
- ※ 6・7 下伊那郡阿智村重原杉の木平・見の高遺跡緊急分布調査 (一8)
- ※ 6・16 公団本社・同名古屋支社と協議 (下伊那郡阿智村重原恵那山トンネル新坑口と土捨場予定地の保護措置について)
- ※ 7・1 公団名古屋支社から恵那山トンネル飯田方新坑広場(杉の木平遺跡)埋蔵文化財について意見聴取
- ※ 7・15 飯島町地内その1発掘調査報告会開催 (飯島町役場七久保支所)
- ※ 7・20 公団名古屋支社総務部長と県教育長の協議 (恵那山トンネル新坑土捨場問題について)
- ※ 8・1 下伊那郡高森町地内その1 (10遺跡) の発掘調査委託契約成立 (委託金額 3120万円)
- ※ 8・6 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査団結式と打合せ会 (高森町役場)
- ※ 8・10 下伊那郡高森町地内その1地区、10遺跡 (乃矢・無縁堂・神堂垣外・鑄師屋A・埋蔵寺前・大島山東部・赤羽根・出原西部・出早神社附近・正木原I) 発掘調査開始 (9・14中断、10・23再開、終了47・1・14)
- ※ 8・18 恵那山トンネル飯田方新坑広場埋蔵文化財保護措置について県教委回答

- 46・8・30 公園名古屋支社と恵那山トンネル斜坑広場（杉の木平遺跡）の現地協議
- ※・8・31 公園名古屋支社と上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）の現地協議
- ※・9・4 伊沢長野県教育長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡・高森町鐘鐺原遺跡視察
- ※・9・10 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査打合せ会（阿智村駒場公民館）
- ※・9・13 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額730万円）
- ※・9・14 赤尾長野県教育次長、下伊那郡高森町鐘鐺原遺跡視察
- ※・9・16 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査開始（終了11・1）
- ※・9・17 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）委託契約成立（委託金額 123万円）
- ※・9・20 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）発掘調査開始（終了10・13）
- ※・11・18 長野県議会社会文教委員会一行下伊那郡高森町瑞瑞寺前遺跡視察
- ※・11・19 長野県中央道遺跡調査会第4回理事会開催（高森町畜産センター）
- 47・1・25 飯田市山本・伊賀良12遺跡、下伊那郡那珂1遺跡について公園名古屋支社と現地協議
- ※・1・26 下伊那郡高森町地内4遺跡、松川町地内10遺跡、上伊那郡飯島町地内8遺跡、宮田町地内1遺跡、駒ヶ根市地内8遺跡について公園名古屋支社と現地協議
- ※・1・27 伊那市西春近地内18遺跡について公園名古屋支社と現地協議
- ※・2・29 上伊那郡飯島町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ※・2・29 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ※・3・20 下伊那郡高森町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ※・3・20 下伊那郡阿智村斜坑広場その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ※・3・25 下伊那郡阿智村園原斜坑広場（杉の木平遺跡）発掘調査報告会開催（智恵西診療所）
- ※・3・26 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（高森中学校）
- ※・3・27 園原斜坑広場（杉の木平遺跡）、高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（一般公開）
- ※・4・1 飯田市内その2地区（17遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 2367.5万円）
- ※・4・1 飯島町内その3地区（8遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 677.1万円）
- ※・4・1 伊那市西春近地区（18遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 3361.6万円）
- ※・4・3 飯田市内その2地区発掘調査打合せ会（飯田合同庁舎）
- ※・4・10 飯田市内その2地区ほか下伊那地区発掘調査団結式挙行（飯田合同庁舎）
- ※・4・10 飯田市内その2地区、17遺跡（かぶき茶・柳田・山田・石子原・石子原古墳・ようじ塚・上の平東部・寺山・六反田・滝沢井尻・小屋外・三査淵・上の金谷・辻垣外・大東・瀬原前・大門原B）の発掘調査開始（終了48・2・7）
- ※・4・24 上伊那地区発掘調査団結式と発掘調査打合せ会（上伊那北方事務所会議室）
- 47・4・25 飯島町内その3地区、8遺跡（うどん坂南・うどん坂II・うどん坂1・山溝・八幡林・石上神社前・庚申平・太田沢春日平）の発掘調査開始（終了47・6・28）
- ※・4・25 伊那市西春近地区、18遺跡（和手・富士山下・富士塚・高瀬沢・南丘A・南丘B・名越南・名越東古墳・名越・白沢原・山等垣外・細ヶ谷B・百駄刈・北丘B・大境・山の根・城平・

城平上)の発掘調査開始。(終了47・12・14)

- 47・4・26 長野県中央道遺跡調査会第5回理事会開催。(伊那市上伊那図書館)
- ◆ 6・20 公団名古屋支社と、上伊那地区橋梁工事に伴う調査遺跡追加と、飯田市山本石子原遺跡第2次調査について協議(県庁教育次長室)
- ◆ 6・22 公団名古屋支社と飯田市山本石子原遺跡第2次調査について現地協議。
- ◆ 7・3 下伊那郡高森町内その2地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額2,002万円)
- ◆ 7・6 下伊那郡松川町内(12遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額1,864.3万円)
- ◆ 7・6 駒ヶ根市内(8遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額563.5万円)
- ◆ 7・7 駒ヶ根市内8遺跡(大徳原南B・大徳原南A・大徳原北・横前南・中山原・新田原・女体北・切石墓地)の発掘調査開始。(終了47・9・1)
- ◆ 7・12 飯田市内その3(石子原遺跡第2次調査)の発掘調査委託契約成立。(委託金額410万円)
- ◆ 7・14 下伊那郡松川町内12遺跡の発掘調査打合せ会。(松川町福祉センター)
- ◆ 7・24 下伊那郡高森町内その2地区5遺跡(神田裏・新田西裏・増野新切・増野川子石・鍾鐸原A)の発掘調査開始。(終了47・11・9)
- ◆ 7・24 下伊那郡松川町内12遺跡(里見Ⅱ・里見Ⅴ・境の沢・中原Ⅰ・庚申原Ⅰ・庚申原Ⅱ・平林・やし原・片桐神社東・水上・文源田Ⅲ・文源田Ⅳ)の発掘調査開始。(終了47・11・11)
- ◆ 8・15 公団名古屋支社と上伊那郡南箕輪村内9遺跡と辰野町内その1地区3遺跡について現地協議。
- ◆ 8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)発掘調査閉結団式。(飯田教育事務所)
- ◆ 8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)の発掘調査開始。(終了47・9・30)
- ◆ 8・21 上伊那郡南箕輪村内その1地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額1,051.5万円)
- ◆ 9・1 上伊那郡南箕輪村内の発掘調査打合せ会開催。(南箕輪村公民館)
- ◆ 9・4 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区9遺跡(南原・三本木原・曾利目・在家・大芝原・大芝南・南高根・北高根A・北高根B)の発掘調査開始。(終了47・12・9)
- ◆ 10・9 上伊那郡南箕輪村内その2地区(4遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額514.4万円)
- ◆ 10・9 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額497.2万円)
- ◆ 10・11 上伊那郡辰野町内その1地区の発掘調査閉結団式と発掘調査打合せ会。(辰野町公民館)
- ◆ 10・12 上伊那郡辰野町内その1地区3遺跡(五反田・越道・平出山の神)の発掘調査開始。(終了47・11・30)
- ◆ 11・15 長野県中央道遺跡調査会第6回理事会開催。(伊那市上伊那図書館)
- ◆ 12・4 公団名古屋支社と昭和48年度調査体制・調査地域について協議。(公団伊那工事事務所)
- ◆ 12・5 公団名古屋支社と伊那市内その2地区(4遺跡)・箕輪町内(3遺跡)・辰野町内その2地区(14遺跡)・諏訪郡富士見町内(7遺跡)について現地協議。
- ◆ 12・15 上伊那地区中央道埋蔵文化財包蔵地出土の遺物展示会開催。(上伊那地方事務所大会議室・一般公開)
- ◆ 12・16 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)の発掘調査報告会開催。(辰野町公民館)

- 48・3・16 上伊那郡飯島町内その3地区発掘調査報告会開催。(飯島町公民館)
- ◆◆◆◆ 飯出市内その2・その3地区発掘調査報告会開催。(下伊那教育参考館)
- ◆◆◆◆ 下伊那郡高森町内その2地区発掘調査報告会開催。()
- ◆◆◆◆ 下伊那郡松川町内発掘調査報告会開催。()
- ◆◆◆◆ 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区発掘調査報告会開催。(南箕輪村公民館)
- ◆◆◆◆ 駒ヶ根市内発掘調査報告会開催。(駒ヶ根市役所大会議室)
- ◆◆◆◆ 伊那市西春近地区発掘調査報告会開催。(伊那市福祉センター)

2) 発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施行前に、公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で協議することになっている。その結果、記録保存と決定され、発掘調査が必要となった場合、公団は、県教育委員会に委託して実施されることになっている。そのため、県教育委員会は、公団と現地協議などの事務接衝のうえ、調査遺跡の発掘面積、調査費、調査期間、調査方法等が決められる。その後、公団から調査依頼、県教育委員会から調査受託の文書の往来があつて、つぎのような発掘調査委託契約が締結されている。

ア 発掘調査委託契約書

- | | |
|-----------|-----------------------------|
| 1 委託事務の名称 | 中央道埋蔵文化財発掘調査(飯出市内その2) |
| 2 委託期間 | 昭和47年4月1日から
昭和48年3月20日まで |
| 3 委託金額 | ¥23,675,000円也 |
| 4 委託金支払場所 | 日本道路公団名古屋支社 |

日本道路公団(以下「甲」という。)は、長野県教育委員会(以下「乙」という。)に願書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第1条 甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、願書の委託金額の範囲内で願書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条 甲又は乙の都合により委託期間を延長し若しくは発掘調査計画を変更し、又は発掘調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条 乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し甲に提出しなければならない。

第4条 乙は、第3条の資金使用計画書に基づき願書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2 甲は、前項の請求のあったときは頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して請求書を受領した日から15日以内に所要の額を支払うものとする。

第5条 甲は、必要と認めるときは頭書の発掘調査の処理状況について調査し又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2 乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

3 乙は、発掘調査の実施にあたり作業個所に作業表示旗をかかげ発掘調査関係者には、腕章等を着用させなければならない。

4 乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B5版20部）を作成し委託期間内に甲に提出しなければならない。

5 乙は、費用精算調査を作成し、委託期間満了後1箇月以内に甲に提出しなければならない。

第6条 この契約に基づく報告書、費用精算調査その他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条 乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。

第8条 発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については、乙が代行するものとする。

第9条 乙の責に帰する事由により頭書の期間内に第5条第4項に規定する報告書を提出しないときは甲は遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数に応じ頭書の委託金額に対して年8.25%の割合で計算した金額を徴収することができる。

2 甲の責に帰する事由により第4条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は、甲に対して遅滞日数に応じて年8.25%の割合で遅延利息の支払いを請求することができる。

第10条 乙の責に帰すべき事由により甲が契約を解除したときは、乙は頭書の委託金額の10分の1を違約金として甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条 この契約を変更する必要が生じたときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書2通を作成し、当事者記名押印の上、各自1通を保有する。

昭和47年4月1日

委 託 者 名古屋市中区栄4丁目1番1号（中ビル11～12階）

日本道路公団名古屋支社

支社長 平野和男

受 託 者 長野県教育委員会

教育長 小松孝志

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当ることになっている。

昭和45年7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度頭初の理事会において、発掘調査の受託を決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。同調査会規約・昭和47年度役員・飯田市内その2地区調査団組織はつぎのとおりである。

(7) 長野県中央道遺跡調査会規約

第1条 この調査会は、長野県教育委員会の委託を受けて、中央道建設及び関連工事用地内遺跡の発掘調査を実施し、その記録の作成、発掘された文化財の保存活用方法を研究することを目的とする。

(名称)

第2条 この調査会は長野県中央道遺跡調査会（以下「調査会」という。）と称する。

(組織)

第3条 調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。

(1) 会長 1名 (2) 理事 若干名 (3) 監事 2名

事務所)

第4条 調査会の事務所は、会長が別に定める事務所内に置く。

(会長及び理事)

第5条 会長は、長野県教育委員会教育長をもってあてる。

2 理事は次に掲げるもののうちから会長の委嘱した者をもってあてる。

- (1) 学識経験者 (2) 関係学会の役員
(3) 関係市町村教育委員会連絡協議会の代表者 (4) 関係市町村教育委員会の教育長
(5) 関係行政機関の職員

(会長及び理事の職務)

第6条 会長は調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

2 理事は、理事会を構成し、次の事項を審議する。

- (1) 調査会の運営に関すること。 (2) 発掘調査の受託に関すること。
(3) 規約の改正に関すること。 (4) その他必要な事項

3 会長に事故があるときは、理事のうちから会長が指名した者が、その職務を代行する。

(理事会の招集)

第7条 理事会は必要に応じて会長が招集する。

2 理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。

3 前項の場合、当該議事について書面をもってあらかじめ意志表示し、または他の理事を代理人として表決を委任した役員は出席したものとみなす。

4 理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(顧問)

第8条 調査会に顧問若干名を置くことができる。

2 顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する。

3 顧問は会長の諮問に応ずるとともに、理事会に出席し調査会の業務について助言する。

(監事)

第9条 監事は、理事会の推薦により会長が委嘱する。

2 監事は、調査会の会計を監査する。

(役員任期)

第10条 役員任期は一年とする。ただしその職にあるゆえをもって委嘱されたものの任期は、当該職の在職期間とする。

(幹事)

第11条 調査会に幹事を置く。

2 幹事は、県教育委員会事務局職員のうちから会長が委嘱する。

3 幹事は、会長の命を受け調査会の事務を処理する。

(調査団)

第12条 調査会に調査団を置く。

2 調査団の組織及び運営について別に定める。

(事務の管理執行の規定)

第13条 調査会の事務の管理及び執行にあたっては、この規約ならびに理事会の決定する規定に従って行なう。

(経費)

第14条 調査会の事業に要する経費は、長野県教育委員会の委託料をもってあてる。

(会計の区分)

第15条 調査会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

2 調査会の会計は、長野県教育委員会と締結した委託契約に区分して行なう。

(出納及び現金の保管)

第16条 調査会の出納は、会長が行なう。

2 調査会に属する現金は、会長が理事会の議を経て定める銀行または、その他の金融機関にこれを預けなければならない。

(決算)

第17条 会長は、会計年度終了後1ヶ月以内に収支決算書を作成し、監事の監査を経て理事会の認定を経なければならない。

(財務に関する事項)

第18条 この規約に特別の定めがあるものを除くほか、調査会の財務に関しては、長野県の「財務規則」の例による。

(委任)

第19条 調査会の業務の運営に必要な事項は、この規約に定めるもの及び理事会で議決するものを除くほか会長がこれを定める。

(付則)

この規約は、昭和45年7月22日から施行する。

イ) 長野県中央道遺跡調査会役員名簿 (昭和47年11月現在)

顧問	一志 茂樹 (県文化財専門委員)		
会長	小松 孝志 (県教育長)		
理事	金井喜久一郎 (県文化財専門委員)	米山 一政 (県文化財専門委員)	
	藤沢 宗平 ()	藤森 栄一 (長野県考古学会会長)	
	原 嘉藤 (長野県考古学会委員)	宮嶋 達 (下伊那教育会会長)	
	木下 南 (上伊那教育会会長)	福田 幹人 (諏訪教育会会長)	
	小泉兵次郎 (県教育次長)	飯島 丁巳 (県文化課長)	
	佐藤 唯重 (飯田教育事務所長)	徳永 正人 (伊那教育事務所長)	
	小林 彰 (阿智村教育長)	新井 良男 (帯町教育長)	
	矢亀 勝俊 (飯田市教育長)	中塚 伝次 (高森町教育長)	
	北原 保喜 (松川町教育長)	斎藤 三夫 (飯島町教育長)	
	北沢 照司 (駒ヶ根市教育長)	細田 義徳 (富田村教育長)	
	松沢 一美 (伊那市教育長)	安積 正一 (南箕輪村教育長)	
	熊谷 大 (辰野町教育長)	羽生 保吉 (下伊那地区教委協議会会長)	
	坂井 喜夫 (上伊那地区教委協議会会長)	木川 千年 (諏訪地区教委協議会会長)	
	林 茂樹 (上伊那郡中川東小学校教頭)		
監事	岡沢 幸朝 (県文化課課長補佐)	田中 富雄 (飯田市社会教育課長)	
幹事	金井 滋次 (県文化課文化財係長)	前沢高実保 (県文化課文化係長)	
	西沢 清 () 専門主事	浅川 欽一 () 専門主事	
	欠藤 太郎 () 専門主事	佐藤 文武 (飯田教育事務所総務課長)	
	佐藤 陸 (飯田教育事務所主幹)	下平 久雄 () 主事	
	松島 勇 (伊那教育事務所総務課長)	小林 正次 (伊那教育事務所主幹)	
	鈴木 長次 () 主事	今村 善典 (県文化課指導主事)	
	桐原 健 (県文化課指導主事)	神村 透 ()	
	宮沢 恒之 ()	丸山敏一郎 ()	
	岡田 正彦 ()	堀内規矩雄 () 主事	

ウ) 長野県中央道遺跡調査会調査団 (飯田班)

調査団長	大 沢 和 夫			
調査主任	神 村 透 (高森町)	岡 田 正 彦 (松川町)	今 村 善 興 (総括)	
調 査 員	今 村 正 次	佐 藤 勲 信		
	木 下 早 八 郎	矢 口 忠 良		
	速 那 藤 麻 呂	松 永 渡 夫		
	鳴 海 本 昭	市 沢 英 利		
	金 井 正 彦	小 林 正 春		
	酒 井 幸 則	八 木 光 則		
	小 平 和 夫	宮 下 典 彦		
	一 条 隆 好			
調査補助員	飯 島 洋 一	小 林 翠 治	鈴 木 次 郎	田 口 英 次
	竹 内 三 千 夫	竹 村 和 紀	徳 永 忠 雄	三 浦 光 一
	宮 沢 富 夫	渡 辺 重 兵		

3) 発掘調査開始までの準備

ア 準備

- 4月10日を発掘開始と決め4月1日より9日までを発掘準備にあてる。
- 4月1日 飯田市地内その2を中心に、本年度発掘調査の日程計画を立てる。
- 4月3日 飯田合同庁舎にて、飯田市地内その2の調査について、関係機関が集まって事故の打ち合わせをする。参加者は、日本道路公園飯田工事事務所、山本農協、伊賀良農協、飯田市教育委員会、飯田中央道事務所、飯田教育事務所、中央道遺跡調査団で、4月10日に伊賀良から調査に入り、登記のおくれている山本へと移動していくこと。調査作業員は90人位をと話しあう。
なお、この日より調査に必要な物品の購入をはじめ。
- 4月6日 飯田市教育委員会を通して、有線放送で作業員の募集をはじめ。
- 4月7日 長野県教育委員会文化課にて、今年度の調査について打ち合わせる。
- 4月8日 飯田教育事務所にて、調査団の結団式を行なう。その後調査についての打ち合わせをし、用地内遺跡の現状調査をする。

イ 発掘調査前の遺跡の状況

発掘直

発掘調査前の遺跡の状況と面積

(篠田市 その2)

遺跡名	現況	状況	全体面積	用地内面積	調査調査 予定面積
かぶき畑	畑	丘の麓にある傾斜地で、以前から縄文時代中期の石器が採集されていた。付近からには縄文時代中期土器片、土師器、須恵器、中世陶器片も発見されている。	21,000 ^m	9,500 ^m	1,600 ^m
柳田	水田・畑	湯川西方の川地より流出した比高10-15mの台地で、地表面にて黒曜石片、石器等が採集され、また、縄文時代中期の土器片、打石斧等が水田の中耕の際出土している。	332	256	30
山田	畑	石子原の南側に立地する。一つ隔てた台地で、湯川流域に傾斜している。縄文時代中期の土器片、打石斧が出土している。	1,750	670	130
石子原	畑	山本小学校の南方150mの小高い平担部で、古い覆状地の面層が優占され残った部分である。縄文時代中期、中期の土器等が出土している。	3,500	1,450	290
石子原古墳	畑	石子原遺跡の香地先端に立地する古墳で、東南に鋭い傾斜を示す円墳。開闢時に一部が破壊されている。	130	88	88
ようじ原	畑	一つの小川の中間に東側にのびる台地で、縄文時代早期、中期の土器片、石器等が出土し、他に弥生後期土器、土師器、須恵器が発見されている。	2,100	72	15
上の平東部	畑	もつけ川の左岸の岩地上にあり、緩傾斜をなして川に下っている。縄文時代中期の土器片が出土している。	356	356	70
寺山	畑	中村部落の東部中央部の急傾斜のある台地縁で、縄文中期土器の遺物と古墳時代の石製陶器が採集されている。	800	708	140
六反田	畑	大海木と三日市場の境界となるあたりの森内にあり、縄文時代中期の土器片・石器片と平安時代の土師器片が出土している。	3,850	1,120	220
大東	水田・畑	酒原前遺跡の西方にあり、深い峯谷をなす新川との間にある降蓋地で、凹地により二地点に分かれる。土師器片、須恵器片、中世陶器が発見されている。	17,000	8,300	1,600
酒原前	水田・畑	伊賀良小一中学校の東南方向に緩傾斜をなす扇状地で、水田の深層の際、土師器・須恵器、中世陶器片が出土している。	9,100	6,500	1,200
滝沢井尻	水田・畑	北方と大海木の境に渡辺井が亘渡し、その石岸の急斜面に立地する。左岸に小畑外遺跡があり、いずれも縄文時代中期から中世に至る時期の遺物がかなり多く散布している。	1,100	1,000	200
小畑外	畑	北方の南沢と滝沢井との間にある小高い丘で、古くは南沢の扇状地であり、度々くらの緩傾斜をなしている。而かも縄文時代中期の土器片をはじめ、縄文時代の土師器、須恵器が発見されている。	9,100	8,100	1,600
辻塚外	畑	小畑外遺跡の南東側凹地をさきんだ緩高橋にあり、縄文時代中期の遺物が発見されている。	7,200	4,400	800
三臺淵	水田・畑	傾斜地が段丘縁部に接するあたりに立地し、東方に向って緩傾斜をなしている。付近より土師器、須恵器片が出土している。	400	368	70
上の金谷	水田・畑	北方のやや山に近い崖地で、傾斜をなしている。付近の森田より土師器、須恵器、中世陶器が採集でき、南側の水田地帯は集落跡の可能性が大きい。	1,150	1,108	220
大門原B	畑	大門原遺跡の北端部から傾斜地にかかると人遺跡の南東下方に展開する傾斜地に立地する。縄文時代中期より弥生時代後期にかけての遺物が散布している。	61,000	16,000	2,000

2 調査の実施と経過

1) 調査の開始と経過

昭和47年4月10日、飯田市伊賀良の中央道飯田インターになる小坂外遺跡に全員集合する。調査作業員の皆さんは、昭和45年度に参加した人たちが多く、なつかしい顔をあらごちに見つける。飯田市教育長矢島勝俊先生のあいさつ、調査主任の調査計画と調査方法の説明があった後、運ばれてきた道具を整理し、現地にテントを設営して、本年度の調査は開始された。

飯田地区の調査は、伊賀良地区11遺跡、山本地区4遺跡に加えて、パーキングニリヤなどで追買になった阿智村かぶき畑遺跡と飯田市蓮光寺大門原B遺跡の2遺跡があった。山本地区は用地買収がおこなわれていることもあって、伊賀良のインターを中心とする広い遺跡に調査の重点をおき、もう一つは用地の手続きが済み次第に伊賀良から山本へと調査を進めることを計画した。4月10日から7月25日までの80日間を予定し、途中から岡田正彦調査主任が参加次第2班に分かれることにした。

4月17日より、岡田主任が参加し、調査団も全員そろそろ。小坂外・辻垣外遺跡の調査が終了、5月15日より、2班に分けて、本隊をB班とし、岡田調査主任が中心になりインター内と附近の遺跡を調査し、C班は神村観彦主任が中心となって、中村、山本の遺跡を調査する。C班の調査は6月28日に終る。途中、石子原遺跡で旧石器を発見し、マスコミや研究者から注目され、そのため、再契約して、2次調査を行なうことになった。6月29日より、B班の1部が上の金谷遺跡に入る。かぶき畑遺跡と大門原B遺跡は用地買収がすんでおらず、今回の予定期間内ではできないことになった。上の金谷遺跡の調査が終了したのは、7月22日であった。

調査団は引きつづいて高森町と松川町の調査に入る。かぶき畑遺跡は、石子原遺跡の2次調査も終わった9月19日調査するが、遺構・遺物はなかった。大門原B遺跡は用地買収がなかなか進展せず、3月に入ってからがまとまる。そのため調査は、報告書執筆の合い間をぬって3月6日～14日にかけて行なう。飯田地区の整理は、高森・松川町町の調査が終ってからの、12月・1月に行なう。

各遺跡の調査は第1表の通りである。

2) 発掘調査協力者

飯田市の調査であるため市内の人たちがほとんどであるが、特に伊賀良・山本地区の方が多かった。また阿智村の調査も入っていたので、阿智村からもいく人か参加していただき、その方々は4回目というベテランである。こうしたなれた方たちの仕事であるので、作業はとてもしやすかった。

飯田市

(山本)	石田 光彦	伊坪 さだ	井上 忠作	金田ちさえ	熊崎 江	熊崎はつえ
小林 昭治	齊藤 肇	佐々木和子	島岡 さと	竹村 一郎	竹村 和紀	竹村 依一
竹村 宮恵	渡山 健	浜島辰之助	原 アケミ	林 弘恵	福岡 一子	松井 光枝
村沢 和光	森本 進					
(伊賀良)	池戸 幸子	位高 重子	市瀬 悦子	市原 千里	伊藤 郁子	伊藤モモエ
井上つね子	遠藤 さわ	奥田 庄一	美田 千舟	春日 要	春日チサト	片山 文子
加藤さとみ	加藤 せつ	木下さねよ	木下はるみ	久保田只雄	久保田裕二	熊谷八千子
黒河内光子	五島美恵子	後藤 和子	酒井 好子	椎名いすず	鈴木まさ子	関島ひろこ
高内 くわ	高内 武一	高橋 すえ	塚原千枝子	中上 百	原 玄也	原 とき子
原 敏一	林 ひろ子	肥後乃恵子	肥後 三子	平沢 央子	前田重五郎	松沢 きよ
松沢 節子	松沢とし子	松沢 ちえ	松沢 久恵	松下 兼吉	光沢 明	光沢 百恵
矢沢 要	矢沢きよ子	古沢 夏江	米山 久子	山口志津子		
(下久堅)	新井みさ子	池田 きし	氏井 広人	桐生みさお	小池 千君	寺沢 二郎
寺沢 なか	知久さとえ	平沢 俊恵	平沢 彦男	平沢 巳春	元島 貞子	吉沢 徳男
(弥光寺)	飯島 洋一	北村 重美	木下しんよ	田原 初子	塚原 和子	中根 祐子
七海 節子						
(松原)	池田 功	大島 利男	小池 治平	小池 照夫	小林津代子	宮沢 富夫
(その他)	小林ますえ	鈴木 ふゆ	中村 一義	神村 きよ	久保田尚子	田添 真彦
小木曾道子	吉川 清司	清水 実				

阿智村

牛山 敏雄	牛山 初江	熊谷う志子	倉田 千穂	佐々木清美	関 政子	原 こまえ
牧島よしま	水上いずみ	宮島ふさえ				

その他(京外の学生も含む)

所沢 啓二	徳永 忠雄	竹内三千夫	三浦 孝一	出口 英次
-------	-------	-------	-------	-------

3) 現地指導・見学者

伊賀良地区での学術調査は今回が初めてということもあって、地域の方々が合い型を見ては見学に来られたし、山本地区では旧石器の発見や、人骨(近世)の発掘もあって、地元や研究者の見学が多かった。特に、石子原古墳について明治大学入塚初重教授、同小林三郎助手の指導を、石子原遺跡の旧石器については東北大学岸沢長介教授、明治大学戸沢充則助教授の指導をうけた。回遊跡の地質については、信州大学齊藤豊助教授、東京大学鍋西清高博士、豊丘中学校松島信幸教諭の指導をうけた。

道路公社 名古屋支社長 支社用地課長 監事 室長 支社埋蔵文化財担当主事 飯田工事事務所長

同総務課長 同工事課長 志那山東トンネル事務所長

県教委 文化課長 同課長補佐 文化財係長 埋文担当指導主事 同主事 飯田教育事務所長 同総務課長 同指導主事 同他職員一両

飯田市 教育長 社会教育課長 同課長補佐 飯田有線放送 飯田市文化財審議委員一両

学 校 伊賀良中学校長 同教頭 伊賀良中学校近代史クラブ (小島徳郎) 同美術学級 伊賀良小学校
郷土クラブ (代田照男) 緑ヶ丘中学校歴史クラブ (伊藤順次) 山本小学校長 同教頭
山本中学校長 同教職員 同校生徒 同歴史クラブ (柄木田孝行) 飯田高校社会科職員一両

研究者 井口喜晴 江坂輝弥 大塚初重 川上 元 小林三郎 斎藤 豊 ショフコ・ブリアス
芹沢長介 千葉徳賢 徳西清高 筒井泰蔵 戸沢充則 林 茂樹 長谷川善和 樋口昇一
松島信幸 森島 稔 中央道調査団上伊那班一両

その他 飯田市文書審査会 山本郵便局一両 高森町婦人会・伊賀良・山本地区のみなさん多数

3 発掘調査の方法

中央道用地内の遺跡発掘調査は、工事により破壊されるため、工事着工前に記録保存を目的とした緊急発掘である。そのため、この調査は、用地内にどのような時期の遺跡が、どんな遺構と遺物を残しているかをさぐり、それを報告書としてまとめることが目的となる。

そのため、発掘調査は中央道用地内に限定される。すでに分布調査によって、その遺跡の広がり、時期は、応確認されている。その遺跡の中において、中央道がどのような部分をとおるかによって4区分した。0—全面にかかるもの。A—遺跡の頂部がかかるもの。B—遺跡の中央部を横切るもの。C—遺跡の先端部にかかるもの4区分がそれぞれである。用地内の遺跡は全面にグリットを設定するのを原則として、小さな遺跡、やむを得ない遺跡は適当にトレンチを入れた。グリットの設定は、2m間隔の基準方眼を設定し、中央道の幅員方向に01—99の2桁の数字を用い、それに直交する方向にA—Yの25字のアルファベットを用いた。その数え方は名古屋方面から東京方面に向かって立ったとき、左から右へ01—99とし、ただし、道路のセンターライン (20mおきにセンター杭をうつ) を50とする。だからセンターを中心に左右98mの巾がとれる。アルファベットは中心杭のうち、遺跡内で最も名古屋よりを基準にして東京方面へA B C…とする。A—Yの25字で50mをおさえ、その範囲を地区としておさえ、それもA B C…と標示する。これによって、25地区1250mがとれる。だからそれぞれのグリット地点は、「KGB AC63」というように、表示できる。これは小川外遺跡のA地区C63地点ということになる。このようにグリットを設定してから、適宜にグリットをほり、遺構が確認されたらそのまわりを広げていくという方針をとった。調査中の記録としては、「調査口誌」「調査記録」「住居址調査カード」「古墳調査カード」等を使用した。

なお こまかな調査方法については「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査指針」という小冊子をまとめてそれをもとに調査を進めている。

また、調査中、調査員の努力によって、「調査進報」を日刊で発行し、作業員の方々に発掘調査、調査結果について理解してもらった。(神村)

Ⅱ 飯田市伊賀良・山本地区の概況

1 伊賀良・山本地区の環境

下伊那郡から上伊那郡にかけて、南北に帯状に続く盆地状の大きな低地が伊那谷で、東に、伊那山脈、赤石山脈、西に、木曾川が流れて、その中央部を天竜川が南流している。下伊那郡は、長野県の最南端に位置し、地形上から大別すると、赤石縦谷、飯田盆地、西部及び南部山地の3地区になっている。

飯田盆地は、北は上伊那郡境の松川町から、南は飯田市の南部、天竜峡までの細長い盆地で、この盆地の中心は、飯田市飯田である。飯田市は、数度にわたる町村合併によって、この盆地の南半帯を占める行政区画となっているが、今回の発掘調査の対象となった地域は、飯田盆地の西南に位置する伊賀良・山本地区が主体である。

伊那谷の南部地域、特に飯田付近においては、河岸段丘の発達が目本屈指といわれている。この地域の段丘は、新約10段の段丘面に区分されているが、南部地域ほど段丘の数が多く、古い段丘から新しい段丘が見られ、天竜川の土流へいくにつれて段丘の数が減り、新しい段丘だけが発達している。もう一つの特徴は、赤石・木曾山脈から押し出された扇状地が各所に発達している。天竜川右岸の竜西地域には、大きな扇状地が並んでいる。それを下伊那郡の北から主なものをあげると、松川町の森岡・堤原・増野原・高森町の増野・新田原、土古田、牛牧地帯の扇状地、飯田市盛光寺の大門原、上郷町の米の原・柏原、飯田市内飯田の押洞・正永寺原、同市伊賀良地区の北方・大瀬六の扇状地、山本地区の大明神原等その数は多い。この中では、伊賀良地区の扇状地は、最も発達したもののひとつである。山本地区の大明神原までは、下伊那竜西地域の区分内に入るが、ここから西南部では、山本・阿智村と下桑村に続いて、小規模な扇状地が数多く形成されており、下伊那地域の扇状地のうち阿智・飯田地域と区別されている。この山本・伊賀良地区において、扇状地の形勢の差異を見ることが出来る。これら大小さまざまな扇状地は、それを構成する礫層によって、古期、中期、新期扇状地に区分されているが、南部の下桑山脈の北東麓に形成されている親田等の扇状地や、山本地区から阿智村にかけて、木曾山脈の山麓からや、離れた所に残丘状に残された香沢台地は、古期扇状地であり、その上方は新しい扇状地が重なっている。伊賀良地区と飯田松川の北にある風越山々麓に形成されているのは、新期扇状地の模式的なものである。扇状地だけでなく、地質図を見ても、基盤となる岩質の相違も大きく、断層線の走向も異なり、山本地区と伊賀良地区では久米川を境にして、相隣り合う地域でありながら、地形・地質的には相違の著しいことに気づく。

伊賀良・山本地区は、以前は伊賀良村・山本村として夫々独立した村政を敷いていたが、昭和33年町村合併によって飯田市に合併して今日にいたっている。伊賀良地区には、古代東山道の有良駅が置かれていたと言われ、山本地区の久米の光明寺には、平安時代の仏像が残されていることを見ても、この両地区の

歴史を類推することができよう。両地区共、飯田市の西南に位置し、木曾山脈南部の前山、笠松山(1271m)、鳩打峠(1173m)、高鳥屋山(1397m)、梨野峠(1200m)の東山麓に位置し、東は、飯田市電・三穂地区に接しているため、天竜川に面する段丘地帯を持たない共通点を持っている。この両地区は、木曾山脈から断層で切り離された茶臼山・二ツ山山塊と、この山を分けて流れる久米川あたりを境にしているが、この二ツ山と、南に位置する城山・水晶山を境にして景観の差異が著しい。

伊賀良地区は、木曾山脈山麓には、北の飯田松川と南の久米川(北は茂都計川)の強い押し出しによって広く大きな扇状地が発達している。特に松川の扇状地は、下伊那地域の中で模式的な新規扇状地で、飯田盆地西部の最西部にあたる。この扇状地は、東方下藤岡まで続き第2段丘に達している。伊賀良地区は、左方の山地帯、松川右岸沿いの段丘面、東方竜丘地区に接する段丘面、南方茂都計川流域の段丘面を除けば、中央部は、この大きな扇状地にあると言えよう。この新しい扇状地を創山から流れ出る新川とその支流、飯田松川から引水している大井川が、浅い谷を作りながら東流してこの面を潤している。特に伊賀良井の歴史は古く、鎌倉時代の開発と言われ、松川から引水した用水のほか、他の川から引水している井水も多い地域で、飯田松川の開削の著しい扇状地面の水利の必要性を物語っている。

山本地区は、飯田盆地西部とは二ツ山、城山、水晶山などの丘陵によって隔った阿智盆地の一部である。この両盆地を隔つ丘陵は、ゆるやかな曲線を画きながら南北に並び、この丘陵と木曾山脈の山麓にはさまれて、ほぼ南北に細長く続くのが阿智盆地である。この地区の木曾山脈の山麓には、新しい扇状地が発達しているが、北側伊賀良寄りの大明神原を除けば、規模は大きくない。国道153号線が通るあたりは、古い扇状地があって、この扇状地の両側がだんだん浸食されて、台地状の小丘陵として残っている所が、各所に分布し、南東の方向にのびている。旧石器発露地で話題を投げた石子原遺跡のある台地も、このひとつである。これらの台地上では、工事の切取面や、崩壊面では、赤褐色の強い古期ロームの露出がよく見られる。この古いローム層の露出は、飯田盆地では殆んど見られない。

石子原から、国道153号線を越えて、東南へ伸びている舌状台地と、その東に位置する水晶山を分水嶺として、北は、久米川水系、南は、阿知川水系と二分されている。山本地区においては、阿知川の支流の湯川・霧川・久米川とその支流が、木曾山脈の麓から流れ出し、山麓の扇状地を浸食し、残丘化した台地や、東に並ぶ小丘陵を縫うように流れて、この地区を潤している。山麓の扇状地や、これらの川に亘した所に耕地が展開し、集落も、国道153号線の街村を除けば、これらの小河川に面した所に集落が散在しているのも、この地域の特長である。近年にいたって、扇状地の上部や、東にのびる台地上や、数条に走る断崖帯によって生じた崖面にも開拓が進み、集落が発達しつつある。

2 伊賀良・山本地区の遺跡

地形でも説明したように、伊賀良・山本地区の地質は遺跡立地にもあらわれている。山麓の扇状地には遺跡の多いことは共通であるが、伊賀良地区の平坦地には、殆んど遺跡の分布が見られるのに、山本地区の場合は台地上であっても、分布の濃淡の差がはっきりし、低地であっても、川に直した小台地上に、その分布が多いこともある。しかし、現在までは伊賀良地区への注視が多かったことも、その理由のひとつ

つでもあるので、今後の調査によって状況は変わってくるであろう。

1) 伊賀良地区の遺跡 (図1 ①~④、1~89)

伊賀良地区は、下伊那地方でも遺跡分布の濃厚地帯として知られ、現在までに確認されたものは、中央道用地内遺跡を含めて99の多きに及んでいる。その分布状況は、地区全域の平坦部に分布しているが、山麓扇頂部から中央自動車道の通過する扇中央部にかけて濃厚で、その東の段丘面でもや・稀渾とはなるが、川沿いの地域には集中する傾向を見せている。時期的に見ても、先土器時代の遺跡は、現在本発見であるが縄文早期から各期にわたり、今回の発掘調査の結果でもわかるように、中土期のもので発見される地域である。

ア 山麓扇頂部の遺跡 (1図、1~10)

茂郡計川上流に矢平(1)から飯田垣外(5)が列状に並び、新川支流の上流にはさまれた台地上には孫兵衛屋敷(6)から火振原遺跡(9)が向っている。縄文期各期のほか、弥生時代から古墳時代の遺物包蔵も多く、矢平遺跡は、標高850mの位置にありながら、弥生後期と平安時代の遺跡として注目されている。孫兵衛屋敷(6)、牧平(2)、火振原(9)遺跡は、押型文土器出土で知られるだけでなく、各期の遺物包蔵の量も多く、古くから注目されている。北へ行つては、佐久良社付近(10)のほかには、遺跡が位置していないが、下方に大きな遺跡があるので、それに続く地域があると思われる。

イ 扇状地上方面の遺跡 (1区11~37)

この一帯は、現在でも住宅が多く、新川の支流河川によって水利に恵まれた所である。古い民家も多い所で、この地区内では、最も遺跡分布が濃厚であり、大遺跡も多い。遺物の出土量、その時期・性格からみて注目されるものをあげると、原の平(13)、細田(19)、大原(27)、在京原(29)、山口(30)、真鹿地原(32)、立野遺跡(33)と数多く、どのひとつをとっても特色のある遺跡である。特に立野遺跡は、押型文土器各種揃い、縄文・器承文・無文土器も含めて出土する。代表的な縄文早期の遺跡であることは、神村によって報告されている。なお、前・中・後期のほか、水神平系の遺物出土もあって注目されている。この一帯では、調査が進むにつれて特色のある遺跡が増加すると思われる。

ウ 中央道周辺の遺跡 (1区38~65)

伊賀地区においては、インターチェンジが設置されるために、中央道は、山麓をはなれて扇中央部を通過しているので、この付近の遺跡は、扇中央部に立地していることになる。この付近までくると、扇状地は、茂郡計川や新川とその支流によって浸食をうけ、その面が台地化してくる。遺跡は、川と川にはさまれた小台地上に立地している。これらの遺跡は、縄文中期以降、弥生時代から古墳時代のもので、規模も余り大きくないと見られていたが、中央道用地内の発掘調査の結果に見られるように、縄文前期の住居址の発見もあった。弥生後期から古墳・平安時代の集落の一面が確認され、予期通りの遺跡であったとも言える。しかし、その中心は、この周辺のごどこかにあるにちがいない。いずれにしても、中央道用地内や、中津川

鉄道用地内の分布調査によって発見された遺跡も多く、近い将来において、この付近の遺跡の性格がよりはっきりされるに違いない。

エ 扇端部から段丘面の遺跡 (1 図66~89)

この付近へ来ると、川も水量を増し、扇状地の浸食も深まってくるので、台地上の水利は悪く、遺跡は川に面する所に立地する傾向を示している。しかし、台地上に遺物がないわけではないので、他域にくらべて調査が進んでいない所であるといえよう。

茂都計川に面する下中村には、朝臣 (66) ~塚本遺跡 (75) が立地し、新川左岸から、期町一色段丘面に面する下殿岡面には、はりつけ原 (79) ~下原遺跡 (89) が存在している。全体的には、縄文中期から弥生・古墳・平安時代の遺物出土が報告されているが、遺跡の性格は、はっきりされていない。その中間に位置する三口市場は、白井川の浸食で谷が切り込んでいて、遺跡が少ないが、この谷に面する土器割 (78) は、須恵器のほか、鉄滓や焼土の発見もあって、須恵窯址が存在している。

2) 山本地区の遺跡

山本地区は、遺跡の立地を大別すると、山麓扇状地と、東方に伸びる台地、河川流域の小台地に分けられる。これらの中で、包蔵量の多い遺跡は、扇状地上と、台地上に立地しているが、山麓溪流沿いや、小河川に面する小台地上の遺跡の中にも、特色を持ったものも見られる。

ア 山間溪流沿いの遺跡 (1 図90~93)

久米川と湯川は、高鳥屋山と梨野峠から流れ出ているが、湯川上流の青木 (90)、社円寺原遺跡 (91) は久米川と流の谷間に面する遺跡である。特に青木遺跡は、柄ヶ久保遺跡とともに、標高 800m の高さになり、縄文中後期のほか、弥生後期、灰輪器の出土があり注目されている。

イ 山麓に近い扇状地の遺跡 (1 図94~107)

南、阿智村境の湯川平から、北は、伊賀良地区に接する大明神原まで、山麓の扇状地には遺跡が多い。特に、大明神原遺跡 (105) は、扇状地も広く、水利条件もよいので、遺跡範囲は広く、包蔵量も多い。山本地区としては、縄文早期から後期、弥生後期、古墳時代の遺物も多く、大きな遺跡のひとつである。

金堀塚遺跡 (98) は、古墳もあり、縄文早期の遺物こそ発見されていないが、縄文中期から古墳時代にかけての遺物の多い遺跡である。その他の遺跡については、現在まであまり調査が進んでいない。

ウ 古い台地上の遺跡

中央道川内遺跡を含めて、ここから東へ伸びる台地上は、山麓の扇状地とともに、遺跡の多い所である。特に、東南部の雑川と久米川の間の台地と、籍川と湯川の間に伸びる籍川原や長田平の台地は、縄文時代中期を主体とする遺跡が並んでいる。猿ヶ平遺跡 (110) は祭祀遺跡として知られ、土器のほか石製模造品出土地である。件原遺跡 (112) は、北側の台地に、籍川原遺跡 (115) は南側の台地と相対

た位置にあり、縄文中期を主体とした遺跡であるが、杵原には、弥生時代や古墳時代の遺物も発見されている。箱川原の北側では、昭和45年、工場建設工事中に住居址が発見され、緊急発掘調査が実施され、5軒の縄文中期の住居址が確認されている。特に、釣手形土器と有孔縄付土器の完形品は逸品である。なおこの工事中に調査なしに破壊された住居址も、あったので、集落址が存在したことが確認されている。この台地の南側では、粗面量の土器片が地表で捨えるので、遺跡の中心は、南側と思える。

エ 水晶山山麓の遺跡 (1図117~122)

水晶山の西麓を流れる川が箱川である。この箱川に面した山麓小台地に立地して、水晶山をとりまくように遺跡が並んでいる。箱川中尾遺跡(117)は、やや北に離れているが、縄文後期の遺物が多く、弥生後期の遺物もあり、この周辺では大きな遺跡である。六蔵むくり(118)、水晶山麓(119)、箱川(120)下平(121)と並んでいるが、遺物の出土はあまり多くない。

オ 久米川中流域の遺跡 (1図122~135)

久米川は、上流ではいくつもの支流に分かれている。二ツ山の西麓で、この川をはきんで位置するのが二ツ山(122)、桜沼外浜跡(123)である。二ツ山の南山麓に白山遺跡(146)、久米川の右岸台地に大塚(124)、観音寺付近遺跡(125)がある。大塚遺跡は、中津川線の用地にあたり、昭和44年緊急発掘調査によって、中世の大塚墓群が検出されている。

久米川は、二ツ山と城山の間を流れ出ると、二ツ山の東麓の久米部落へ出る。ここは、北の茂都針川と、南の久米川にはさまれ、東を除いて三方山に囲まれた盆地状の台地である。この川に面した小台地や、山麓の崖斜面には、それぞれ小規模な遺跡が多い。縄文中期のほか、弥生後期の遺物出土の遺跡も多く、今後の調査を待つ地域である。

3) 伊賀良・山本地区の古墳

伊賀良・山本地区の古墳は、伊賀良に43基、山本に11基あったと伝えられる。現存のものは、伊賀良で9基、山本では3基に過ぎない。いずれも円墳で規模は大きくない。両地区共、特に集中した所はないが扇状地から原端部の台地上や、川に直した傾斜地等に分布している。多くは、石室が小規模で、山地性の小円墳で、後期古墳と言われている。しかし、今回の石子原古墳の発掘調査によると、主体部は、小石室のほかに、3この土壇が存在し、追葬の事実を示している。この土壇のひとつからは、6世紀に比定される須恵器の出土もあって、この地区の古墳の性格に各種の疑問を投げかけている。

第1表 飯田市伊賀良・山本地区遺跡一覽表

番号	遺跡名	所在地	縄文時代			弥生時代			古墳・平安時代			中世	備考
			早期	中期	後期	前期	中期	後期	土葬部	築墓部	瓦輪		
1	1 樽	飯田市山本海川											
2	2 山田	〃 〃 南平											
3	3 石子原	〃 〃 〃	〇	〇	〇								
90	90 榎本	〃 〃 〃 南平											
91	91 榎門寺原	〃 〃 〃											
92	92 榎ヶ久保	〃 〃 〃 北江											
93	93 天神	〃 〃 〃 西平											
94	94 湯川(平)	〃 〃 〃 湯川											
95	95 宇津	〃 〃 〃 西平											
96	96 湯沢寺付原	〃 〃 〃											
97	97 三ノ尻	〃 〃 〃											
98	98 金屋	〃 〃 〃											
99	99 馬場	〃 〃 〃											
100	100 大畑	〃 〃 〃											
101	101 竜文寺原	〃 〃 〃 中平											
102	102 中野	〃 〃 〃 北平											
103	103 赤ヶ崎	〃 〃 〃											
104	104 シンゴクラ	〃 〃 〃											
105	105 大明神原	〃 〃 〃											
106	106 ナギヅリ上	〃 〃 〃 東平											
107	107 夜鹿付原	〃 〃 〃											
108	108 七久	〃 〃 〃 南平											
109	109 榎	〃 〃 〃 西平											
110	110 榎	〃 〃 〃 榎川											
111	111 長田	〃 〃 〃											
112	112 榎	〃 〃 〃 竹佐											
113	113 榎	〃 〃 〃											
114	114 下	〃 〃 〃											
115	115 榎川	〃 〃 〃											
116	116 榎山	〃 〃 〃 久米											

第1表 飯田市伊賀良・山本地区遺跡一覽表

番号	遺跡名	所在地	縄文		縄			弥生時代			古墳・平安時代			中世	備考
			早期	前期	中期	後期	前期	後期	前期	中期	後期	前期	後期		
117	掛川中尾	飯田市山幸川													
118	六浦むくり	〃													
120	熊川	〃													
119	水島山麓	〃													
121	下幸	〃													
122	ニツ山	〃													
123	穂理外	〃													
124	大塚	〃													
125	豊原寺付近	〃													
126	白山	〃													
127	久米中尾	〃													
128	新九田	〃													
129	上野	〃													
130	並下	〃													
131	上田	〃													
132	野新	〃													
133	深口	〃													
134	黒野	〃													
135	大代	〃													

第1表 飯田市伊賀島・山本地区遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在 地	縄文		弥生		古墳・平安時代		中世	備考
			前期	後期	前期	後期	古墳	平安時代		
5	上の平	飯田伊賀島中村		○						
6	上の平	飯田伊賀島中村		○						
7	赤			○						
8	六 夏			○						
9	大 庭			○						
10	庭 庭			○						
11	滝 沢			○						
12	小堀外			○						
13	三 塚			○						
14	上の平			○						
1	矢			○						
2	竹			○						
3	田			○						
4	赤 平			○						
5	飯 田			○						
6	徳 兵衛			○						
7	尾 塚			○						
8	徳 々			○						
9	大 庭			○						
10	空 久良			○						
11	三 井			○						
12	三 井			○						
13	三 井			○						
14	三 井			○						
15	三 井			○						
16	小 堀			○						
17	内 田			○						
18	北 井			○						
19	三 井			○						
20	三 井			○						
21	三 井			○						
22	伊 賀			○						
23	伊 賀			○						

第1表 飯田市伊賀良・山本地区遺跡一覽表

発見遺跡名	所在地	土器時代		縄文時代		弥生時代		古墳・平安時代		中世	備考	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期			
24 針沢	平											
25 七本	伊賀良北											
26 産方	産方											
27 大野	大野											
28 大野	大野											
29 庄	庄											
30 山口	山口											
31 真屋山	真屋山											
32 長野地	長野地											
33 五郎	五郎											
34 藤	藤											
35 土	土											
36 芝	芝											
37 中	中											
38 山王	山王											
39 徳勢	徳勢											
40 橋	橋											
41 上	上											
42 寺	寺											
43 藤丸	藤丸											
44 徳	徳											
45 紙	紙											
46 六反	六反											
47 唐氏	唐氏											
48 知	知											
49 傳	傳											
50 富	富											
51 從	從											
52 西	西											
53 文	文											
54 旗	旗											
55 ハ	ハ											
56 華	華											
57 砂	砂											

第1表 飯田市伊賀良・山本地区遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	縄文時代		古墳・平安時代		中世	備考
			前期	後期	前期	後期		
58	下谷	飯田伊賀良北方						
59	畑	飯田伊賀良北方						
60	桑の木	飯田伊賀良北方						
61	田中	飯田伊賀良北方						
62	宮の上	飯田伊賀良北方						
63	宮吹	飯田伊賀良北方						
64	南の方	飯田伊賀良北方						
65	西の原	飯田伊賀良北方						
66	畑	飯田伊賀良北方						
67	畑	飯田伊賀良北方						
68	畑	飯田伊賀良北方						
69	畑	飯田伊賀良北方						
70	畑	飯田伊賀良北方						
71	水	飯田伊賀良北方						
72	水	飯田伊賀良北方						
73	水	飯田伊賀良北方						
74	水	飯田伊賀良北方						
75	水	飯田伊賀良北方						
76	水	飯田伊賀良北方						
77	水	飯田伊賀良北方						
78	水	飯田伊賀良北方						
79	水	飯田伊賀良北方						
80	水	飯田伊賀良北方						
81	水	飯田伊賀良北方						
82	水	飯田伊賀良北方						
83	水	飯田伊賀良北方						
84	水	飯田伊賀良北方						
85	水	飯田伊賀良北方						
86	水	飯田伊賀良北方						
87	水	飯田伊賀良北方						
88	水	飯田伊賀良北方						
89	水	飯田伊賀良北方						

Ⅲ 調査遺跡

1 かぶき畑遺跡

1) 位置

遺跡は長野県下伊那郡阿智村駒場にある。昭和45年度の当村内中央道内遺跡調査の際、ここは調査しなかった。その後、この台地にパーキングエリトの設置が決定し、用地が大きく広がって、丘にまでかかることになり、そのことがはっきりした昭和47年に用地内遺跡として調査対象になった。45年度の調査で、南側くぼち宮の脇遺跡の遺物は両側台地からの流れこみと考え、また台地先端部の国鉄中津川線の駒場駅予定地がかぶき畑遺跡であり、その延長として、かぶき畑遺跡をおさえた。(1図2、写一の1)

この台地は、駒場から南一帯を見渡すことのできる小じんまりした台地で、標高 596m、巾は基部で20m、先端部で50mと先にごく広くなり、長さ60mの小さな、そして両側の崖はけわしく、その比高は25mある。台地頂部はじんもりしており平坦ではない。黒土の堆積はほとんどなく、耕土そしてロームとなっている。

中央道の部分に、センターラインに直交するようにと、台地先端部に丁字形のトレンチを入れたが、遺構、遺物を検出することはできなかった。

2) まとめ

舌状台地であることや、丘下のまわりに遺物が散布するところから遺跡としておさえたが、調査の結果は、遺構、遺物を検出することができず、かぶき畑遺跡の中心は、丘の上でなく、下の、学校裏側一帯と考えられる。
(神村)

2 柳 田 遺 跡

1) 位置

遺跡は飯田市二本湯川5219番地を中心とした地域にある。(1図3、写一の2、二)。山麓に湯川によって形成された扇状地で、その中央を湯川が浸蝕して南東に流れている。この湯川兩岸の台地縁が遺跡である。湯川との比高差15m、標高615mの台地で、そのほとんどが水田に造成されている。そのため遺跡の大半はすでに破壊されている。台地縁に小さくある桑畑に遺物の散布が見られ、発掘調査も、そこを中心に、南側の水田にも広げた。

中央道は台地中央部を南西から北西にと走っている。グリッドは38+0杭をAAとし、AA-AJまで42-52の間に設定した。

地層は粘土の下に黒褐色土・茶褐色土・ロームとなっており、粘質の強い土である。地表からロームまでの深さは50-70cmある。

2) 遺構と遺物

遺構は台地地縁に集中して、住居址2と土坑10があり、それを後仗の用水路が横切っていた。住居址は170cmの間をおいて、台地縁に沿って並んでいる。このことから考えて、台地縁に住居址が列をなしていたと思われる。土坑は住居址南側にあるが、住居址内にもあって、それは張り床されていたので、同時期と、それより古いものとに区別される。

ア 住居址

ア) 1号住居址(6図1-60図1・2、103図1-24、134図1、写三・四)

遺構 1号住居址は台地縁にあって、崖から10mも離れていない。ロームをほりこんで、510×530cmのほぼ円形の竪穴住居址である。主軸方向はN28°Wとなる。壁は南西で40cmと高く、北東に低くなっている。壁のほりこみは直である。床面の状態は良好である。溝溝は巾20cm、深さ14cm程で壁に沿ってめぐっており、南側の一部でできている。主柱穴は4個である。炉は中央より北よりにあって、当初は石囲い炉であったと思われるが、その石のほとんどは抜きとられ、一部が炉の中におちこんでいる。内部は舟底状にほりこまれよく焼けている。炉内部とその周囲に遺物の出土が多かった。埋蔵は南壁よりに正位の状態で、壁上端を床面よりわずかに高くなるようにうめてあり、その内側には上を組めて張り床をしてあった。(132図1)。埋蔵(60図1)は土縁部と胴下半を欠くものである。なお、住居内土坑10には張り床がある。

遺物 土器・石器がある。土器は破片で、器形のわかるのは埋甕と、炉内に落ちこんでいた筒形の鉢(60図2)がある。埋甕は上径32cm、下径20cm、高さ32cmある。これらの土器は縄文時代中期加曾利E式土器である。石器(103区)は打石斧(1~12)、横刃形石器(13・14)、磨石斧(15~17)、石鏃(15~24)、磨石(24)がある。打石斧・磨石斧は小形である。打石鏃は比較的大きい。

イ) 2号住居址(60図1、60図3~9、103区25~40 写5)

遺構 1号住居址の西に並んである。500×518cmの円形の竪穴住居址で、主軸方向はN3°Wとなる。壁は南側で27cmと高く、北東に近くなっている。床面の状態は硬くよい。周溝は壁に沿って、柱穴間に断続する。巾10cm、深さ4cmで、北西のは長く、東と南のは短かく、ほとんどない。主柱穴は4個である。炉は中央より北によってあり、石囲い炉であったが、蒸側の1つを除いては、取りはずされて、炉内と炉の南側の床面におかれている。掘りこまれた内部はよく焼けている。根張はないが、南壁直下に直径20cmの長円形、深さ13cmのピットがあって、その上に平板状の石(38×28cm、厚さ4cm)が蓋のようにのっていた。内部に苔下の炭があった。埋甕と同じ性格の遺構と考えられる。土壇8と切りあっている。

遺物 土器・石器があるが、その出土は少ない。土器(60区3~9)は破片のみである。加曾利E式土器である。石器(103区)は打石斧(25~27)、磨石斧(28)、石鏃(29・30)、敲打器(31・32)、砥石(33)、石鏃(34~40)がある。

イ 土壇(60区1、60図10~17、104区1~6、表)

土壇は10検出され、8・10が住居址と切りあっており、10はあきらかに張り床されていた。円形(1・5・6・10)、長円形(7・9)、不整形(2・3・4・7・8)とあり、円形のが最もよく、内に炭が多く、遺物も見られた。特に1には大きな木炭となった材木があり、学習院大学木越郎教授のC-14測定、(Gak-4214)でB C 2270±105となっている。この土壇から出土した土器(60区10・11)は加曾利E式土器前半のものである。5は出土土器(60区13~15)から、中期中頃、井戸原Ⅲ式土器で、住居址より古い。4からは比較的大きな土器片(60区12)が出土し、器形・文様から見て、縄文時代後期初頭のものである。

ウ その他の遺物(60区18~20、104区7~16、129区1)

土器・石器が出土しているが、その量は多くない。土器(60区)は、縄文時代中期の磨版式土器最末期の井戸原Ⅲ式土器(18~24)、加曾利E式土器(25~26)がある。他に、天目、片口、山茶碗、環といった陶器類もある。石器(104区)は打石斧(7~11)、横刃形石器(12・13)、石鏃(14~16)があり、いずれも縄文時代中期のものである。また、土製円板(129区1)も出土している。

3) まとめ

柳田遺跡は縄文時代中期の遺跡である。住居址は2軒検出されたが、遺物などから見て同時性が考えられる。その並び方から見て、台地縁に沿って、住居址が列になってあったと思われるが、用地内のみ調査であったため、確認はできなかった。この住居址は遺物から見て、加曾利E式土器で、その前半に位置する。石器で見ると、打石斧、磨石斧ともに小形であるのが注意される。そして、中期にしては打石礮の出土が多い。しかも形が大きい。住居址の施設では、埋嚢と、それと同じ性格の石蓋セットが注意される。1号住居址の埋嚢は張り床があり、内部を埋めこむということが意識されていたように思える。炉はいずれもこわされており、遺跡に住む人間集団が、他遺跡（生活地）へ移動する際に意識的に破壊していったものである。土壊は、全てが縄文時代のものとは思われないが、円形のもの、長円形のはよいと思う。特に、1の木炭による年代測定は、当地方では最初の例であり、その比較年代を知る貴重な一資料となった。同時に測定した高森町増野新切遺跡D14号住居址（加曾利E類）のC-14が、BC 2210 ± 105となっている。土壊は1号住居址から南側にかけてあり、群をなしているが、井戸尻Ⅲ式土器のものもあって、住居址より1型式位古いもの、同じころのもの、そして新しいものもあるので、全部が同時期ではない。住居址を切って南に流れる用水路は、湯川に平行しており、中世陶器の出土から考えて、その頃の湯川から引水してきた用水路と思う。遺跡の山よりの農家で、以前、古銭の大量出土があったという。

遺物から見て、縄文時代中期中頃から後期にかけての遺跡であり、中央遺はその集落のほぼ中央部を横切っている。台地縁より中に入った水田地帯も、調査の結果、部分的に包含層が認められた。遺跡の範囲は相当に広がったと思うが、水田造成で大半は破壊されている。（市沢）

3 山 田 遺 跡

1) 位置

遺跡は飯田市山本南平3812～3894番地にある。南平にはほぼ東西に走る舌状台地がいくつも形成されており、山田遺跡のある台地もその一つである。石子原遺跡とは谷地を間において南側にある。標高 628m、巾90m、長さ 150mの台地（2図1、写二）で、縄文時代中期の遺跡である。

中央道は台地の中央部を南西から北西に走っている。グリットは42+0杭をAAとし、AA～BK、41…58に設定した。

カマボコ状の台地であるためか、黒土の堆積はほとんどなく、耕上ですぐロームとなっている。

2) 遺物（104図17）

発掘では遺構は検出されず、わずかの土器・石器という遺物を得たのみである。土器はいずれも小破片である。文様や胎土から見て、縄文時代中期加曾利E式土器である。石器は打石斧、打石鏃（104図17）がある。

3) まとめ

山田遺跡は縄文時代中期の遺跡である。しかし、中央道の通る部分は集落にあたっておらず、遺跡の中心は、丘先端部にあたるものと考えられる。（神村）

4 石子原遺跡

1) 位置

遺跡は飯田市北本南平3067～4092番地にある。山本小学校の南にある馬の背状の台地である(2図2、写二)。古い扇状地がその後の浸蝕で両側をけずられ、ほぼ東西に走る台地となり、標高629m、先端部の巾90mある。谷地との比高9mある。丘頂部は東へ傾斜し、さらに南北両側にゆるく傾斜して、急に谷地におちこんでいる。その頂部に石子原古墳がある。

中央道は丘先端に近い所を南北に横切っている。グリッドはセンター杭43+80より南10mのところをA Aとし、A A～B Y、40～59に設定し、2次調査をした結果全面を調査した。

地形の状態から黒土の堆積はほとんどなく、耕土ですぐロームとなっており、ロームにほりこまれた遺構には、黒土が堆積していた。古墳の断面を見たら、盛土の下に黒土があり、その下に茶褐色土があって以前は黒土や茶褐色土が全面に堆積していたものと思われ、茶褐色土からと、ロームにわずかに入りこんで押型文土器が包含されていた。

2) 遺構と遺物

石子原遺跡では縄文時代早期の押型文土器が採集されていたので、その時期の遺構と遺物の検出を期待した。事実、それは得られたが、当初予期しなかった方形周溝墓3基の検出、つづいて、旧石器の出土もあって、調査団を喜ばせた。特に旧石器は、石材、石器の種類から相当に古いと考えられ注目された。この結果、2次調査が計画された。その結果は、旧石器の出土する地点は新たになく、押型文土器の遺構と遺物、そして方形周溝墓3基を調査した。そのため、第1次調査に得られた旧石器は第2次調査の報告書にまとめ、その他の遺構、遺物については本報告書にのせた。

用地内で検出された遺構は、旧石器が出土したA地点と、それと同時期と考えられる機軸1・2の他に押型文土器に伴う土城跡、縄文時代中期の配石と土城、弥生時代後期の方形周溝墓と土城がある。(6図2)押型文土器は古墳墳丘下の包含層に多く、遺構は、南側用地界に近い所に方形周溝墓3号と重なっている。台地中央部にもいくつかある。縄文時代中期の土城もローム・マウンドと呼ぶ特殊な土城がある。配石は台地中央部の用地内東端に近い無縁墓地の中にあつた。方形周溝墓は古墳をはきんで、東側に2基、南側に1基ある。そのあり方から古墳との関連が考えられる。

ア 押型文土器とその遺構

ア) 土壇 (7図1・2、61図、105図、写六)

土壇1~22は、2か所に集中する。1つはB地点の方形周溝墓3号に重なり、用地外にのびている。そのプランは円形で、大きさには大小あるが、直径は120~50cmで、深さは20から50cm、舟窓状、すり鉢状おけ状になっている。1~4、6、11、12には内部に木炭があり、1、6には焼土が見られた。遺物はこの土壇群に集中し、(7図2)、とくに11、12に多い。11、12は他の土壇と較べておおきく、そのほりこみの状態も違っていて、竪穴住居址である可能性が高い。13は1つはなれて北にあり、古墳のほりこみによってきられている。その大きさから見て竪穴住居址と思われる。1~10は屋外かである可能性が高い。もう一つは、C地点とした、B地点の東にあって、14~22がそれである。これらは形、深さも不規則で、遺物の出土もほとんどない。19、20に少量の押型文土器片と割片があったのみで、全てを押型文土器のものとすることはできない。19はわずかなほりこみで焼土が2か所あった。

遺物は土器・石器で、土器はいずれも小破片で、風化しており、またもろかった。石器はわずかで、その多くが割片である。土器(61図)は、押型文土器で、山形文(1~3・19)は土壇1・3・4から、格子目文(5~7・17・18)は土壇8、12から、市松文(8~13)は土壇11、12から、縦線文(14~16)は土壇12から出土している。いずれも同一時期の埴型文土器である。石器(105図)は土壇2から割片石器(1)と横刃形石器(2)が、土壇12から横刃形石器(3~7)が出土している。

イ) 押型文土器と石器(62~64図、106~111図)

埴型文土器とそれに伴出すと考えられる石器は特に古墳マウンド下の茶褐色土に包含されていた。

土器はいずれも小破片で、保存の状況はよくない。文様で柄本にとれるものを全部図に示した。それで見ると、押型文土器を主体とし、縄文・捺糸文土器が少量ある。縄文土器(61図20~29)は比較粒粒の大きな斜縄文である。29は複距の斜縄文である。いずれも全面に施文する。捺糸文土器(同図30~38)は、30を除いては縦に密施され、捺糸の太いの細いのとある。30は罫目状になるもので、口縁部の破片である。口縁は大きく外反し、口端は丸味をもっている。押型文土器の押型文は、市松文、格子目文、山形文、横円文とある。市松文は刺突文、半面紙文といわれるもので、61図39~49、62図1~5は逆楕円になっていて、口縁付近では横に、頸部以下は縦になるように施文されていて、全面に施文される。口縁は大きく外反し、口唇に割片をつける。62図6~15は長方形を呈するもので、施文の状態は前のものと同じである。格子目文は多く、本遺跡の主体的な文様である。62図16~18は長方形または菱形としては整っていないが斜走格子目文に入る。同図19~51は、比較的大きな平行四辺形をなすもので、19・20は口縁部である。19には口縁端に刻目をつけている。49は尖底部で、乳房状の突起をもち、先埋まで施文されている。50、51は山形状の中に横に平行線を入れたもので、山形文と格子目文のつながりを考えさせる。63図1~3は格子の通りの黒い斜格子目文である。反画も大きい。同図4~14は長方形の格子目文で、4~6は短楕形となり、7~14は整った長方形である。同図15~39は菱形を必ず斜格子目文で、最も普通のものである。壺物にも多い。山形文は格子目文や市松文よりは少ない。63図40~49、64図1~16がそれで、いずれも山は大きく、そして細い。全面に縦に施文するのを普通とするが、40、41、44の如く、口縁にそって横に施文するものもある。45は口縁部に近いところに破片接合のためと思われる穿孔が見られる。横円文は押型文の中では最も量的に少ない。64図17~25がそれで、横円文の粒は余り大きくなく、穀粒状(17~24)のと

円粒状(25)のとあって、前者が多い。縦または横に施文している。26・27は文様は判然としない尖底部である。これらの押型文土器は、胎土、厚さから見て、どの文様も共通しており、同一の所産である。市松文、格子目文、そして山形文の特徴も、胎土、厚さから見て、立野式土器である。

石器については、第二次調査の中でも説明されているが、A地点の旧石器とは異なるが、交互刺雑技術の発達した、玄武岩を石材とする一群の石器が、押型文土器土壌群(1-12)附近と、古墳マウンドの包含層から出土している(106-108図)。その出土の状態で見ると、押型文土器との関連が強いのであるが、同時期の他の遺跡からはこの種の石器は出土しておらず、石器製作技術も特殊であるので、直ちに同時期とすることにはためらいをもつ。旧石器時代のものである可能性も強い。押型文土器に伴う石器は、硬砂岩の割片を利用した横刃形石器(109図)が多い。110図1は刃部を磨いた扁平な局部磨石斧、2は小形の丸味のある磨石斧、3は周辺部を磨いた板状の石器、4・5は特殊磨石の破片である。Aは磨耗部で、Cは打痕の残るところである。6・7は砥石で、6は板状の砂岩で、7は矢柄研磨器と思われる(写十一の28)。111図1-6は黒曜石製の骨板形コアである。7-18は打石で、7、18はチャード、11、15はハリ質安山岩、他は黒曜石である。19はハリ質安山岩製のスクレイパー、20は黒曜石製で、つまみを作り出した割片で石と思われ、21は黒曜石製の割片石器である。

イ 縄文時代中期の遺構

ア) 配石1(7図1、104図18、写七)

配石1は石組といった方がよいかも知れない。用地内中央部の東端に名号碑を中心に無縁墓地(墓域は30以上)があった。その中であって、入骨を近くの寺に納めるためにとりあげていた時検出された。上面には、その中央に平らな自然石が2つ並んでおかれ(写七の14)、墓碑の台石か、墓側と考えた。そのほりこみをほりさげると、石蓋をした方形の石函があり(写七の15)、それをとりのぞくと、中央に丸味のある石頂部が見えた(写七の16・17)。方形の石函は一部2段になっていて、上段をはずすと中央のそれは石棒であることがわかる(写七の18)。全ての石函をはずすと、円棒状の自然石の角を敲打整形した石棒がやや斜めになって立っていた(写七の19)。この遺構は東西160cm、南北160cmの隅丸方形のプランで、西側にテラスをも、逆角鎌台にロームを約70cmほりこんでいる。その中央に石棒(104図18)を立て、それをかたくとりかこむように扁平の石をもって方形に囲み、石棒頂部までかくし、その上部を石で蓋をする。さらに土でもって埋め、おさえとして扁平石をおいていたことになる。石棒は花崗岩製で、断面は楕円状の、太さ16.5cm、長さ49cmの上部に細くなる自然石で、上端と縁辺に敲打調整が見られる。伴出遺物の出土はないが、石棒の存在時期や、中期土器も散布していることから考えて、その頃のものとと思う。

イ) 土城23-25(7図1、写六の12・13)

C地点に集中する土城の中に24・25はあり、23はそれとB地点の間にある。これら3つともいわゆるロームマウンドの上装で、円形のスリ鉢状に削りだされた中に、ほり出したロームをうめこんだもので、ロームの塊状になった周囲と下部に黒土層をもっている。そのため上面では黒土の円形状の掘りこみができ、

断面をとると黒土がロームの下に入りこんでいる。ロームをとりあげるとスリ鉢状のピットになる。これらの土壌は縄文時代中期に盛行している。石子原遺跡のは比較的大きいものである。遺物は出ていない。

ウ 方形周溝墓と墓塚

方形周溝墓は3基確認された。1・2号は台地の北面斜面にあって、溝を共有している。2号の南西に接して台地尾根部に円墳がある。3号は古墳の南隅、南面斜面にある。こうしたあり方から、古墳を含めて、墓地群(墓域)を考えた方がよいと思われる。

ア) 方形周溝墓1号(7図3、65図7、8、写八図)

1号は南北14m、東西12.40mのわずかに南北に長い方形で、東南隅に巾180cmの陸橋をもつ。溝は隅丸に一周し、逆台形状にほられ、幅は広いところで2m、せまいところで1mあり、深さは東溝60cm、西溝60cm、北溝40cm、南溝50cmある。溝の長さは東溝10.5m、北溝9.80m、西溝11m、南溝8mある。溝中からの出土遺物はない。墓塚は2基あって、墓塚1は中央部やや南よりに、溝の方向より北へ傾きをもち、N65°Wの方向を示す。長さ2.7m、巾1.26m、深さは40cmの大きさの長方形である。北西よりの頭部付近と思われるところ(×印)から、コパルトブルーのガラス小玉(65図7・8、写八の22)が2個出た。7は径9mm、厚さ8mm、中央に2mmの孔があく。8は径9mm、厚さ8mmで中央に2mmの孔があく。大きさ、形から見て、古い時期の小玉である。墓塚2は1の西にはなれてあって、N67°Wの方向で、大きさは長さ1.7m、巾0.8m、深さ34cmとあって、墓塚1より小さい。墓塚の深さなどから見て、当初は盛土があったと思われる。

イ) 方形周溝墓2号(7図3、写八・九)

2号は南北9.8m、東西10mの方形で、1号よりは一まわり小さくなっており、1号の西溝を利用して西側に並んでいる。南隅と北隅の2か所に陸橋を残す。溝は巾1m前後で、逆台形にロームをほりこんでいる。深さは南溝120cm、西溝80cm、北溝60cmある。溝の長さは南溝7.2m、西溝8.6m、北溝6mある。墓塚はほぼ中央部にあって、溝の方向と一致している。墓塚は方向N80°Wで、長さ3m、巾1.2m、深さ25cmの大きさで、隅丸長方形をなしている。墓塚内には木棺材と思われる板状の木炭が見られ(写九の22)その木炭にまじって骨片(同25)が点在していた。火葬骨としてはおかしく、埋葬後何らかの事由で焼かれたようであり、焼土も見られた。出土遺物はない。

ウ) 方形周溝墓3号(7図4、写六・十)

3号は南面斜面にあって、北西半分は用地外にあるため全城の調査はできなかった。南北17mの方形状をなすので、3基の中では最大である。東溝の中央よりやや南によって陸橋があり、溝は大きくて深い。東溝は巾2m、深さ60cm、陸橋部も入れて長さ15m、北溝巾1.6m、深さ80cm、南溝巾1.4m、深さ40cmある。溝の断面で見ると盛土があったように思える。墓塚は2基あって、墓塚1はほぼ中央部にあり、溝の方向と一致する。方向N55°Wで、長さ2.8m、巾1.6m、深さ42cmと大きくて深い。墓塚2は1の北に

並んであって、方向N45°Wで長さ2.6m、巾1.6m、深さ22cmと、まわり小さくなっている。遺物の出土はない。

エ) 墓塚(7の1、写六の13)

墓塚と思われるほりこみの深い土塚があり、土塚と区別したが、人骨は認められなかった。墓塚1は方形周溝墓1号の南にあり、直径50cmの深さ70cmの円形の土塚である。墓塚2は、C地点の中で発見されたもので、長さ1.8m、巾1.4m、深さ1mの形、大ききのしっかりした長方形のものである。方形周溝墓3号の墓塚と大きさ、形が似ている。いずれも出土遺物はない。

明らかに人骨の入った墓塚は、用地内に30基以上あった。南無阿弥陀仏の名号碑を中心に、そのまわりが無縁墓地で、人や馬などを葬ったらしく、両者の骨が見られた。墓塚は円形、長方形とあり、上部に石を置くものもある。人骨は生々しく、保存の状態はよい。副葬品は寛永通宝、煙管はほとんどの墓塚にあり、特別なものとして、天目碗と刀子を納めたのがあった。

エ その他の遺物(66図、104図)

遺構以外の出土遺物としては、土器、石器が少量ある。土器(66図)は、縄文時代中期で、腰取式土器(19・2)、加曾利E式土器(3・4)、後期瀬之内式土器(5・7)があり、須恵器、陶器、青磁も出ている。石器(104図)では打石斧(19-23)、磨石斧(24)、横刃形石器(25)、磨石(26)などある。

3) まとめ

石子原遺跡は、旧石器時代からの遺跡で、それについては別の報告書を見てほしい。押型文土器は立野式土器で、堅穴住居址と土塚(炉と思われる)があり、土塚3の木炭はGak 4210によるC-14ではBC 5880±190とでている。予想したよりは新しい。また矢柄研磨槽の存在が注目される。中期の配石1は石棒を埋めた特殊な性格で、信仰面での追求が必要である。方形周溝墓は3基以上あったものと思われる。出土遺物がなく時期不明であるが、3号は隴積のあり方から見て当地方弥生時代後期に多く、1・2号もそれと同じか次ぐものである。時間的には3→1→2の順が考えられ、最後に円墳へと発展すると思う。弥生時代後期から古墳時代にかけてと思うが、土器是一片もなく、近くに同時期の遺跡の存在も知られていない。当地方で類例を増加しつつある方形周溝墓を総括して考えるべきであろう。2号における火積を焼いた例は他にないようであり、特殊な葬法があったのだろうか。土塚2も墓塚的な性格が強いが、中には焼土があり、木炭も見られた。Gak-4208によるC-14ではAD 740±500という数値が得られている。八世紀頃の遺物はないが、その頃のものであろうか。

当遺跡は予期以上の遺構と遺物の発見があり、中央道による破壊は残念である。丘の大半は残されているので、それを含めて、周辺の調査(分布調査も)をし、この遺跡の理解は今後に残されている。

(通那)

5 石子原古墳

1) 位置と外形

石子原古墳は飯田市山本南平4087番地にあり、石子原遺跡と同じ台地の先端に近い尾根頂部にある。(2図2、6図2)。遺跡のところで説明されているように、方形周溝墓3基にはさまれていて、方形周溝墓2号の周溝南西コーナーより1.04mはなれて、古墳の塚がある。3号とは約10mはなれている。2号の溝を切りあわないように離している点、方形周溝墓を意図して築造したものと思う。標高630m、調査前の古墳は桑畑となっていて、東西18.5m、南北13.9mの、高さ1.68mの小円墳として理解され、開掘により石室は破壊されていると思われていた。

古墳はそのほとんどが用地内に入っているが、西側は相当に崩されて、用地外にのび、南側は農道があって調査できなかった。20cm前後の耕土をとりおろすと、墳丘は角のある円墳で、方墳といえないこともないが、これをとりまく堀はあきらかに円弧をえがいている。堀の内側の大きさは、南北19.2m、東西は18.6mのほぼ円形で、高さは縁線から175cmある。墓壇1のあり方から見ると、当初はもっと封土は高かったようである。堀は巾2.6～3.2m、深さは20～30cmあるが、墳頂部から1mのところには見られぬ土が当時の地表直であるので、そうだとすると、堀は1m以上も掘りあげており、堀の巾も5m以上はあったとも考えられる。堀の底に粘質黒土が堆積した頃、その上面に礫を投げこんだか、意図的においたらしく北側に集中して礫が見られた。この石は墓壇1と関係するであろうか。(写十二の32)

2) 古墳築造状態

古墳を東西と南北に切断して見た(8図2、写十七の49)。盛土は非常にやわらかで、その上に立っての触感がいかに盛土という感じを示す。頂部から70～100cmのところに真黒土が5cm程の厚さであってその面は平らである。それより下の層は全くあれておらず、黒褐色土、暗褐色土とあってロームになっており、ロームまでの厚さは20cmある。この黒色土の上面に墳丘のプランをきめてから、まわりに堀をほって、その土で盛りあげたので、黒土、ローム、ローム混じりの褐色土が互に入り組んで積み重なっている。その厚さは1mない。当初の盛土がもう少しあったとしても、高さ2m足らずの低い円墳であったといえよう。この円墳から墓壇が4基検出された。1～3は断面で観察される。それで見ると、当初の墓壇は2で3そして1とつくられたようで、2→3→4→1の順が考えられる。墓壇1の下部盛土中に木炭が集中し、相當に大きな材木が焼かれたようであり、その木炭のC-14 (Gak 4212) はAD 200±85という数値がでている。墳丘の時期と一致しないが、方形周溝墓2号の墓壇の木炭との関連も考えられる。なお、根石や葬石は見られなかった。

3) 内部構造(墓塚)

古墳の墓塚は4基発見されたが、その発見の状態が充分でなく、3・4は完全な調査はできず残念であり、調査員の方不足を痛感した。墓塚1は耕土を取りのぞいた時にその石匠が検出された。その時点で明治大学大塚初重教授より、このような古墳には墓塚がいくつもあるからと指示され、ほりさげていく過程で、墓塚2を検出した。北西4分の1区をほりさげていく途中で墓塚3を検出したが、墓塚底部の状態をつかむのがやっとならであった。墓塚4は、朱の塊がでてきてその存在を知り、その時には大半がけずられており、位置しか確認できなかった。発見された順に1~4とする。

ア 墓塚1(8図、写十三)

長方形に石を組あわせた箱式石棺で、蓋石ははずされてなかった。長さ1.6m、巾0.7m、深き中段まで8cm、下部まで16cmある。方向N45°Eで、墓塚2とは45°東にずれ、墓塚3とはほぼ平行する。墳丘の最も頂部につくられる。土が花崗岩で、燧石片麻岩も含む自然礫で、両側壁と奥壁は直をなすように直に立て、南側の壁は2段の小口墳にしている。内部には土が埋まっていた、中段に一つの面があり、奥、中央、そして南よりの3か所に石がおかれていた。ここが棺底部とも考えられる。その下にも硬い面がありつき固められていた。出土遺物はない。

イ 墓塚2(8図2、写十三の36、十四)

墓塚1の西にあって、長方形のほりこみをもつ。長さ2.2m、巾85cmの隅丸長方形プランである。方向はN5°Wで、ほぼ南北線を示す。南西隅より土師器、須恵器そして刀子が出ている。

ウ 墓塚3(8図2、写十五・十六)

全体を検出できなかったが、残された部分から推定すると、長さ3.5m、巾1.5mの長方形で、ほりこみは30cm以上ある。その中央は長さ3m、巾50cm、中央の深さ10cmの丸底をなすようにほりこまれている。割竹形木棺を置いたようである。そのほりこみ中央部東縁に直刀が、西縁に鉄鏝が、南端に近いところに朱塊が見られた。この墓塚3は墓塚2の西側に、2より深くほりこまれてある。主軸方向は45°東に傾いている。

エ 墓塚4(8図2)

墓塚4は北側に残っていた土層観察壁を崩して検出した。墓塚2の北面にあって、全体のプランを確認できないが、N80°Eの方向をとる長方形のほりこみである。西端に朱塊があった。

4) 出土遺物

墳丘の南西封土中より、薬玉製の管毛が2つある。(65図5、6)。出土位置から見て、墓塚3とのつながりが強い。

瓶りの埋め土より須恵器提瓶がこわされて、なげこんだようであった。下半部は道路下の未調査部に入っているらしいが、口径13.3cm、胴径21.6cmの球形状をなし、あるいは壺とも考えられる。焼成、胎土よく、須恵器第2様式で、岐阜県、愛知県から持ち運ばれてきたものである。

墓塚2からは、刀子と須恵器壺、土師器甕が出ている。いずれも墓塚の南西隅にあって、刀子は柄をやや下に、刃部先端が高くなっていた。須恵器の蓋付広口壺は蓋をしてやや斜めになり、土師器甕は壺からわずかに北にはなれて横道おしになっていた(写十四の37、38)。刀子(130図2、写十四の39)は、鹿角製の小刀子で先端部がおれている。残部の長さ10.65cm、刃部は5.3cm、茎5.35cmある。蓋付広口壺(65図1・2、写十一の29)は焼成・胎土ともよい。蓋は扁平なつよみがつき、径9.3cm、高さ4.5cmある。壺は口径7.9cm、胴径11.4cm、底径4.3cm、高さ6.2cmある。その器形から見て須恵器第1様式に比定される。土師器小形壺は、口径9.4cm、胴径10.1cm、底径4.9cm、高さ8cmあり、器高から見て鬼高式土器に比定される。

墓塚3からは直刀と鉄鏃が出土した。直刀は保存状態がよい(130図1、写十六の46)。長さ86cm、鋒1.9cm、身69cm、茎14.5cmあり、身の部分には木質部が残る。出土した時は、柄と鞘の状態はよく残っていた(写十五の43、44)。柄は紐でたたくまいたようである。柄頭はあれていて明確でないが、環頭であったように思われる。鉄鏃は指方向に一致するものが多いが、1つだけ方向を異にしていた。かためられてあり、刃先は南を向いている。木質部はないが、茎の部分に一部残っており、刃部の中には布の残痕が見られる。全部で11で、いずれも片刃鏃である(130図3~13、写十六の47)。

なお、古墳とは直接関係ないが、墳丘の耕土中から文久永宝が2枚出土している(103図14・15)。また、この古墳から勾玉が以前採集されているという。

5) まとめ

石子原古墳は、破壊されてしまった古墳と考えていたが、墓塚も4基確認され、墓塚2、3からは副葬品もあり、当地方の円墳を軽視していたのを、改めて注意せねばいけないことを知らせた。立地の状態から見て、方形周溝墓とのつながりも強く、遺物から見て、6C初頭と考えられる。当地方に横穴式石室が盛行する以前の古墳であろうか。当地方古墳全体という広い視野に立って検討すべきであろう。墓塚の造成にしても、その順序も一応は考えたが、果してそうであったろうか。このようにいくつも墓塚をもつ古墳のあり方等、今後に残された課題は多い。(金井)

6 ようじ原遺跡

1) 位置

ようじ原遺跡は飯田市伊賀良中村 375…390番地にある(2区3、写十八)。ニツ山北側の、茂都計川南岸の台地で、標高 595m の小台地である。

中央道はこの台地先端部から台地崖をきりとって東西に走っている。そのため、用地内に入る台地平坦部は殆んどない。台地縁にそってトレンチを入れるが、出土遺物、遺構の検出は余くなかった。

2) まとめ

ようじ原遺跡は、古くから縄文時代の遺跡として知られている。とくに縄文時代早期の押型文土器は大正年代に採集されていて、日本的に見てもその発見は古い。中期土器、石器、弥生時代後期土器、石器、そして古墳時代の土師器、須恵器、それに石製模造品も出ていて、注目される遺跡であったが、中央道は遺跡をかすめて通るような状態であったため、出土遺物はなかった。

7 上の平東部遺跡

1) 位置

遺跡は飯田市伊賀良中村 287番地にある(2図4、写十八)。伊賀良地区の南端、茂都計川の北岸台地が遺跡で、中には古墳もあるが遺物の散布は少ない。標高 579m、台地縁に住居址が検出された。

中央道はこの丘を東西に横切っている。グリットは77+60杭をA Aとし、A AからB L、41~62までに設定した。

A地では赤土の下は礫層で茂都計川の河床であった。住居址のある部分是一段と高くなっていて、礫層の上に褐色砂土があり、耕上となっていた。深い所で70cmほど褐色砂土が堆積し、褐色砂礫土をほりこんで住居址がつくられていた。

2) 遺構と遺物

遺構は住居址が2軒検出されたが、それは2号住居址の上に重なってあった。1号住居址と2号住居址の区別は自然としなく、数cmの厚さしかなかった。そのため遺物は明確に区別できないものが多かった。

A 1号住居址(9図、66図、112図、写十九・二十)

遺構東西 5.8m、南北 5.3mのほぼ円形プランの竪穴住居址で、主軸方向N43°Wをはかる。2号住居址をうめてつくられていた。壁は軟弱であり、そのほりこみも浅い。床面は灰のまわりを除いては状態はよくなく、やや粘質の砂土をかためていた。柱穴は3本確認された。もう一本あったと思われるがつかむことができなかった。がは中央より北西によったところに不整円形の石囲い炉がある。小礫を2重または2段に積んでいまいなつくりであり、其中央部に立石状の石が見られた。炉南側の2号住居址柱穴を掘めた中から粘土製の壺像が出上している。その出土状態は、柱穴の中を上でうめるが、土器片や石もつめにあり(写十九の53)、さらに上に大きな礫をおいていた。その柱穴中央部に、立ててうめてあった。これは、1号住居址の人がうめたものと考えられる。あるいは2号住居址の人が住居廃絶のときに意識してうめたのだろうか。

遺物、土器、石器があり、土器(66図)はいずれも壺の破片で、8は壺形がわかるもので、2号住居址垣壁近くの床面にあった。9・10は壺像の入っていた柱穴内から出上した。いずれも縄文時代中期加賀利Ⅱ式土器でも終りのものである。石器(112図)は打石斧(1~5)、横刃形石器(8)、石ヒ(9・10)敲打器(6)、石磯(11)、不定形石器(7)がある。

イ 2号住居址 (9図、66図、67図、132図、写二十一)

遺構 東西5.7m、南北6.15mの角のある片形壁穴住居址である。主軸方向はN14°Wをはかる。壁は北東部で高く、南に低くなり、南になってなくなっている。壁の状態はよくない。床面の状態も悪い。柱穴は4本で、東側壁にも柱穴らしき穴がある。炉は中央より北よりにあって、炉石ははずされてあり、スリ鉢状にほりこまれた炉底は焼けている。南側壁よりに埋壘(67図1、132図2)があり、溝のL線部を欠くのを、わずかに上端を上にして正位に埋められていた。胴径29cm、底径10cm、高さ33cmの大きさである。どちらの住居址につくか不明であるが、埋壘より外側壁よりに平らな石がおかれてあった。

遺物 1号住居址に混在していると思うが、土器があり、土器(66図11~17)は埋壘以外はいずれも破片である。17は付付土器の台部である。13・14・16・17などはやや古い様相を示すが、2号住居址と同じく加曾利B式土器の終末期土器である。

ウ その他の遺物

遺構外からの遺物出土は少ない。土器では縄文時代中期土器(67図2~4)、土師器・須恵器の新しい時期のもの、中世の犬日碗や黄瀬戸皿などが出ている。石器(112区)では打石斧(12・13)、横形石斧(14)、スクレイパー(15~17)、石鏃(18)がある。

3) まとめ

調査の結果、縄文時代中期加曾利B期の住居址を2軒検出した。これはほとんど時間差がなく、2号住居址の上に重複して建てられている。台地縁にあって、集落は用地外にのびていると思われる。この住居址では1号住居址のうめ方が特に注目され、柱穴の埋め方と、その中にあった塑像が注意される。粘土をこねてつくったもので、首入のつくった人形像のようである(125図1、写二十)。厚さ6cm、高さ18cmの大きさで、手でこねたようになって、指紋も見られる。今後注意しなければならない遺物であると思う。

(金井)

8 寺 山 遺 跡

1) 位置

遺跡は飯岡市伊賀長中村92～94番地にある(3図1、写十八)。中村部落東側の中央部にあつて東に走る台地縁が遺跡である。長清寺西裏の南面斜面となる。標高 576m、南側の水田地帯より6m程高くなつている。

中央道はこの台地中央部を南西から北東に走っている。グリットは80+60杭をA Aとし、B Eまで、41～61に設定した。調査の結果、わずかの遺物を得たのみであつた。

2) 遺物

土器、石器、石製模造品が出ている。土器はいずれも小破片で、縄文時代中期磨坂式土器、新しい土師器、中世陶器がある。石器(112図19)は打石斧とスクレイパーがある。石製模造品は分布調査をしたとき採集されたもので(125図2)、滑石製の円盤で、直径2.1cm、厚さ3mm、中央に1孔がある。

3) まとめ

寺山遺跡では石製模造品が採集されていたのと、南面斜面のよい場所ということで期待して調査に入つたが、遺構は検出されず、遺物もほとんどなかつた。中央道より西の、部落に近い方に遺跡の中心があるものと考えられる。(神村)

9 六反田遺跡

1) 位置

遺跡は飯田市伊賀良大瀬木4319～4330番地にある(3図3、写十八)。山麓の扇状地最端部がその後の侵蝕によって、いくつもの東西に走る台地となり、六反田もその一つである。大瀬木、三日市場、そして中村の三部落の境界近くで、三日市場の大池堤北側台地である。標高560m～580mにかけての東に傾斜する台地で、巾約100mのもので、畑地となっている。

中央道はその先端に近いところを南西から北東に走っている。グリットは86+20杭をAAとし、CXまで、39から58までに設定し、さらにAAより南にもばして、YYからWAまで広げた。

2) 遺構と遺物

遺構(10図1)は住居址と土壇が検出された。住居址4軒は1号が台地尾根に近いところにあり、2～4は北側斜面端近くにある。5号住居址と土壇4は台地先端よりに、土壇1～3は台地尾根部にある。土壇5～7はわずかなくば地をおいて南側の小台地にあった。大池堤西側の台地先端部に平坦地が造成されていて、竪穴状のほりこみが見られ(写二十四の64)、注意して掘り上げたが、出土遺物は現代のものであり、地域の人々の所で、堀を作るときに赤土をとった場所とのことであった。

A 住居址

ア) 1号住居址(10図、68図、写二十丁)

遺構 中央道用地内では最高所であって、3.7×3.9mのほぼ方形の竪穴住居址で、ローム層をほりこんでいる。主軸方向N23°Eをとる。壁高は30cmあって、カマドは北壁の中央よりやや東によって、わずかに壁をほりこんである。石心粘土カマドであるが、カマド東側が耕作のうねによって破壊されている。物を住居内に出し、中央に自然石をたてている。床面の状態はよい。四隅には大きな掘りこみが見られ、柱穴とも思われるが、カマド東側のは、内部から遺物や石もあって、貯蔵穴とも考えられる。

遺物 土師器、須恵器、灰釉陶器があり、灰釉陶器は小破片の類があったのみである。土師器(68図)は杯(1)、甕(6～10)で、杯は内面黒色土器で糸切底となっている。甕は小形でヘリけずりの見られるの(6)、同じく横走する整形痕の見られるの(7)、そして長胴で、縦の整形痕の残るもの(8～10)の三器形があり、後者が多い。これらはカマド内とその周辺に発見された。石製品として砥石(112図20)も出土している。

イ) 2号住居址 (10区、68図、写二十二)

遺構 台地北側斜面の水田となっている谷地に近いところにある。2～4号住居址と3軒かたまってあり、カマドの方向も一致している。そのまわりには住居址はなかった。4.8×4.3mの方形堅穴住居址でロームをほりこんでいる。傾斜地のため北西側の壁は高く、東南側の壁は低い、主軸方向はN64°Wをはかる。カマドは石心粘土カマドで、北西壁のほぼ中央にあるが、くずされて、側壁や中央の石は抜かれてあった。床面の状態はカマドから中央にかけてはよかったが、壁よりは悪く、北側は悪い。4隅と北側、東側、そして床中央部にも大きなほりこみが見られた。北側の一つをのぞいてはいずれも浅い。西隅と東側中央のピットには焼土が入っていた。

遺物 カマド内とそのまわりに多くあった。土師器・須恵器で、灰釉陶器は碗と壺の小破片が2片あったのみである。土師器は甕(68図16、17)で、5個体以上ある。須恵器は杯(11～15)で、いずれも高台はなく、亲切である。

ウ) 3号住居址 (11区、68図、69図、写二十)

遺構 2号住居址の南にあって、3.5×4.3mの長方形の堅穴住居址である。主軸方向はN80°Wをはかる。傾斜地のため西壁は高いが東壁はほとんどない。床面の状態は良好である。カマドは石心粘土カマドで、西壁の中央部にあって、くずされている。ほりこみは5か所あり、不規則である。東隅のは柱穴と思われるが、他は貯蔵穴と思われる。

遺物 土師器、須恵器が多く、灰釉陶器は壺、碗の破片が2片あった。土師器は杯(68図18)と甕(20～22、69図17)があり、甕が多い。器形に変化が見られる。須恵器は杯(68図19)と甕(23)がある。

エ) 4号住居址 (11区、69図、写二十三)

遺構 2号住居址の東側にあって、住居址群の中では最も低い場所にある。東壁をつかむことはできなかったが、長方形の堅穴住居址で、南北5.35mある。4軒の中では最も巾が広い。床面はカマドの前から中央部に良好で、まわりと東隅はよくない。カマドは西壁中央部にあって、石心粘土カマドでわずかに崩れているだけで保存の状態はよい。柱穴は4本検出されたが、東隅のはつかめなかった。床面に焼土が2か所認められた。

遺物 土師器、須恵器がほとんど、灰釉陶器は壺と碗の破片が2片である。土師器は甕(69図4～6)で、小形のもの(4～7)と受胴のもの(8・9)とがある。須恵器は杯(2)、高台付皿(3)、蓋が出ている。

オ) 5号住居址 (11区、写二十四)

遺構 3号住居址の南にあって、3.8×1.65mの長方形のブラシで、主軸方向N75°Wをはかる。西側の壁は高く、東に低くなっており、そのほりこみは内側に傾むいている。東壁外側には黒土中に東へ高く出るように貼り床が見られ、入口部と思われる。床面の状態はよい。柱穴はない。遺物の出土もない。土壌とも考えられたが、床の状態、入口部の様子から住居址とした。

イ 土壌

土壌は7個検出された。1～3は用地内台地頂部にあって、D1は小規模なローママウンドの土壌で、ローマ中央に焼土が見られた。2・3は不整形の浅いほりこみである。14は5号住居址の南西にあって、形も類似している。長方形で南東にテラスをもつが、床面のようなかたきはない。5～7は南側の台地に並んであって、赤土取りによってさらされている。袋状の新瓦をもつ円形のピットで、中から土器片や石器が出土している。

遺物、土壌5～7の中で発見されたもので、土壌5からは、打石斧（112図21）と石錘（22～25）があり、石錘4この出土が興味をひく。土壌6からは土器片（67図5・6）が出土し、縄文時代中期前半の土器である。土壌7からは、中期前半の土器底部（？）と打石斧（112図26）が出ている。

ウ その他の遺物

土器（67図）、石器（112図）があり、土器は縄文時代中期後式土器、加曾利B式土器（8・9）、堀之内式土器（10・11）、加曾利B式土器があり、また中世陶器も出土している。石器は打石斧、石鏃、横刃形石器（27）がある。

3) まとめ

六反出遺跡では、住居址5軒と土壌7が検出された。縄文時代の土器、石器の散布からその時期の遺構を期待したが、土壌1～3、5～7のみで、住居址は検出できなかった。これらの土壌は台地頂部にあるので、台地縁に住居址が存在すると思うが、それは中央道用地外である。住居址1～4号は、遺物から見て国分期的ものである。灰胎陶器のほとんどないこと、高台の発達がないことから、古い方に位置づけられる。1号と2～4号とは群を異にしており、同時期ではあるが、ガマドの方向を異にしているのが注目される。台地でも北側斜面の、谷地水田に接しており、それが、3軒前後でまとまって、それがいくつかが集まってあったと思われる。中央道用地から西にかけて広がっていると思われる。5号住居址は、その形やあり方から見て住居址としたが、土壌4と共通性が強い。中世の住居址のあり方に類似しており、その頃のものと思われる。（述部）

10 大 東 遺 跡

1) 位置

遺跡は飯田市伊賀良三日市場にある(4図1、写二十五)滝沢川につくる扇状地南端部にあって、滝沢川北岸の台地が遺跡である。酒屋前遺跡とは小さな凹地をはさんで南側にある。遺跡は間に柳ツボという凹地を挟み南側の小さな舌状台地と、北側のゆるい傾斜地とに分かれる。南側の台地は水田となり階段状の造成が見られ、用地内での高さは標高555mである。北側のそれは畑地となっていて、標高550mある。

中央道は遺跡の先端部を南北に横切って、飯田インターへと入っている。グリッドは99+0杭をAAとし、AR~FI、37~63までに設定した。

南側の台地では、耕土(30cm)、黒褐色土(30~40cm)そしてロームとなり、住居址はロームをほりこんでいた。北側では耕土(30cm)、黒褐色土(40cm)そしてロームとなっていた。

2) 遺構と遺物

遺構は住居址と土壌、そして溝が検出された。南側の台地からは弥生時代の住居址2軒と、土壌が4、北側の傾斜地からは中世の住居址2と、土壌群、溝があった(12図3・4)。

ア 住居址

ア) 1号住居址(13図、67図、113図、写二十五)

遺構 滝沢川に接する台地縁にあって、2号住居址と並んでいる。6.50×5.20mの長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN81°Eをはかる。壁はほぼ直にほりこまれ、北で39cm、南で32cmの高さをもつ。床面は中央部が良好で、壁よりはあまりよくない。柱穴は4主柱穴で、床面中央部に浅いピットがある。また壁にそって、径10cmの柱穴が溝をおいて並んでおり、東側では少ない。壁のための柱穴と思われる。炉は西よりの主柱穴間中央部に、直径50cm、深さ10cmにほりくぼめた地床炉である。南壁東よりと、北壁西よりに大きなほりこみがあり貯蔵穴と思われる。このほりこみは住居内側に土手をつくっている。

遺物 土器(67図)、石器(113図)が出ている。土器は小破片で、壺(12)、甕(13)がある。器形や文様から見て弥生時代後期中鳥式土器である。石器は打石斧(1)、敲打器(2)、磨石(3)がある。

イ) 2号住居址(13図、67図、113図、写二十六)

遺構 1号住居址の西にあって、5.55×4.35mの長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN42°Eをはかる。壁はほぼ直にほりこまれ、壁高は20cm前後ある。床面の状態は中央部でよく、壁よりが悪い。柱穴は4主

柱穴で、南よりに1つ浅いピットがある。伊は北東よりの主柱穴間中央にあって、床直を直径45cm、深さ10cmにほりくぼめ、南西側に2個の石をハの字に並べた枕石がある。東壁の南よりに、内側に土手をめぐらしたほりこみがあり、貯蔵穴と思われる。

遺物 土器(67回)、石器(113回)があり、土器は壺(14)、甕(15~20)、茶杯(21)があり、文様、器形から中島式土器である。石器は打石斧(4~7)、有層屈状形石器(8)、横刃石器(9・10)がある。

ツ) 3分住居址(14回、写二十七)

遺構 北側の扇状地で、南縁に近いところであって、4号住居址と並ぶ。3.30×2.60mの長方形の竪穴住居址で、主軸方向N33°Wをはかる。北壁中央東よりに95×60cm、深さ10cmの張り出しがある。壁はほぼ直にほりこまれ、壁高45cmある。ほりこみが砂土中であるため床面の状態はよくない。柱穴はない。遺物の出土もない。

テ) 4号住居址(14回、写二十七)

遺構 3分住居址の東側にある。3.25×3.15mの、北壁と西壁が直で、南壁と東壁がカーブをもつ竪穴住居址である。主軸方向はN8°Wをはかる。砂土をほりこんであることもあるが、壁は中央に傾斜してほられ、あまりよくない。床面の状態もよくない。伊居内には人頭大からこぶし大の礫が40個ばかり入りこんでいた。また覆土中からは木炭が見られた。柱穴はないが、壁外側に小ピットが点在したが、この住居址に伴うものか不明である。

遺物 覆土中より、中世陶器の山茶碗片口、天目碗、内耳鍋、常滑水甕片が出ている。

イ 土壕(2回、14回、15回、16回、写二十八)

土壕は南側台地の4個をのぞいては北側の扇状地に集中する。それらはさらに5か所に集中している。A群は列状に、B・C・D群は塊状に集中している。E群は溝の外側にある。土壕2・4は内部から木炭が多くでている。A群では土壕のから青銅片が出ている。C群の土壕37は内部に石が4個入っており、宮筋の水甕片がでている。E群の土壕37は直径2.50mの大きな円形で、すり鉢状のほりこみで、壁外側には北東部を除いてロームをおきつきかためてあった。住居址4号と共通するところが多い。

ウ 溝状遺構(12回、写二十六)

溝は扇状地東端にあって、南北に走り、並んでいる溝3本と、それに北側で直交し、東西に走る溝がある。溝底には石や砂があって水の流れていたことを示す。溝3から中世・近代陶器片が出土し、真水甕も一枚あった。近世の用水路と思われる。

エ その他の遺物

環溝外から出土した遺物は、土器、石器、鉄器がある。土器(67図)は、縄文時代後期遅之内式土器(22~26)、晩期土器(27)がある。中世陶器としては天日碗、山茶碗、水甕、青甕、内耳甕などがあり、近世陶器も多い。石器(113図)では弥生時代の石鏃(11)、打石斧(12~14)、有肩扇状形石器(15)横刃形石器(16)、石鏃(17、18)があり、特に注目されるものとして、旧石器時代のナイフ(19)、小形のコア(20)、スクレイパーなどがある。鉄器としては中・近世の火打金具がでてゐる。

3) まとめ

大東遺跡では、住居址と土壌が検出された。住居址は南側台地で弥生時代後期の竪穴住居址2軒があり、これは同時期のものであり、さらに用地外西側に続いているものと思われる。住居址そのものは当地方に普遍にあるプランであるが、1号住居址の壁にそつての柱穴列は例がない。また、上手をもつ貯蔵穴もその位置、用途についての検討が必要であろう。3・4号住居址はそのあり方から見て、小畑外遺跡の中世竪穴住居址と共通し、出土遺物も中世陶器であるので、中世につくられたものであろう。

土壌は、そのほとんどが中世以降のものと思われるが、決定的なきまめでは少ない。A群のは袋状のほりこみであり、深さから見ても貯蔵穴と想うが、B~D群のそれは、墓塚とも考えられる。E群のはまた趣きを異にしており、土壌57のような特殊なあり方も、今後の類別まちである。これらの土壌については、扇状地全体に広がってあるだろう中世集落の中で検討されるべきものと思う。

断片的な資料であるが、旧石器の存在は注目される。殿丘地帯での旧石器の発見例はほとんどなく、このような地状でないところにも存在するということは、今後の各池の調査にも、その面での注意を与える。(明海)

11 酒屋前遺跡

1) 位置

遺跡は飯田市伊賀良大瀬六にある(4図、写二十九)。扇状地扇端部の緩傾斜地にあつて、北は凹地をへだてて滝沢井屋遺跡、南は凹地をへだてて大東遺跡となっている。遺跡の中心は標高550mで、用地内において、下段は544m、上段が553mと9mの差がある。上段部北側は凹地との比高2mある。下段では50cm足らずとなっている。階段状の水田となっている。

中央道はここから飯田インターに入るため、丘先端部を大きくおおっている。グリットは94+40杭をAとし、CSまで、2～95までに設定した。

層序は上段部では赤土、黒色土、砂礫混り褐色土、粘質褐色土、ロームとなっている。下段部では粘土、黒色土、褐色土、ロームとなっている。場所によってその堆積は違ふが、上段では180cmあり、下段では30cmが平均的厚さである。

2) 遺構と遺物

遺構は住居址16、竪穴状遺構3、柱穴群2、竪穴状遺構1、土壇107、溝状遺構3が検出された(17図1)。その分布は、中央道のおとる中央部から西側に集中し、用地内東端に土壇群B・Dと住居址7・8・15号があり、後者の広がり、上段とちがうと思う。

ア 住居址

ア) 1号住居址(17図、70図、71図、114図、写三!)

遺構 台地中央部南縁に近いところにあつて、4.00×3.40mの長方形の竪穴住居址で主軸方向はN5°Wをはかる。壁・床面とも砂礫混り褐色土をほりこんでいるため、状態はよくない。壁高は30cmで西側がやや高い。東壁にそつて、床面が2段におちこんでいる。柱穴は4柱穴である。炉は北西支柱穴間中央にあつて、45×50cmの不整形にほりくぼめ、南よりに雙淵部をうめ、南に接して石をおき枕石としている。

遺物 土器、石器で、土器(70、71図)は壺(70図1)と甕(70図2・3、71図1～3)があり、壺は東海地方の寄道式土器の一形態で、持ち運ばれてきたものである。壺は文様などから見て弥生時代後期の堅光寺塚式土器である。2は炉に埋められていた。石器(114図)は打石斧(1・2)、横刃石器(3)、磨石庵丁(4)、敲打器(5)、石剣がある。

イ) 2号住居址 (17図、131図、写三十)

遺構 1号住居址の北側にあり、3・4・6号住居址とし群をなす。2.80×4.20mの長方形の竪穴住居址で、主軸方向N29°Eをはかる。壁は浅く、内側に傾斜している。床面は起伏があり平らでない。柱穴は住居内と周辺にあるが、この住居址につくものか、柱穴群2のAにつくものかは判断としないが、密接な関係はあると思う。住居内中央の柱穴は床面をもちあげてほり肩をつくっている。内部北よりに礎が集中して入っている。が、カマドはない。

遺物 鉄製品と陶器がでており、陶器は小茶碗の片口鉢、天日碗の破片で、鉄製品(131図)は鉄器(1)、毛抜き様のもの(2)、釘、火打金具が出ている。

ウ) 3号住居址 (18図、写三十一)

遺構 2号住居址の西にあって、4号と並んでいる。2.20×2.10mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N33°Eをはかる。壁のほりこみは浅く、傾斜している。床面は中央部がかたい。西壁中央に良質の粘土が集積されている。その付近に木炭が見られた。その範囲は1.5×0.8mで、あたかも粘土カマドのようである。住居外側に柱穴が見られるが、柱穴群Iと関連するかも知れない。遺物は出土しない。

エ) 4号住居址 (18図、70図、写三十一)

遺構 3号住居址の1m南側にある。2.40×2.10mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N63°Wをはかる。大きさ、形状とも3号に類似する。壁のほりこみは浅く、状態はよくない。床面はかたく良好である。柱穴は壁外に4本みられる。住居址南壁外側に4.1×0.4mの溝状のものがあり、L字形にまがって、4号住居址の南隅におこんでいる。この住居址に伴うものと思われる。

遺物 陶器片で、山茶碗の片口鉢(70図4)と青磁片が出ている。

オ) 5号住居址 (18図、70図、71図、写三十一)

遺構 上段部の台地北縁にあって、14号住居址と並んでいる。4.50×3.60mの隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向N81°Wをはかる。壁はほぼ直で、壁高は50cmある。床面は黒褐色土の貼床を非常に硬い。柱穴は4本柱で、西壁よりに5このピットが並ぶ。床中央部にも2この浅いピットがあり、その一つに焼土が見られる。東壁中央に貯蔵穴と思われるピットがある。炉は西側主柱間中央に床面をほりくぼめ、その南よりに燧破片をおいている。

遺物 土器と石器がでている。土器(70・71図)は、壺(71図4～11)、甕(12、70図5～8)、鉢、器台がある。壺(71図11)、甕(70図5)、器台は東海地方から持ち運ばれてきたもので、寄道式土器である。他は照光寺原式土器である。70区6の甕は炉におかれていた土器片である。石器は打石片がでているのみである。

カ) 6号住居址 (18図、写三十二)

遺構 2号住居址の東側にあり、土壌24に北西隅を切られている。4.00×4.80mの長方形の竪穴住居址で、主軸方向N30°Eをはかる。壁は突きかためてかたく、内側に傾斜している。床面も非常に硬く、北壁

側に傾斜している。柱穴は住居内と壁外にあり、規則性がある。北西壁にそって8この柱穴が並んでいるのは明らかに当住居のものである。壁外のは柱穴群Ⅱとの関連も考えられる。住居内南側の深さ20cmの柱穴は床面を盛り上げて廻廊をつくっており、2号住居址のものと同様である。この点から柱穴群Ⅱと住居址は同時性が考えられる。

遺物 陶器片がでており、火日碗と古瀬戸皿である。打石斧はあとのまじりと思う。

キ) 7号住居址 (19図、72図、114図、写三十二～三十四図)

遺構 用地内では下段、東北端にあって、住居址8号、15号、土壌群Dとが集中しているが、弥生時代の住居址は1軒のみである。5.10×5.60mの隅丸方形の竪穴住居址で、その主軸方向はN15°Wをはかる。状況40cmで、床面、壁ともに良好である。柱穴は4主柱穴で、東壁中央のテラスに接して貯蔵穴がある。北側主柱穴中央に床面をほりくぼめ、中央に台付竈の胴下部をうめ、南に接して石を2こ並べて枕石としている。この住居址では床面に床面より3～5cm高く、三角形状のテラスをつくっている。この住居址は大災にあい、建築材の炭化したものが壁から中央を向いて見られた。また、遺物の持ち出しができなかったのか、一セットの土器が現位置におかれてあった。そのほとんどテラスの上で、炉の北側にも3個あった。

遺物 土器と石器がでており、土器の出土状態は大災にあったため原位置におかれたままで出土している。住居址南側のテラス上には、遺構図(19図1)の番号で見ると、1(72図3)は大形の器台で、脚部を上にしてある。2(73図1)は壁でテラスより下におちて柱穴のところにあった。3(72図7)は壁で横だおしになっていた。4(73図3)は台付竈で横だおしになっていた。5(72図8)は壁でもっとも大きい。横だおしになっていた。6(72図5)は高坏脚部で、炉の北、壁よりにあった。7(73図2)は台付竈で炉の北側にあった。8(72図6)は壁で炉の北側、東よりにあった。いずれも横だおしにあった。9(72図9)は壁でテラスの上に横だおしになっていた。10(72図2)は浅鉢でテラスよりおちかかってつぶれていた。こうしたことからみて、テラスが特別な意味をもっていたことがわかる。小形壺(72図1)はその出土位置は不明である。竈、台付竈は煮沸用のものであるが、貯蔵用の壺が小形壺をのぞいて破片一つないのが注目される。小形壺、器台、浅鉢は東海地方の寄道式土器である。他は座光寺原式土器である。73図4は炉にうめられていた。テラスに近い床面から台石と思われる磨石状の石(114図7)がでており、土産が磨かれている。

7) 8号住居址 (19図、71図、114図、132図、写三十五)

遺構 用地内の下段東北端にある。直径5.3mの円形の壁穴住居址で、主軸方向はN61°Wをはかる。壁床面ともに良好である。北西側と南東側の壁に沿って風溝がある。北壁中央に1m×50cmの高さ20cmのテラスが認められる。柱穴は4主柱穴で、西壁より柱穴が2つ並ぶ。炉は中央より北西よりあって、方形石阿がと思われるが、炉石はすべてぬかれている。東側壁よりに遺構がある。胴下部を欠く深鉢を、11線部を床面と同じレベルにして工位にうめている(71図13、132図3)。内部には乳棒状磨石斧片がある。

遺物 土器と石器がでており、土器は埋壺をのぞいてみな破片である(71図13～22)。文様から見て加曾利E式土器後半のものである。埋壺は口径35cm、下径22cm、高さ36.5cmの大きさである。石器(114図)は打石斧

(8-10)、横刃形石器(11-12)、磨石斧(13-14)、敲打器(15-16)、礫石がでている

ケ) 9号住居址(20図、71図、73図、114図、写三十三)

遺構 用地内中央部の台地北縁にあって、10号住居址と並んでいる。4.20×4.55mの隅丸方形の堅穴住居址で、主軸方向N81°Eをはかる。壁の状態はあまりよくない。壁高25cmある。床面は中央部がやや軟弱であるが、他は良好である。柱穴は4主柱穴であるが、支柱と思われる柱穴もあり、炉北側のは2便接するように並んでいる。東壁と南壁に接して貯蔵穴が見られる。炉は北側主柱穴間中央部に床面を円形にほりくぼめ、中央に壺胴部をうめ、南に接して石をおき枕石としている。炉南東40cmのところにも浅いピットがあり、焼土が認められ、広い炉であったかも知れない。

遺物 土器、石器がでている。土器は壺(71図25・28)、甕(26・27)、丹彩の小形鉢(23・24)、器台(73図5)がある。壺(28)と器台は東海地方の寄道式土器であり、他は鹿光寺原式土器である。石器は磨石磨丁(114図18)と横刃石器(17)がでている。

コ) 10号住居址(20図、写三十六)

遺構 9号住居址の東北にあって、いわゆる堅穴住居址ではない。5.00×4.00mの長方形に、巾20~25cm、深さ15~20cmの周溝がめぐり、南溝が切れている。北溝には柱穴がある。翔町山岸遺跡でも同様なものが検出され、壁囲いのある生居址と考えた。主軸方向N53°Wをはかる。

遺物 周溝内部より、弥生時代後期土器片がでている。

カ) 11号住居址(21図、74図、114図、132図、写三十七)

遺構 上段中央部にあって、この付近には同時期の住居址はない。4.50×4.00mの円形の堅穴住居址で主軸方向はN1°Eをはかる。壁の状態はよくなく、高さ20cmある。壁にそって周溝がめぐり、南西部で切れている。床面は細りこんだ砂礫混り褐色土に部分的に貼り床があり、その部分は良好である。柱穴は4主柱穴である。炉は中央より北によって、方形の石囲炉であったと思われ、炉石はほとんどはぎされていり、南壁よりに、仁線部を欠き、土壁を齧って平らにした鉢を、土壁が床面とほぼ同じにして、正位にうめていた。なおこの埋裏は胴下半に穿孔が見られる。

遺物 土器と石器がある。土器(74図)は深鉢で、1は埋裏のものである。文様などから見て、加曾利E式土器後半のものである。埋裏は上径24cm、底径10cm、高さ30cmの大きさ、胴下半に直径7cmの穴がある。石器(114図)は打石斧(19・20)、横刃石器(21~22)、スクレイパー(23)、石鏃(24)がある。

シ) 12号住居址(21図、73図、74図、131図、写三十八)

遺構 用地内上段の西はずれにあって、13号住居址と並んでいる。4.60×4.85mの隅丸方形の堅穴住居址で、主軸方向はN58°Wをはかる。壁、床面とも不良である。壁高は50cmある。柱穴は4主柱で、炉北側に浅いピットがある。また東南壁の中央に貯蔵穴と思われるピットがある。炉は北西より主柱穴間中央に床面を円形にほりくぼめ、その中に壺胴部をうめていた。

遺物 土器と鉄製品が出ている。土器(73、74図)は壺(74図12・13)、甕(14~16)があり、73図6

の裏側部は炉にうめられていた。東海地方の土器片もある。文様から見て、宍光寺原式土器よりは中島式土器に近い。鉄製品(131図)は尖り根の鉄鏃(3)とT.具片と思われる鉄片(4)がある。

ス) 13号住居址(22図、73図、74図、写三十八・三十九)

遺構 用地内上段にあって、12号住居址の南側に位置する。4.34×4.56mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N28°Eをはかる。壁はよくないが、床面の状態はよい。柱穴は4主柱で、南側に支柱がいくつかある。南壁中央部に貯蔵穴が見られる。炉は北東主柱穴間中央を円形にほりくぼめ、中央に台付甕胴下半(73図8)をうめ、南に接して石をおき枕石としている。

遺物 土器・石器があり、土器は壺(74図17~20、73図7)、甕(74図21)、台付甕(73図8)があり、壺の完形品(73図7)は胎土緻密、焼成良好な無文のもので、東海地方の土器である。中島式土器に近い。石器(114図)は打石斧(25)、敲打器(26)、礮石(27)がある。

セ) 14号住居址(22図、74図、114図、写三十九)

遺構 5号住居址の南側にある。5.50×4.75mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向N71°Wをはかる。壁・床面とも状態は悪い。柱穴は4主柱穴である。炉は北西より主柱穴間中央を円形にほりくぼめて、南縁に石をおいて枕石としている。この住居址のみに土器を埋めていなかった。廃絶後と思われるが、住居内中央部に集石が見られ、その中に3個の石を台にして40×30cm大の平板石一枚のせたような状態のものであり、単なる投げこみではないように思われた。

遺物 土器・石器がでている。土器(74区)は壺(22)、甕(23~25)、台付甕があり、いずれも小破片である。中島式土器に近い。石器は礮石(114図28)がでている。

ソ) 15号住居址(23図、74図、114区、写四十)

遺構 用地内最下段東北端にあって、8号住居址の北偏、台地縁にある。東側はけずられているが、直径4.60mの円形の竪穴住居址で、主軸方向はN57°Wをはかる。壁は良好である。壁にそって底溝がめぐっている。床面の状態は普通。柱穴は6主柱穴と思われるが、東側のは確認できない。炉は中央より北西によってあり、石囲炉と思われるが、炉石はすべてぬかれている。

遺物 土器・石器がでているが、その量は少ない。土器(74区)は深鉢片(26~31)である。文様から見て加曾利E式土器後半のものである。石器は打石斧(114図29)1個のみである。

タ) 16号住居址(23図、75図、115図、写四十)

遺構 用地内下段のうちでも北端で、土壌群Bの上面につくられたものである。床面は全くわからず、炉によってその住居址を確認した。土壌群より明らかに上面にあり、柱穴も認められる。どの柱穴がこの住居址のものであるかについてはきめがたい。炉は石囲いかで、南北両側のものが欠けている。

遺物 土器と石器がある。土器(75区1~14)は深鉢片で、縄文時代後期掘之内式土器が多く、10・11は加曾利E式土器終末期のものである。石器(115図)は打石斧(1~4)、横刃形石器(5)、石錐(6)がでている。

イ 竪穴状遺構 (24図、131図、写四十一)

遺構 上段の北端にあって、砂礫混り褐色土をほりこんでいる。4.50×4.90mの南北にやや長い形状で、長軸方向はN25°Eをはかる。壁・床面とも不良で、壁高7～15cmと浅い。南壁は共通壁であり北壁、に向けて三分割される。西側からⅠ・Ⅱ・Ⅲとする。Ⅰは4.60×1.90mで、西南隅にテラスをもち、西壁北よりに石の入った1.70×0.30m、深さ10cmのほりこみがある。Ⅱは4.90×1.10m、Ⅲは4.80×0.80mの大きさで、ⅡとⅢの間に巾50～60cmの壁がある。Ⅲの北側外に柱穴が2個ある。ⅡとⅢのつながる南端は小礫が集中している。ⅠとⅡの間にある壁は断面三角形を呈し、突きかためたらしく非常に硬く丈夫。

遺物 陶器片と金属製品がある。陶器は「本」の刻印のある天目茶碗、鉢、皿があり、鉄製品(131図5)、銅製品(6・7)があり、これらの器種は不明である。

ウ 柱穴群

ア) 柱穴群Ⅰ (24図、写三十一の80)

遺構 台地中期にあり、3・4号住居址を包括するように検出された。径20～30の円形で、深さ25～50cmの柱穴群で、そのいくつかに規則性が見られる。長軸6.80m、短軸5.10m、その長軸方向はN28°Eをはかる。住居址と密接な関係のあるあり方を示している。遺物はない。

イ) 柱穴群Ⅱ (24図、写三十二の82)

遺構 用地内中央部、柱穴群Ⅰの東側にある。2・6号住居址にかかって北側に広がる。径20～40cm、深さ11～60cmの柱穴群で、比較的通りがよい。その配列については、全体を一つの建物としてとらえるのと、2つの建物にわけてとらえるのとある。前者は長軸11.10m、短軸9.00m、その長軸方向30°Eをはかる。4間×5間の大きな建物である。後者の1つは、2号住居址を中心とするもので、長軸7.80m、短軸3.60m、長軸方向N30°Eの2間×3間の建物である。もう1つは、6号住居址を中心とするもので、長軸5.40m、短軸3.60mの長軸方向N31°Wを示す2間×2間の建物である。いずれにせよ、これらの柱穴遺物は住居址と密接な関係をもつものと考えられる。遺物はない。

エ 精練状遺構 (25区、125図、126図、127図、131図、写四十一、四十二)

遺構 用地内中段の東縁にある。遺構は砂礫混り褐色土をほりこんでいる。東西6m、南北10mの範囲に確認されたもので、南北に走る三列の溝と、その西側に並ぶ柱穴群がそれである。溝は巾50～90cm、深さ10～15cmの浅いもので、北から南へ流れていて、中には砂が入っていた。この溝上面の覆土からは遺物が見られたが、溝内からは遺物の出土はなく、溝も南北にのびていることを考えると、精練状遺構以前の水路と思われる。ピット群からは遺物の出土が多かった。

遺物 陶器、精練用具、漆器、鉄片がでている。陶器は片口鉢、すり鉢、天目碗、古瀬口、内耳

鏡、灯明玉などで、いずれも破片である。精練用具としては、土製の鋳型と思われるもの（125区3）、土製のつば（125区4・5、126区1～4、）同支脚（？）（126区5）、ふいご口（127区1）があり、そして多量の溶滓と、少しの鉄滓がある。また器種不明の鉄片（131区8～11）もでている。

オ 溝状遺構（171区、73区、写四十四）

遺構 溝状遺構は、精練状遺構のところの溝を除いて、3本検出された。溝1は、台地北縁を東に走るもので、土壌群B、Dの間を走っている。巾16m、深さ1.5mの大溝である。溝2は上段を南に走るもので、巾1.5m、深さ1mのV字溝である。溝3は溝2の西にあって、南に走る。巾0.9m、深さ0.5m、U字溝である。いずれも中に砂が堆積していて、用水路である。

遺物は、溝2から灰釉陶器片、溝3から鉄粒の上皿（73区9）がでている。

カ 土壌

本遺跡からは、用地内全域に土壌が検出され、107の多数に及んでいる。大きくA～Eの5群に集中し、いくつかは単独のものもある。形、深さ、断面形、埋土の状態など変化があり、時期も多時期にわたっている。

ア) 土壌群A（25区）

中段にあり、土壌2～4、21～23の6こがそれぞれである。灰状に並んでいる。遺物はない。中世と考えられる。

イ) 土壌群B（26区、75区、115区、129区）

下段の北端にあって、16号住居址の下部にある。土壌8～16の9こで、土壌内からは土器、石器がでている。これらから見て、縄文時代の土壌群である。

ウ) 土壌群C（27区、75区、115区）

用地内中央部、土壌群Aの東にあって、土壌25～36の12こである。このうち26は27に切られ、中より縄文中期土器浅鉢（75区23）を出したことから除かれる。他からはほとんど遺物がなく、中世のものである。

エ) 土壌群D（28区、75区、76区、77区、115区、116区、129区、131区）

下段東北端にあって、7・8・15号住居址の中に混在している。しかし、8・15号住居址より上面からほりこまれている。土壌37～80、105～107の47こである。住居址があることもあって、中からの遺物出土は比較的多い。それらから見ると、弥生利E式土器後半の時期のものと思われる。

オ) 土壌群E（29）

用地内最上段にあり、土壌100～104の5こである。103からすり鉢片、釘、鉄滓が出土していること

から見て、中世のものである。

カ) その他の土器 (25図、26図、27図、29図、76図、115図、116図)

土壌群に入らないもののうち、注意されるものとして、土壌17は、円形の土壌で、中に小礫とともにつば付土器の破片がある。土壌18はいわゆるロームマウンドの土壌である。土壌89は土壌をとりまいて柱穴が5こ検出されている。

キ その他の遺物

遺構外から出土した遺物は、土器、石器、鉄製品がある。土器は縄文時代前期末 (76図10)、中期初頭 (11)、加曾利E式土器、後期型之内式土器 (12・13)、晩期大洞A式土器の破 (14～16)、水神平式土器 (17) があり、弥生時代のは後期土器、土師器は丸高式と団分式が、中世のものとしては各種の陶器片がでてい。石器 (116図) も打石斧 (7～19)、横刃石器 (20～22)、磨石斧 (23～25)、石錘 (26) 四石 (27・28)、石ヒ (29)、スクレイパー (30)、石鏃 (31～35)、磨石礫未製品 (36)、石鏃、砥石がある。土製品としては円板 (129図 5.6) がある。鉄製品 (131図) には、釘、刀子、くさび、鉄鏃、火打ち金具、鉄片などがあり、キセル、寛永通宝もでてい。

3) まとめ

住居址は、縄文時代4軒で、16号を除いて加曾利E期であるが、11号は上段に単独、8・15号は下段にあり、後者は滝沢井尻遺跡の同期のものとのつながりを考えたい。弥生時代8軒も、7号住居址以外は上段にあり、そのほとんどが鹿光寺原期である。12・13号はやや新しく中島式土器ともいえる。7号住居址は土器のおかれ方が注目される。これらの住居址からは東海地方からの土器があつて注目される。またこの住居址群と滝沢井尻遺跡の方形周溝墓とのつながりも考えなければいけない。中世 (塚倉～室町) 4軒は、近くにある小畑外遺跡のそれと共通しており、最近注目されてきた遺構である。住居址の周辺にある柱穴群とともに、この時期の建造物のあり方は今後の課題である。

整穴遺構は最初の知見であり、その性格は全く不明である。時期は中世である。構造物は発掘時に特にかたい面などなく、明確につかむことはできなかった。出土遺物から見て、あれたり、流れたりしていないので、この場所か、近くに遺構があつたと思う。鉄鍬の科学的な分析については権田薫郎氏に依頼してある。

土壌は充分検討しなければいけないと思う。大きく見て、時期的には縄文時代中期と中世のものにわけられる。

この遺跡だけではないが、調査結果については、今後への問題を多く残している。(附Ⅲ)

12 滝沢井尻遺跡

1) 位置

遺跡は飯田市伊賀良大瀬木にある(5図1、写二十九)。伊賀良区のほぼ中央、南沢川の形成した扇状地扇端部にある。この扇端部は小さな流れによって東に走る小台地に分かれており、北から小畑外遺跡、滝沢井尻遺跡、酒屋前遺跡、大東遺跡と並んでいる。滝沢井尻遺跡は、滝沢井にそって、その南岸に東西にのびる、巾30m、長さ200mの細長い台地である。そのほとんどが水田となっている。

中央道は、この一帯が飯田インターになり、丘先端部を大きくおおっている。グリッドは96+0杭をAとし、YT~BL、39~116までに設定し、特に用地内の西と東に重点をおいて調査した。

2) 遺構と遺物

遺構は住居址、柱穴群、方形両溝墓、溝状遺構、土壌がある。その分布も、用地内東西両端に見られ、西側には住居址、方形両溝墓、柱穴群、溝、土壌が、東側には住居址・土壌がある。その中間は水田(作物)、家畜小舎、住宅があって調査しなかったが、当然遺構の存在が考えられる。(30図1)

ア 住居址

ア) 1号住居址(30図、78図、117図、128図、写四十五)

遺構 用地内東はずれにある住居址群の1つで、茶褐色砂土をほりこんでいる。3.90×4.90mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN11°Eをはかる。柱穴は4主柱穴で、床中央部に3個、東隣主柱穴の近くに3個の柱穴が見られる。主柱穴内の床面の状態はよい。壁に近い部分はやわらかい。炉は北側主柱間中央にあって、柱穴を結ぶ線よりは中に入っている。床面を径60cm、深さ10cmにほりくぼめ、南側に石を2つおいて枕石としている。この住居址は縄文時代の7号住居址の上ののってつくられている。

遺物 土器・石器がでている。土器(78図)は、壺(1)、甕(2・3)、台付壺、高杯がでている。いずれも小破片である。壺の文様から見て弥生時代後期鹿光寺原式土器である。石器(117図)は磨石包丁(1~3)と、磨石鏃(4~6)がでていて、この時期の住居址としては種別の個数が多い。2・4はそれぞれの未製品である。

イ) 2号住居址(30図、78図、117図、写四十六)

遺構 用地内東はずれからは、縄文時代の住居址が3軒、孤状に並び、その中央にあるのが2号住居址である。直径5.90mの円形竪穴住居址で、主軸方向N34°Wをはかる。床面は砂質のためあまりよくなく、

中央部にわずかにかたい部分が見られた。柱穴は主柱穴6個で、南東壁よりののは煙突と同じ性格をもつピットではなからうか。炉東側のピットは貯蔵穴と思う。炉は中央より北西よりにあって、石囲炉であるが東側の炉石をのぞいてははずされている。一部は炉内におちこむ。

遺物 土器、石器が出ており、土器(78区)はいずれも深鉢で、器形のおかるもの2個(4・5)以外は破片である。器形、文様から見て、縄文時代中期加曾利E式土器前半のものである。石器(117区)は打石斧(7~9)と横刃形石器(10)がある。

ウ) 3号住居址(31区、79区、80区、117区、写四十六・四十七)

遺構 2号住居址の西側にあって、直径4.7mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N86°Wをはかる。壁にそって115~20cm、深さ4~7cmの尻溝がめぐる。床面の状態はよい。柱穴は4主柱穴で、東側壁よりに入口部の柱穴と煙突と同様格と思われるピットが見られる。炉は中央より西よりにあって、方形石囲炉であったと思うが、炉石はぬかれてない。

遺物 土器、石器がでており、その量は多い方である。土器(79・80区)は、床面より完形の鉢(80区1)が横にたおれてあった。器形の大きな深鉢が多く(79区)、破片であるがつけ付土器もある。器形、文様から見て、加曾利E式土器後半のものである。石器(117区)は打石斧(11、12)、磨石斧、横刃形石器(13)、スクレイパーが出ている。

エ) 4号住居址(31区、81区、117区、写四十七、四十八)

遺構 用地内西端の住居址群で、5号住居址に一部重なっている。台地北縁に近いところである。3.80×4.10mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN85°Wをはかる。壁の状態はあまりよくない。床面はかたく良好である。柱穴と思われるピットがあるが不規則である。カマド南側の大きなほりこみは貯蔵穴である。カマドは東壁の中央より南よりにあって、石心粘土カマドで、耕作により破壊されていた。この家は火災にあったためか、木炭が多く、建築材と思われる炭化材が壁から中央にむいてある。直径6~8cmの丸太材をそのままか、2~4つ割って使用している。遺物の出土は比較的多い。

遺物 土師器と灰釉陶器で、須恵器は全くない。土師器(81区)は小形の坏(1~7)で、5は輪花となっている。6・7は茶台がつく。灰釉陶器は皿(8・9)と鉢(10~14)があって、殺皿(8)の底部には墨書が見られる。字は靑読できない。石製品として砥石(117区14)がでている。

オ) 5号住居址(31区、写四十八)

遺構 4号住居址の東側にあり、西側の一部に4号住居址がのっている。4.60×5.40mの長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN62°Wをはかる。壁のほりこみは17cmと浅い。床面は全体に良好である。柱穴と思われるピットが北壁と南壁にそって並んでいる。北壁側に貯蔵穴がある。カマドは石心粘土カマドで、東壁の南よりにある。耕作のため北側の袖はない。出土遺物は全くない。

カ) 6号住居址(32区、写四十九)

遺構 用地内西端にある住居址で、方形周溝墓南側にある。5.00×2.60mの長方形の竪穴住居址で、主

軸方向はN64°Wをはかる。ほりこみは北西にやや深く、壁は内側にゆるく傾むくようにぼられている。床面はかたく良好である。住居内には人頭大の礎がつまっており、当初、ここに古墳があったといわれていたので、その石室床部かと思った。この住居址内と、そのまわりに、主軸方向を同一にする柱穴が見られた。それは南西にのびておると、住居内のそれは覆土をほりこんでいたことから、この住居とは区別した。

遺物 石の間から山茶碗の破片が出ている。

キ) 7号住居址 (32図、50図、写四十九)

遺構 用地内東端の住居址群の1つで、2号住居址の南にあり、1号住居址の下にずれて重なっている。直径4.90mの円形の壁穴住居址で、主軸方向はN45°Wをはかる。床面は中央部はかたくて良好であるが、壁近くはよくない。柱穴は数多くあり、6立柱と考えられ、東南の一群は、住居址拡張前の柱穴とも考えられる。炉は中央より北西によってあり、石罏炉であったと思われるが、炉石はのぞかれている。

遺物 土器と石器があり、土器(80図)はいずれも深鉢(3~5)で、5は完形である。加曾利E式土器の前半にあたるものと思う。石器は打石斧と石鏃がでている。

イ 柱穴群

柱穴群(32図3)は、6号住居址と重なっており、その主軸方向を同じにしている。南西にもう一列以上のびているのを確認しているが、用水路、水匠のため調査できなかった。4間×?間のもので、柱穴の通りはよい。

ウ 方形周溝墓 (33図、80図、131図、写五十、五十一)

遺構 方形周溝墓は、用地内西端に見え、北西半分は用地外にのびている。また中を用水路が流れていて南側の周溝は充分調査できなかった。地主さんの好意により、墓趾の半分と、北と西のコーナー、西溝の場所を確認させてもらった。南北11.30m、東西11.20mのほぼ方形の大きさで、主軸方向はN68°Wをはかる。東溝の中央よりやや北によって機軸部を残して溝は一周する。溝は0.9~1.3m、深さ30~60cmあり、逆台形状にぼられている。ほぼ中央部に、主軸を同じにして、墓壇がある。2.30×1.10mの楕丸長方形で、深さ30cmほりこまれている。墓趾北側にはロームを意図的に盛りあげてある。墓城内西隅に近いところに、鉄剣が2個、先端を北西に向けて並列していた。

遺物 溝内より、2片の弥生式土器(80図6・7)がでている。鹿光寺原土器の型である。墓壇内からは、保存状態のよい鉄剣(131図14・15)が出ている。15は墓下方を若干欠損するが、残部の長さ28.5cm、巾は2~2.9cmで、柄部の方に巾広くなっている。先端は丸味をおびて尖っている。中央に錆が見られ、その部分の厚さは0.6cmある。両刃の剣で、切先はふくらみもち刃方は切先へ向うに従って鋭にせまり巾がせまくなる。錆は柄方角に向うに従って明瞭となり、墓に至って消え、墓断面は長方形をなす。刃間はゆったりとした丸味をもって墓に移っている(呑口式)。墓に柄と思われる木質部が残る。14は長さ13.5cmで

最大巾は剣身中央より切先によってあり、1.7cmある。鑊部の厚さ0.3～0.4cmである。剣身と莖の間に刃間がなく、明瞭に区別できないが、莖になると鋭くない。目釘穴は莖の下部にある。これは大ききも小さく、小形鉄剣ともいえ、欠損品の再加工作品（磨上）とも考えられる。

エ 溝状遺構 (33区、34区)

溝は用地内西端の南はずれに大きいのがあって、それを溝1とする。中央部の南はずれには2つあって溝2、3とする。いずれも用水路で、台地南縁に沿って流れていたものと思う。

オ 土壇 (34区、35区)

土壇は22検出し、用地内西端、東端、そして中央部の南端の3か所にある。円形のもの、不整形円形のもの、方形のものとなり、ほりこみも各種ある。中の状態も石の入るのとそうでないものがある。土壇14、15はローマウンドのものである。土壇内からの出土遺物は、土壇3から中世山茶碗の片に鉢が、土壇5からクルミの炭化物、土壇6から縄文時代後期竈之内式土器(80図10、11)、土壇13から前期末土器(12)、土壇14から中期土器(13)、土壇15から前期末土器(14)、土壇18から前期末土器(15～17)、土壇20から中期土器(18、19)がでてくる。だから、4時期の土壇がある。

カ その他の遺物

土器(80図)、石器(117図)がある。土器は縄文時代前期末(20～24)、中期加賀利B式土器、後期竈之内式土器(25・27)、晩期水神平式土器の破片があり。中世陶器片も多かった。石器は打石斧(19)、横形刃石器(20)、磨石(21)、スクレイパー(23)、石鏃(24)、砥石(22)がある。石製品としてはロウ石の玉(127図2)がある。

3) まとめ

住居址は2・3・7号が縄文時代中期のもので、1号は弥生時代後期である。4・5号は平安時代のものである。6号は中世である。これらの集落の広がりや用地外にのびており、また民間の遺跡ともつながりが考えられる。柱穴は中世以降である。方形周溝墓はその形から見ても弥生時代後期座光寺原式土器で、1号住居址や酒屋前遺跡の住居址群と同時期である。墓域内出土の鉄剣は注目される。保存の状態もよく貴重な資料である。4号住居址の出土は、灰釉陶器を主とする好資料で、セットとして把握される。

(木下)

13 小垣外・辻垣外遺跡

1) 位置

遺跡は飯田市伊賀地方にあり(36図1、写二十九)、大瀬木部落と境を接している。南沢川の扇状地扇端部に位置していて、南沢川と滝沢井にはさまれる。市約100mの東に傾斜する台地である。標高540mから545mの間に中央道用地がある。

中央道は台地中央部を南北に横切っている。ここに飯田インターがつくられることになり、用地は東側に大きく広がった。そのため、既設は100m四方の用地内遺跡としては最大の面積を調査できた。用地内東南にわずかな凹地があって、滝沢井の旧河床である。この凹地を境にして、北面が小垣外で、南側を辻垣外と呼ばれている。遺跡も2遺跡に分けられているが、用地内の大半は小垣外遺跡で、辻垣外遺跡はわずかにかかっているため、両者を一遺跡として扱った。遺構としては、18号住居址が辻垣外遺跡に入る。グリッドは97+0線をAとし、C、N、38-109までに設定した。

遺跡の地層は、A地区で耕土25cm、暗黒色土27cm、黒色土20cm、茶褐色土25cmでロームとなっており、北に行くにつれて厚くなっている。特に茶褐色土が包含層であった。

2) 遺構と遺物

遺構は、住居址、柱穴群、配石、土壌などを検出した。一部道路および宅地があったため調査できなかったところがあるが、ほぼ全域に検出され、傾向としては、南側の旧河床に沿ってあるように見える。これらの遺構は各時期にわたっているので、時期別の検討が必要である(36図1)。

ア 住居址

ア) 1号住居址(36図、写五十二)

遺構 用地西縁にある。2.70×3.45mの不整形の竪穴住居址で、主軸方向N62°Wをはかる。壁はゆるやかに傾斜しかたい。床面もかたくて良好である。北西半にて一段さがり、北壁に接して貯蔵穴かと思われるピットがある。柱穴は住居址内と壁外にとりまくようになり、柱穴群Ⅲと関連する。

遺物 中世の陶器、片口鉄片がでている。打石斧もあるが、うまるときのまじりであろう。

イ) 2号住居址(36図、82図、118図、写五十三)

遺構 用地内北西端にあり、台地北縁に位置する。4.70×4.40mの不整形の竪穴住居址で、心もち角

ばった感じをあたえる。壁は直にほりこまれ13~17cmと浅い。床面は炉のまわりがかたくて良好である。他は軟弱である。柱穴は6主柱穴である。炉はほぼ中央の床面を30×35cmの円形に、深さ10cmにほりくぼめ、が底に土器片を敷いていた。

遺物 土器・石器がでており、土器(82図 1~11)はいずれも破片で、その文様などからみて、前期末の土器である。1・2は同一個体の土器で、炉底におかれていた。石器(118図)は打石斧(1・2)、磨石斧(4)、石鏃(3)、凹石(5・6)、石鏃(7)、スクレイパー(8~10)があり、黒曜石割片も多い。

ウ) 3号住居址(37図、写五十三)

遺構 中央の南縁にあって、4号、21号住居址に接している。3.40×4.25mの方形の竪穴住居址で、主軸方向N66°Wをはかる。壁は状態よく、傾斜している。東隅は壁がなく床中央に向かってなだらかに傾斜している。入口部かと思われる。北西壁中央より北によって方形の張り出しがある。床面はかたく良好であり、全体に中央より東側にくぼんでいる。南隅に貯蔵穴と思われるピットがある。柱穴は住居内にも2こあるが、壁外にとり囲むようにある。遺物の出土はない。

エ) 4号住居址(37図、写五十二)

遺構 21号住居址の東にはなれてある。1.50×1.70mの不整長方形の竪穴住居址で、主軸方向N11°Eをはかる。北壁中央よりやや西によって方形の張りだしがある。壁は北側が直にあるが、他は傾斜しかたい。壁のほりこみは10cm前後と浅い。床面は全体にかたく、西へ傾斜する。柱穴は壁外に並んでいる。なお北壁は土壌68がきいている。出土遺物はない。

オ) 5号住居址(38図、82図、118図、128図、写五十四)

遺構 用地内北西、2号住居址の南にある。直径4mの円形の竪穴住居址で、掘りこみは10cm前後と浅い。床面は炉の周辺がかたく良好であるが、他は軟弱であり、平坦でない。中央に不整形な凹みがある。柱穴は主柱穴が7本あったと思われるが、土壌51にきられ1本を確認できなかった。炉は中央にあって、床面をほとんどほりくぼめていない。

遺物 土器、石器がでている。土器(82図12~28)は鉢の破片で、文様から見て、前期末のものである。また小形の橢円形土器(128図2)もでている。石器(118図)は打石斧(11)、石鏃(12~14)があり、黒曜石割片の出土も多かった。

カ) 6号住居址(38図、83図、118図、128図、129図写五十四)

遺構 用地内中央の南縁にあって、22号住居址の東東にある。4.85×4.95mの円形竪穴住居址で、壁高15cmある。床面は全体に軟弱であり、中央部および東壁は土壌によってほりこまれている。そのため柱穴は五分分に5主柱穴を確認したのみである。炉は不明。

遺物 土器、石器、土製品があるが、その量は少ない。土器(83図1~5)は文様から見て、前期末のものである。石器(118図)は横刃形石器(118図15)が1点である。土製品は門板状土製品(128図3)と凹板(129図5・6)がでている。

キ) 7号住居址 (39図、83図、118図、写五十五・五十八)

遺構 用地内中央部の、台地中央部にあって、20・9号住居址にはさまれている。4.40×4.60mの不整形円形で、主軸方向N62°Eである。壁はほぼ直に10~37cmほられ、南に深い。床面は比較的良好であるが、深溝のうねによりあらわれている。東壁より不整形の浅いくぼみをもつ。柱穴は4主柱穴である。炉は中央より北西によってあり、方形石囲炉であるが、礎石はぬかれてない。土器片の出土数は比較的多く、それは床面より15~20cm浮いていた。

遺物 土器、石器で、土器(83図6~19)は深鉢で、底部を欠く6以外は破片である。縄文時代中期加曾竹利E式土器で、その後半のものである。石器(118図)は打石斧(16~18)、横刃形石器(20・21)、敲石(19)、敲打器、石鏃(23~25)、スクレイパー(22)、異形石ヒ(26)がでている。

7) 8号住居址 (39図、写五十五)

遺構 用地内では北東部で、南沢に面しており、10号住居址の南にある。一辺3.00mの不整形の整穴住居址で、主軸方向N2°Wをはかる。壁は南側が直で、他は傾斜しており、とてもかたい。南壁中央より西によって、方形の張りだしをもつ。張り出しは中央に凹みをもっている。覆土中に木炭や焼土塊を検出するが、この部分で焼かれたと思われる痕跡はなかった。床面はかたく良好である。平頂でなく中央にくぼんでいる。柱穴は壁外に見られる。

遺物 片口鉢と常滑焼の水甕の破片がある。

ケ) 9号住居址 (39図、84図、118図、129図、写五十六)

遺構 用地内中央部にあって、7号住居址の北にある。4.25×4.45mの円形の整穴住居で、主軸方向、N13°Eをはかる壁は12~36cmとほりにまれ、南に深い。床面はかたく良好である。柱穴は4主柱穴である。炉は中央よりわずかに北によっている。方形石囲炉で、礎石は西側の1つを除き、はずされ、床面と炉内におちこんでいる。

遺物 土器、石器、土製品がでている。土器(84図)はいずれも深鉢片で、4は無文の楕円形土器である。石器・文壇から見て、加曾竹利E式土器後半のものである。石器(118図)は打石斧(27~30)、横刃形石器(31~34)、磨石斧(35)、敲打器(36)、敲石(37)、石ヒ(38)、スクレイパー(39)、石鏃(40)石鏃(41~44)がある。他に土製円板1点(129図9)がある。

コ) 10号住居址 (39図、写五十六)

遺構 用地内北東部、南沢に接しており、8号住居址の北にある。3.60×2.00mの不整形長方形の整穴住居址で、主軸方向はN-Sに一致する。壁は浅い。床面はかたく良好である。戸壁北すみに張り出しをもつ。柱穴は、南・北壁外に不規則に並び、出土遺物はない。

チ) 11号住居址 (40図、85図、119図写五十七・五十八)

遺跡 中央部南縁にあって、溝3に近い。12号住居址と並ぶ。4.85×4.40mの方形整穴住居址で、主軸方向N74°Wをはかる。壁高は13~19cmあり、壁にそって尻溝がめぐる。床面はかたく良好である。柱穴は

主柱穴4本で、他は支柱穴と思う。主柱穴2本は西壁に接してある。南西隅に貯蔵穴と思われる大きなピットがある。また住居内中央部にも浅い大きなほりこみがある。カマドは北東隅にあって、耕作によって大部こわされている。床面をほりこんで粘土カマドをきずいたものと思われる。柱には石を心にしていたと思われ、その石が直立してある。それは整形された砂岩で、12号住居址のカマド煉石の上部に接合し、12号住居址よりおって来たように思われる。カマドと貯蔵穴に遺物の出上が多かった。

遺物 灰釉陶器、須恵器、土師器として石器がでている。土師器(85圖)、杯(1~5)は1~3、5が内面黒色土器で、3には高台がつく。4は内外両面と黒色である。1・2・4には埴文が見られる。甕(10)はあまり大きくないものである。須恵器は杯(6・7)がある。灰釉陶器は高台付の皿(8)、長須壺(9)、碗がでている。平安時代のものである。石器(119圖)は敲石(1)と砥石(2)がある。

シ) 12号住居址(40図、85圖、119図、写五十七、五十八)

遺構 11号住居址より1.5m東にある。5.25×5.60mのやや南北に長い方形整穴住居址である。主軸方向N77°Wをはかる。壁は直で、東西に高く35cmある。床面はかたく良好で、平らである。主柱穴は4本で2本は西壁に並ぶ。カマドは北東隅にあり、耕作で破かいされている。石心粘土カマドで、釉に使われた石がある。その一つは整形された砂岩で、上半が11号住居址のカマドに使用されている。カマドの南側、南東隅、南南隅に貯蔵穴があり、住居内にも大きなほりこみが見られる。また住居内主柱穴に接して2か所のローム盛り土が見られた。周溝は西壁と南壁の一部に見られた。

遺物 土師器、須恵器、灰釉陶器、石器、鉄片があり、比較的多い。カマドの高壇より出土した。土師器(85圖)は、杯(11・12)と小形の壺(25・26)があり、11は内面黒色のもので、外面に墨書がある。須恵器は杯(13・14)、壺(27)、杯蓋がある。灰釉陶器は多く、皿(16~19)と碗(20~24)で、他に把手片もある。碗10個体のうち4個の底部に墨書が見られる。小破片であるが緑釉瓦片(15)がでている。石器では砥石(119図3)がでている。11号住居址と同時期であり、墨書の多いのが注目される。

ス) 13号住居址(41圖、写五十九)

遺構 用地内中央部の東よりにあって、12号住居址の北にある。2.12×4.80mの長方形の整穴住居址で主軸方向N20°Wをはかる。壁は西壁が直に近く、他は内側へ傾斜している。傾斜する壁と床面はかたく良好で、床は中央部にくぼんできている。柱穴は住居址内には北壁よりに2個あるのみで、他は壁外に並んである。

遺物 陶器片で、白瀬戸小形壺、片口鉢、常滑水甕がでている。

セ) 14号住居址(42圖、写五十九)

遺構 用地内東端、台地でも先端部に位置し、15、16号住居址と接し、17号住居址が北にある。プランはL字形で、4.20×2.70mの長方形のものに、1.50×2.50mの長方形の張り出しが北につき、これは北にむかって上っており、入口部と思われる。壁は傾斜をもち、床面ともかたく良好である。床は平らでなく中央にくぼむ。張り出し部と接合するところに長方形のほりこみがある。柱穴は住居内の1つをのぞき、他は壁外にある。

遺物 常清水甍片が出ている。

ン) 15号住居址 (42図、119図、写五十九)

遺構 14号住居址の南西に1.15mはなれてある。2.20×2.30mの方形の竪穴住居址で、主軸方向N60°Eをはかる。壁は傾斜し、かたく、床面もかたく良好であり、中央がくぼむ。住居内に礎の集積が見られた。柱穴は壁外に3こある。

遺物 山茶碗の坏片と磁石 (119図4) がでている。

タ) 16号住居址 (42図、86図、写五十九)

遺構 14号住居址の西60cmはなれてあり、わずかにくぼんで、かたくつきかためられた床面が南北に長く不整形に見られた。主軸方向N23°Wをはかる。柱穴は4こある。

遺物 中世陶器片で、水甍、椀、底にオロシメのつく壺底部 (86図1)、内耳瓶がでている。

チ) 17号住居址 (43図、128図、写六十)

遺構 用地内東端にあり、台地崖端部、南沢川に接している。6.10×3.70mの東西に長い不整長方形を基本形とし南壁に大きな張り出しをもつ。主軸方向N17°Eをはかる。壁は東半をのぞいて、ゆるい傾斜で中央におちこみ、そのまま床面となり、中央部が最も低くなり、鍋底状である。全体にかたく良好である。床内部に礎を集めている。東壁によって、礎を基礎として、粘土でつくった間仕切り様の壁があり、その両側には床面より上、東側で16cm、西側で7cmの貼り床があり、一段と高くなっている。柱穴は住居内にもあるが壁外にとりかこむように見られる。

遺物 中世陶器の壺、碗片と、ろう石製の紡錘車片 (128図8) がでている。

ツ) 18号住居址 (41図、86図、119図、写六十一)

遺構 用地内南端にあって、溝3寒に接し、20号住居址と相対している。辻外遺跡に入るものである。5.30×5.00mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N50°Wをはかる。壁は耕作によりあれている。壁にそって尻溝がめぐる。床面の状態はかたたくてよい。柱穴は4主柱穴で、築直しのため接するように細直されている。建直しのとき住居址は東側に拡張している。入口部と思われる南東壁に接してピットがある。炉は中央より北西により、方形石壁炉で炉石はほとんどがぬかれ、わずかに残されている。

遺物 土器、石器がでている。土器 (86図) は、イ付土器 (2) と深鉢 (3~12) であり、文様から見て加曾利式土器後半のものである。石器 (119図) は打石斧 (5~7)、磨石斧 (9~10)、横刃形石器 (8)、石ヒ (11) がでている。

テ) 19号住居址 (42図、写六一)

遺構 用地内北東部にあって、8号住居址と14号住居址の中間にある。2.50×2.70mの不整形の竪穴住居址で、主軸方向N27°Eをはかる。ほりこみは深く、62~78cmをはかる。そのためか南壁にテラスがある。壁は内側に入り、あまりかたくない。床もかたたくなく、南よりに細長いほりこみがある。柱穴らしき

ものが壁外にあるが明確でない。出土遺物はない。

ト) 20号住居址 (44図、87図、119図、132図、写六十二)

遺構 用地内中央部にあつて、7・9号住居址と並ぶ。一番南にある。11号住居址が上に一部のついている。5.50×5.10mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N62°Wをはかる。壁はほぼ直で30cm前後ある。床面は部分的にかたいが、大部分はよくない。柱穴は6主柱穴である。炉は中央より北西により、方形石匠い炉で、炉石はぬかれ、一部炉内におちこんでいた。埋壘は南東壁に近くあつて、口縁を欠く深鉢が、土層を床面にあわせて正位にうめられていた。内部より剥片が出土する。

遺物 土器・石器がでている。土器(87区)は埋壘の1をのぞいては破片である。埋壘は上径45cm、底径8.5cm、高さ42cmの大きさである。文様から見て、加曾利E式土器後半のものである。石器(119区)は打石斧(12-14)、磨石斧(15)、横刃形石器(16-18)、石鏃(19-21)がある。

チ) 21号住居址 (43図、写六十丁)

遺構 用地内中央部南縁にあつて、3・4号住居址の南にある。4.50×4.30mの方形の竪穴住居址で、主軸方向N30°Eをはかる。東壁は段をもつておちこむが、他は傾斜している。床面は良好であるから北半分は土壌と耕作によってあれている。柱穴は住居内にし、西壁外に1ある。

遺物 中世陶器片のオロシ皿がでている。

ツ) 22号住居址 (44図、86図、191図、写六十三)

遺構 用地内中央部にあり、6号住居址の北西にある。4.50×4.30mの円形の竪穴住居址で、主軸方向N30°Eをはかる。壁は南西に深く30cm、北東で9~18cmある。床面は炉尻辺部がかたたくて良好であるが、他は軟弱である。柱穴は4主柱穴で、2~3回建直されたようである。炉はほぼ中央にあり0.95×1.00mの方形にほりくぼまれている。

遺物 土器、石器がでている。土器(86区13-35)はいずれも鉢の破片である。文様から見て前期末の土器である。石器(119区)は打石斧(22・23)、石鏃(24-26)、スクレイパーがでている。

イ 柱穴群

ア) 柱穴群Ⅰ (45図、119図)

遺構 用地内西部にあつて、柱穴群Ⅱと並ぶ。柱穴が楕円形状に並んでいる。床面、炉のようなものはない。縄文時代の築遺物と思われる。

遺物 土器は加曾利E式土器終末の小破片がでている。石器(119区)は打石斧(27)、石鏃(28)がでている。

イ) 柱穴群Ⅱ (45図、88図、119図)

遺構 柱穴群Ⅰの東に集中してあり、さらに東北にのびていると思われるが、宅地であつたため調査で

きなかった。柱穴は不規則である。扉、床面はない。Ⅰの中間に焼土が見られる。

遺物、土器、石器があり、土器(88区1～3)は加曾利E式土器終末期のものである。石器は打石斧(119×29、30)、石錘(31)、敲打器(32)、石ヒ(33)がでている。

ウ) 柱穴群Ⅲ (45区)

遺構 柱穴群Ⅰ、Ⅱの南西にあって、1号住居址と北接し関連が強い。Ⅰ・Ⅱとは柱穴内の埋土が全く違っていった。2間×2間の建造物が考えられる。

ウ 土器集中地

ア) 土器集中地Ⅰ (88区、120区)

遺構 用地中央部南縁にあって、土器集中地Ⅱと道路をへだてて対峙して、東側のをⅠとする。3×6mの範囲に土器片が集中しており、竪穴住居址とも考えられ、壁と思われるおちこみ、灰面と思われるかたい面があったが、耕作のためあれて確認できなかった。こうした土器片が集中することはこの時期に普通にみられる。

遺物 土器、石器で、土器(88区)が多く、そのほとんどが粗製土器である。注口土器(4・5)、鉢(6～11、15～19)は精製土器で、12～14、20、21は粗製土器器体である。土器底部には灰代痕(22～29)が多く、各種の網み方がある。器形、文様から見て、縄文時代後期の堀之内Ⅱ式土器である。石器(120区)は、打石斧(1)、磨石斧(2)、磨石(3)、石錘(4)がでている。

イ) 土器集中地Ⅱ (45区、89区、120区、写六十四)

遺構 土器集中Ⅰの西にあって、5×4mの範囲に、厚さ5mで円形に土器片が集中していた。その部分を中心にして柱穴群が見られ、明確な規則性はないが、円形になるように2群が見られる。多分住居址と思うが、床面、扉は確認できなかった。

遺物 土器、石器が出出し、土器(89区)は粗製土器が大半をしめ、精製土器はわずかである。鉢、空注口土器、楯が出ている。文様から見て、土器集中地Ⅰと同時期、堀之内Ⅱ式土器である。石器(120区)は、打石斧(5)、磨石斧(9・10)、横刃形石器(6・7)、敲打器(8・13)、石錘(11・12)、石ヒが出ている。

エ 焼土群 (90区、120区、127区、129区、写六十五)

遺構 用地内西部の中央、溝1の北側にあって、土器群上面に見られた。10×10mの範囲に50cm前後の焼土が散在していた。特に床面というようなかたい面はなかった。

遺物 土器、石器、土製品がある。土器(90区1～23)は縄文時代後期堀之内式土器が多く、それに加曾利と終末期のもの(1～6)が混っていた。石器(120区)は打石斧(14～17)、磨石斧(21・25・24)、横刃形石器(18～20)、磨石(23)、敲打器(26)、石錘(22)、凹石(27～29)、石ヒ(30)がでている。

る。土製器は、後期土俵の片足（127図4）と土版（6）、そして舟形土製品（128図1）がでていて、特にこれは注目される。

オ 配石（36図、46図、写六：六）

遺構 用地内北西部、2号住居址の南にあって、レベルは高く、黒褐色中につくられていた。扁平の礫で方形石周いたもので、一辺45cmの大きさである。1見、伊のように見えるが焼土、木炭はなく、配石と考えた。このような石垣は縄文時代後期に見られる。遺物はない。

カ 溝状遺構

ア) 溝状遺構1（36図）

遺構 用地内西部の中央を、台地走向（北西から東南）に流れ、幅5～7m、深さ2mのV字形の溝で内は砂礫でうまる。人為によるほりこみで、南側にはテラスもある。比較的新しい時期まで流れていたようであり、溝3につながる。

イ) 溝状遺構2（36図、90図）

遺構 用地内北西端にあって、栗沢川に接する。2号住居址の東にある。宅地のため溝の南側しか確認できない。堆積土の状態から、古い（縄文時代？）もので、旧河川の縁と思う。

遺物 堆積土中より、土器（90図）片がでている。縄文時代早期セシイ土器（24）、前期土器（25）、中期後半の土器（26・27）がそれである。

ウ) 溝状遺構3（36図）

遺構 用地内南縁にあって、現地表面もここは凹地となっている。これを境に小畑外と辻垣外にわかれる。溝はほぼ東西に流れ、滝沢井の旧河床と思われ、住居址の並列から見ると古い頃から流れていたようである。

キ 土版

土版（46～50図、91～94図、121図、128図、129図、写六：六）は、用地内全域から検出され、その数111ある。その状態については、表および土壌実測区、土器採本、石器実測区を参照してほしい。傾向としては、用地内西南部に集中している。時期的には前期末のものが多く、中期、後期、そして中世のものとは区別される。プラン、ほりこみ、内部の状況も各種各様であり、時間をかけた検討が必要である。

ク その他の遺物

遺構外から出土した遺物は、各時期のものにわたっている。(94-96図、122図、123図、127図、128図、129図、写六十五)土器は縄文時代前期末(94図26-49)、中期竪取式土器(95図1)、加曾利E式土器(2-9)、後期壺之内式土器(10-26、96図1-32)があり、遺構は1つも検出できなかったが、弥生時代後期土器高坏(33)、甕(34・35)があり、庫元寺式土器である。この他に土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、青磁、白磁片もでている。石器(122・123図)も各種でている。遺構から出土しなかったものとしては、弥生時代打石包丁(122図19-21)、縄文時代の石皿(17・18)、石棒があり、前期に所属すると思われるが、注意したい刺片(123図37-42)もでている。土製品では滑車形耳飾(127図3)、前期末と思われる土偶胴部(5)、後期の土偶足(128図4)、前期末の小形注口土器(5)、円板(129図7・8・10・11)がある。宋銭(131図16)、釘もでている。

3) まとめ

インターのため広く調査できた。そのため各時期の遺構・遺物を検出したが遺構は用地外西方に広がる。住居址は、縄文時代前期末4軒は数少ない検出資料であり、多くの同時期土器群とともにそのあり方を注意したい。縄文時代中期住居址は加曾利E式土器後半で、E時期のものである。縄文時代後期のもとしては土器集金地、焼土群があり、前者は住居址であったと思われる。壺之内式土器の好資料となり、とくに土製品(土俵・土版・舟)は注目される。平安時代住居址2軒はほとんど同時期のものであるが、12号住居址の方が古いと思われる。灰釉陶器から見て10C後半と考えられる。また12号住居址の遺物のあり方は注目される。中世住居址はこの遺跡を初め、周辺の遺跡で検出され、その特徴がはっきりしてきている。柱穴群とともに、中世建造物の検討と、このような建物群と、文献に見られる「青良親」「伊賀良庄」とのつながりを今後検討しなければならない。(欠口)

14 三壺淵遺跡

1) 位置

遺跡は飯田市伊賀良北方にある(5図2)。南沢川をつくる扇状地先端部でわずかな台地となっている。その台地先端部が遺跡である。北側の凹地をへだてて上の金谷遺跡と相對している。標高540m、凹地との比高2mある。水田地として造成されている。

中央道は台地先端部に半分かかって東北に走っている。グリットはセンター杭99+0をAAとし、DTまで、38~43に設定した。

この地層は、礫上、黒色土、褐色砂土で、遺構は褐色砂土をほりこむ。

2) 遺構と遺物

用地内台地先端部に住居址二軒を検出する。あり方から見て、用地外西方に広がる。また土壌1は、用地南端にある。

A 住居址

ア) 1号住居址(51図、97図、128図、写六十七)

遺構 用地内中央西端にあつて、3号住居址と南西隅が接している。北西隅が水田上手のため調査できなかったが、住居址の大半を検出した。4.90×4.80の方形の竪穴住居址で、主軸方向N78°Eをはかる。壁はほぼ垂直にほりこまれ、北壁と東壁にそつて周溝がある。床面はカマドから中央部に良好で、まわりは軟弱である。柱穴は床面の状況が悪く検出できなかった。カマドは石心柱上カマドの雄大なもので、西壁中央部に見られる。火床中に礎を立て文庫としている。たき口天井石ははずされて南面袖のところにあつた。

遺物 比較的多く、土師器、須恵器である。土師器(97図)は坏(1~5)は5個以上、埴(7)は2個体、甕(6・11・12)は5個体以上、高坏(9)5個体以上、コシキ(13)2個体、子こね土器1個体が出土している。3は内面黒色の坏、12の甕は大形で、網んだもので吊されていたらしく、網目が土器表面に残っている。高坏は坏下部に段をもっている。須恵器は少なく、高坏(8)、蓋、甕がある。土師器は鬼瓦式土器前半に、須恵器は第2様式である。この他にスタンプ状の土製品(128図6)がある。

イ) 2号住居址 (51図、97図、写六十八)

遺構 1号住居址の北東にあり、3号住居址と同時期のものである。後世の溝が住居内を横切り、北壁外に溝状のものがある。3.00×3.40mの方形の竪穴住居址で、主軸方向N18°Wをはかる。壁はほぼ直にほりこまれている。床面の状態はよくなく、柱穴も検出できなかった。貯蔵穴と思われるほりこみがカマド前と西にある。カマドは北壁中央部にあつて、軸石と天井石をつかった粘土カマドで、くずれていた。カマド内に土器がこわれこみ、火床中央に石を立てた支脚がある。

遺物 土師器、須恵器、灰釉陶器があり、量は多くない。土師器 (97図) は甕 (16・17) のみで、須恵器は坏 (14・15) と甕 (18)、壺がある。灰釉陶器は壺と碗の破片がでている。

ウ) 3号住居址 (51図、97図、124図、写六十八)

遺構 1号住居址の西に接しており、用地西端にあつて、水田土手下に西壁が入り調査できなかった。南北3.50m、東横4.10m以上の長方形の竪穴住居址で、主軸方向N78°Wをはかる。壁のほりこみは水田造成時にけずられ、床面もあれていた。柱穴も確認できない。カマドは西壁よりあつたが、けずられて、火床の焼土を残すのみであつた。

遺物 土師器、須恵器、石器があるが量は少ない。土師器 (97図19・20) は甕と、須恵器は杯片がでている。石器は砥石 (124図1・2) がでている。

イ 土壌 (98図)

遺構 用地内南西にあつて、遺跡台地の底縁端にある。直径48cm、深さ40cmの大きさである。

遺物 土壌埋土中より、土器 (98図1～8) がでている。その文様から見て縄文時代中期初頭のものであり、3は西日本の船元式土器である。

ウ その他の遺物

遺構外からの土器 (98図) は、中期初頭 (9～11)、加曾利E式土器、堀之内式土器、弥生後期鹿光寺原式土器 (12・13)、土師器、須恵器 (14)、中世陶器がある。石器 (124図) は打石斧 (3・4)、磨石斧 (5)、スクレイパー (6)、石鏃 (7) があり、宋銭 (131図17) もある。

3) まとめ

集落は用地西側にある。用地内の遺構は縄文時代中期初頭の土壌と、古墳時代後期の住居址 (1号) と平安時代の住居址 (2・3号) が検出された。中でも1号住居址のセットと、土壌出土の土器が注目される。(通那)

15 上の金谷遺跡

1) 位置

遺跡は飯沼市伊賀良地方1274~1282番地にある。(5図3、写二十九)。三壺淵遺跡とともに、南沢川扇状地の北東端に位置する。小さな流れによって形成された台地先端部が遺跡となり、水田、畑となっている。標高538~539m、まわりの凹地より1m高い。

中央道は台地先端部を横切っている。グリットはセンター101+40をAAとし、BKまで、40~61までに設定した。

遺跡の地層は粘土、褐色土、砂礫土層となり、遺構は砂礫土層をほりこんでいる。

2) 遺構と遺物

遺構は台地に密集して、住居址、柱穴群、土壇などが検出され、住居址は弥生時代、古墳時代、平安時代、中世のものと同時代にわたるものである。

ア 住居址

ア) 1号住居址 (52図、98区、99区、124区、写六十九)

遺構 用地内南はしの、台地南縁にある。3.90×4.35mの長方形の竪穴住居址で、主軸方向N54°Wをはかる。壁高10cmと低い。床面は中央部に良好な部分があるが、全体に軟弱である。柱穴は4主柱であるが中世と思われる柱穴も入って、穴が多く見える。東南隅の南よりに貯蔵穴がある。炉は北西主柱間の中央に径50cmの円形にほりくぼめ、南よりに網下部を欠く鑊をうめている。それに接して南に石をおき枕石とする。

遺物 土器、石器がでている。土器(99区)は高坏と壺(98区15・16・99区1~3)で、器形、文様から見て、中島式土器前半(麻光寺原式後半とも考えたが)である。石器は打石斧(124区8)、石麻丁、磨石(9)、敲打器(10・11)、台石(12)がある。

イ) 2号住居址 (53図、99区、写六十九)

遺構 用地内東端の台地先端部にあつて、これのみ孤立している。4.50×5.00mの長方形竪穴住居址で主軸方向N77°Wをはかる。壁、カマドは水田造成時にけずられて、床面とカマド基礎部を検出した。床はカマドから中央にかけて貼り床がありかたいが、他は軟弱である。柱穴はカマド北側の以外は確認できな

かった。カマドは東壁中央部にあって、粘土カマドである。火床中央に支脚川の石を抜いたと思われる小ピットがある。カマド構築の際、床面レベルより下にまでほりこんでいる。

遺物 土師器、須恵器が、カマド内より出ている。土師器(99Ⅷ)は杯(5)と甕が、須恵器は蓋(4・5)、杯(7)がでており、平安時代のものである。

ウ) 3号住居址(53Ⅷ、98Ⅷ、99Ⅷ、124Ⅷ、写七十、七十二)

遺構 台地先端、南よりにあって、1・5号住居址にはさまれる。3.90×3.70mの東西が丸味をもつ方形竪穴住居址で、主軸方向N38°E(一番最初)をはかる。壁の状態はよくない。床面は中央部が貼り床でかたくてよい。柱穴は4柱穴穴である。北西壁中央に貯蔵穴と思われるピットがある。また4隅にもピットが見られる。わは3回移動しており、炉1→炉2→炉3となる。炉1は北東主柱穴によって、中間に円形にほりこんでいる。内部より燧片あり。炉2は90°西へ移動し、北西主柱間中央に床面を円形にほりくぼめお壁に燧片が見られる。炉3は180°東にふれて、東南主柱穴間中央を径30×40cmの円形にほりくぼめ、中央に底部を欠く甕をうめ、西に石を置いて枕石としている。

遺物 土器と石器が出土し、土器(98Ⅷ、99Ⅷ)は甕(98Ⅷ17、99Ⅷ9)、台付甕(10)、高杯(8)がある。9は炉3にうめられていたものである。器形、文様からと、高杯の器形から見て、中島式土器前半のものである。石器は磨石(124Ⅷ13)がでている。

エ) 4号住居址(53Ⅷ、写七十二)

遺構 1号住居址と3号住居址にはさまれ、6号住居址の西にある。水田造成でけずられており、東南壁は不明、3.20m短辺とする長方形の竪穴住居址で、壁と床面の状態はよくない。主軸方向N44°Wをはかる。柱穴は4柱穴穴以上と考えられる。西隅にピットのある張り出しをもつ。

遺物 中世陶器片が出ている。

オ) 5号住居址(54Ⅷ、98Ⅷ、99Ⅷ、124Ⅷ)

遺構 3号住居址の東にあって、台地先端部になる。6号住居址に東壁をきられ、柱穴群Ⅰが上に乗っている。5.80×6.15mの方形竪穴住居址で、N33°Eをはかる。壁は直にほられ、30~40cmある。床面は全体に軟弱である。柱穴は4柱穴穴で、南西に2つの支柱穴がある。南隅に貯蔵穴と思われるピットがある。わは北東主柱穴間中央の床面を円形にほりくぼめである。この住居址は他の住居址(同時期の1号・3号住居址)とちがって、住居内埋土は粘土であった。これは水がよどむような浸水があったためと思う。

遺物 土器、石器が少量でている。土器は蓋(98Ⅷ18)、甕(99Ⅷ11)があり、中島式土器である。石器は磨石(124Ⅷ14)がでている。

カ) 6号住居址(54Ⅷ、写七十二)

遺構 台地中央部先端にあって、柱穴群Ⅰの東南にある。用地界のため東東壁を検出できなかった。南北6.45mの方形竪穴住居址で、主軸方向N50°Wをはかる。壁はなだらかに傾斜して床面になっている。北西壁中央に方形の張り出しがあって、石と粘土が入っている。住居内はほぼ南北に間仕切の土手があって

東室と西室にわかれ、東室は全部検出できなかったが、中央に間を置いて東に走る土手が2列ある。西室は、張り出し部北側に、東西に礎を並べて土手をつくり、間仕切りとしている。その北側の中には粘土塊が見られた。柱穴は壁縁と界外に囲むようである。

遺物 青磁碗、白磁碗、志野皿、山茶碗、片1鉢の破片がでている。

キ) 7号住居址 (55図、99図、128図、写七十三、七十六、七十八)

遺構 用地内の西部にあって、台地中央部にある。9・12号住居址の北にあって、13号住居址と並ぶ。この住居址の上に8号住居址がのる。また後世(中世か)の溝が住居内を流れている。4.70×4.60mの隅丸形竪穴住居址で、主軸方向N38°Eをはかる。壁はほぼ直にほりこまれ、30~40cmある。床面は主柱穴内側がかたくて良好で、壁によった部分は軟弱である。柱穴は4本柱穴であるが北側のそれは検出できない。南側に浅い柱穴が3本並んでいる。住居内中央部にも浅くて比較的大きなほりこみがある。炉は南側主柱穴間中央の床面を方形にほりくぼめ、中央に甕をうめ、北に石を置いて枕石とする。壁外の施設としてこの住居址につくものと思われる周溝が、南と北は長く、東と西は短くあり、南のそれには小さいピットもあって、屋根との関係、壁などが考えられる。さらに、9・12号住居址との間には柱穴列もある。

遺物 土器、土製品がある。土器は壺、甕(99図12)、高坏があって、12は炉にうめられていた。土製品としては、甕底部を再加工した紡錘車(128図9)がある。中島式土器である。

ク) 8号住居址 (55図、99図、128図、写七十三)

遺構 台地中央部にあって、11号住居址の東になる。7号住居址の上ののり、水田造成時にけずられて、カマドと床面の一部を検出したのみである。プラン、大きさは不明。主軸方向N57°Wをはかる。カマドの竈に一部陥り床が見られた。カマドは西壁にあり、粘土カマドである。袖の中より甕片があって土器片を心にしていたと思われる。火床中央に支脚石のぬかれた痕跡がある。

遺物 土器師の須恵器、土製品で少量である。土器師は坏(99図13)、甕、須恵器は坏がある。土製品は中島に一孔をもつ半球状の紡錘車(128図10)がある。平安時代のものである。

ケ) 9号住居址 (56図、98図、99図、124図、写七十出)

遺跡 用地内西端にあって、台地東縁にある。12号住居址と並んで170m 西にはなれている。6.60×6.40mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N22°Eをはかる。壁高55cmでほぼ直にほりこまれた。当地方としては最大級(この時期)のものである。床面は全体に軟弱である。北西隅は湧水のため調査できなかった。柱穴は4本柱穴である。炉は確認されなかったが、北側主柱間中央に浅いピットがある。焼土、埋甕はないので、炉と断定できない。北壁東よりを切って、土坑16がある。この住居がうまってスリ鉢状の囲みができた時点での中央凹地から、土器片と共に気形瓦製積造品の大きなのがでた。

遺物 土器、石器があり、土器は壺(98図19~23、99図15)と甕(98図14)がある。器形、文様から見ても中島式土器である。石器は磨石斧(鉾刃か?) (124図15) もでている。

ロ) 10号住居址 (55図、100図、101図、写七十四、七十五)

遺構 用地内西部、台地南縁にあって、12号住居址にわずかに北にずれてのっている。5.40×4.90mの方形の竪穴住居址で、角がきちんとしている。壁はほぼ直にほりこまれ、25cmの高さある。床面は貼り床でかたい。柱穴は4主柱であり、北西にも支柱穴かと思う柱穴がいくつかある。貯蔵穴は南壁よりに、東側と、西側にあって、東のそれからは小形丸底土器が、西側のそれからは小形甕が出土した。また床中央西よりに浅い凹みがあり、焼けていないが、弥生時代の炉に似る。ここを中心に両壁ぞいに高坏をはじめとする遺物が集中してある。炉は中央よりやや北西によってあり、灰面はほとんど平らかであり、よく焼けている。この住居址は火災にあり、建築材が中央に向かって走っている。この木炭を学習院大学木越邦彦教授に測定してもらったところ、C-14 (Gak-4209) の数値AD 400±80とでている。

遺物 火災のためか、遺物の出土は多く、すべて土器である。石器もでている。土師器は埴(2個体)(100図1・2)、壺(2個体)(16・17)、高坏(13個体以上)(3~15)、鉢(1個体)、小形甕(2個体)(18・19)、甕(3個体以上)(101図1~3)でいて、とくに高坏が多い。これらのセット、帯形からみて、和泉式土器である。石器は砥石、磨石がでている。器種不明であるが鉄片もある。

リ) 11号住居址 (57図、101図、写七十六)

遺構 用地内中央部西はずれにある。3.75×3.35mの方形の竪穴住居址で、主軸方向N67°Wをはかる。壁の状態、床面の状態はよくない。柱穴にしては大きい、直径90cmの円形ピットがコーナーにあり、床コーナーだけない。カマドは西壁の中央より西によってあり、石版粘土カマドである。北側の軸は破壊されている。火床には支脚の石が立つ。カマドの中と、まわりに遺物がでる。住居内出土の木炭で測定してもらったところ、C-14 (Gak-4211) でAD 890±85の数値がでている。

遺物 土師器、須恵器、灰釉陶器があり、土師器は坏(101図11)と壺(4)、須恵器は坏、壺、甕があり、灰釉陶器坏片がでている。平安時代のものである。

シ) 12号住居址 (57図、101図、102図、124図、写七十六、七十七)

遺構 用地内西部にあって、9号住居址の東に並び、10号住居址が20cmの高さでのっている。4.85×5.30mの方形の竪穴住居址で、主軸方向N26°Eをはかる。壁は47cmと高く、ほぼ直である。床面は平らで硬く良好である。主柱穴は4主柱穴で、東壁南よりと、西壁中央に貯蔵穴がある。炉は北側主柱穴間中央の床面を円形にほりこぼめて、中に甕をうめている。2河つくりなおしたため、古い壺甕が北側にこわれてある。枕石はない。

遺物 この時期としては多くの土器が出土した。土器は壺(102図1・2)、甕(101図6~10)、高坏(5)がでており、10は炉の古い方の壺甕、6は新しい方の壺甕である。帯形・文様から見て、中島式土器の古い方である。石器は有層状石器刃部(124図17)と凹石(16)がでている。

ス) 13号住居址 (58図)

遺構 7号住居址の西におちこみを確認したが、畑地の石垣があって調査できなかった。出土土器片から見て弥生時代の住居址である。

イ 柱穴群

ア) 柱穴群Ⅰ (57図、写七十八)

柱穴群Ⅰは用地内東側中央部にあって、5号住居址の上のり、6号住居址の西にある。柱穴は通りがよく、2間×4間の、8.30×4.10mの大きさで、長軸方向N42°Eをはかる。遺物はない。

イ) 柱穴群Ⅱ (58図、写七十六)

柱穴群Ⅱは用地内西部にあって、9・12号住居址と7・13号住居址の間を、密に「し」字の字形に並んであり、住居群を区切線をおもわせる。

ウ 溝状遺構

溝1は7号住居址を切っており、西から流れてきたのが、7号住居址東外で北にまがっている。巾1.5m、深さ1.1mのV字溝で、2号住居址と5号住居址の間にも溝を確認しているので、それにつながるものと思う。

エ 土壌

土壌は東側に集中し、全部で16検出している。南部のそれは湧水がはげしく、土壌内部を充分検出できないものもあった。縄文時代、平安時代、そして中世のものがあり、1・2・11はいわゆるロームマウンドの土壌で、ロームがないので、砂マウンドとなっている。11より縄文時代前期末の土器片がでており、これらはその頃のものと思う。土壌5は中世の井戸と思われる。土壌8は7の上のりについて東にあり、この2つは用地内北東はずれにある。8には焼土、粘土が見られ、石もあって、一見カマドを思わせる。土器片、須恵器片(102図5)、蓋(3・4)がでている。土壌については表を参照してほしい。

オ その他の遺物

池原外から出土遺物は縄文時代から中世までの各時代にわたっている。土器では、縄文時代前期の諸磯C式土器、前期末土器(98図30~40)、中期加曾利E式土器、弥生時代後期土器、土師器は和泉式と区分式が、須恵器はIV様式の壺、罎(102図6)、蓋が灰釉陶器の碗、中世陶器は山茶碗、古瀬戸、常滑、天目、青磁、白磁などがでている。石器は石鏃(124図18・19)、打石斧(20・21)、磨石斧(22)、スクレイパー(23)、石鏃(24)がある。石製品としては大形の剣形石製道具が9号住居址の覆土から出土している(128図11、写六十五)。鉄製品は鐵矢など、時期不明のもの、器種不明のものがある。中国銭(131図18・19)もでている。かわったものとしては、中世陶器片でつくった土製円板(129図19)もでている。

3) まとめ

調査の結果、住居址、柱穴群、土壇などの遺構があった。縄文時代の住居址は検出できなかったが、土壇があり、土器もあることから当然、集落の存在が考えられ、用地北西の台地中央部にあると考える。弥生時代、古墳時代、平安時代そして中世と4時代の住居址は集中しており、台地南縁の先端部を選んでいる。このあり方からみても、北から西にかけて広がっていることがわかる。弥生時代住居址は7軒検出し1・3・5と、9・12と、13・7の3群があり、後者2群は間に溝をつくっていたらしい。また7は壁外に周溝をもち注目される。9号住居址の大きいことと、12号住居址の土器セットは好資料である。座光寺原式土器から中島式土器への流れの中で、セットを中心に再検討するものを与えている。古墳時代和泉期の住居址は当地方では数少ない。しかも、そのC-14が測定されたことは、この土器群セットとともに、貴重な資料となる。高坏の出上が多く、祭祀的な性格を思わせ、となりの9号住居址覆土出土の石製模造品とともに注意される。平安時代の住居址は3軒で、点在している。灰釉陶器が少ないことから見て、平安時代でも前半にいく。中世の住居址は今回の調査でいくつも検出されており、それが全て伊賀良地区であり、同一レベル（等高線的に）で、近接していることから、この一帯の広がりやまとまりの中で理解されるものと思われる。柱穴群Ⅰも同時期と考える。（松永）

16 大門原 B 遺跡

1) 位置

遺跡は飯田市蓮光寺原81～183番地であって、大門原遺跡群の一つである。扇状地の上段と下段への移行する傾斜地であって、昭和45年に中央道用地内は発掘調査されている。詳細は昭和45年度飯田地区その1の報告書を参照してほしい。

その後、この地にパーキングエリアの設置がきまり、用地外に広がることがはっきりし、その部分の調査を47年度に行なうことになった。当初の予定では用地退償買取も早くすむと思ったが、交渉が進展せずやきもきさせた。昭和48年3月に入ってなされ、契約期限末近になった3月中旬に調査をする。

2) 調査

45年度の調査では、用地内南側傾斜地に弥生時代後期の住居址が5軒検出され、それより北によって縄文時代中期の土壇跡が検出された。今回はそれらの遺構があった傾斜地南東にトレンチを入れる。その結果、遺構は検出できなかった。遺物としては、土器、石器を得ており、縄文時代中期加曾利E式土器、弥生時代後期蓮光寺原式土器、石器は打石斧、有肩斧状形石器などがあった。前回の調査時と変りはない。

(佐藤)

あ　と　が　き

飯田市地内その2の発掘調査は4月10日から始まり、7月22日に一まず終了。その後、かぶき畑遺跡と大門原B遺跡の調査をいく日かした。暖かい季節に、後半の梅雨もあまりやられなく、16遺跡の調査を順調にすんだのも、この地内の調査が45年度について2回目であり、多勢参加してくれた調査作業員の中には経験者が多かったこと、地元教育委員会の協力もあってのことである。今年は飯田市の他に高森町と松川町の調査もあって、それぞれにも多大の成果を得ており、その整理・まとめも短期間の中で大変な仕事であった。ここに立派な報告書としてまとめることができたのは、関係機関、関係者のご協力、ご支援のおかげと、調査団全員の努力の成果であり、団長として厚く感謝したい。

本年の調査は、各地区とも多くの成果を得ており、この飯田地内も予期以上であった。

旧石器時代については、石子原遺跡が特筆される。まさかと思っていた場所に、旧石器が発見され、その重要さに調査団はとまどった。これについては、東北大学芹沢長介教授の指導を受けることができ、飯田市地内その3として、立派な報告書をまとめることができた。それを是非見てもらいたい。

縄文時代については、石子原遺跡の早期甲型文土器と土壌群、小垣外遺跡の前期末住居址と土壌群、中期では、柳田・上の平東部・酒屋前・滝沢井尻・辻垣外・小垣外の穴遺跡で、加曾利E式土器の住居址を抽出した。特筆なものとして、石子原遺跡の配石と上の平東部遺跡の盟像が注意される。後期としては小垣外遺跡の資料がまとまっている。

弥生時代では、大東・酒屋前・滝沢井尻・上の金谷遺跡で住居址が抽出され、資料も豊かさを増し、後期文化を解明する手がかりを与えた。石子原・滝沢井尻両遺跡で方形周溝墓が発見され、とくに滝沢井尻遺跡の鉄剣二口は特記に値する。

古墳時代では、石子原古墳のあり方——方形周溝墓とのつながり、いくつもある土壌——が、当地方の円墳を再検討させるきっかけとなった。住居址は三森測・上の金谷両遺跡で1軒ずつ抽出した。いずれも土器群のセットは好資料である。

平安時代のは、六反田・滝沢井尻・小垣外・三森測・上の金谷遺跡で住居址が抽出され、小垣外遺跡12号住居址では緑釉陶器、墨書のある土器がでて注目される。青良駅との関連もこの附近にありそうだ。

中世の住居址、柱穴(建造物)は注目をしなければいけない。中世の竪穴住居址は本年当地方各地で注意され抽出されている。ここには酒屋前遺跡を中心に相当に大規模な建造物と、集落群が考えられ、伊賀良の庄の関連で理解される。また酒屋前遺跡の輪郭遺構は新発見である。諸学兄の指導を得たい。(大沢)

土 壊 一 覧 表

柳 田 遺 跡

番号	プラン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 上 遺 物		
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深さcm		土 器	石 器	その他
1	円 形		84	98	56	上部に大炭塊と焼土			縄 中
2	不整形		240	80		3ヶの凹み			。
3	不整形		135	85	31				。
4	不整形 長方形		160	310	19	両面よりやや厚いた状態で土器 集中	打穿・ 打器		縄 後
5	円 形		86			溝に切られる	打穿・ 石 線		縄 中
6	不 整 楕円形		80	100	21		打 穿		。
7	楕円形		90	160		東側に円形ピット			縄 中
8	不整形			80	50	2号住と切り合う			
9	不 整 楕円形		80	100	13				縄 中
10	円 形		90			1号住内にあり、上面張床			

石 子 原 遺 跡

1	円 形		径 80	40	焼土あり 木炭あり			
2	。		120	40	木炭あり			
3	。		120	40	木炭あり	1		
4	。		100	50				
5	。		90	40			1	
6	。		50	30	焼土あり 木炭あり			
7	。		70	20		2		
8	。		60	30		1		
9	。		40	20				
10	。		112	30		2	1	
11	。		160	40	焼土 木炭あり	17	11	
12	大円形		不	30	焼土塊 木炭あり	28	33	
13	。		170	40				
14	長円形		50	20				
15	円 形		130	70				
16	。		40	20				
17	。		70	20				
18	。		60	20				
19	。		不	不	焼土あり			焼土有

土 壌 一 覧 表

石 子 原 遺 跡

番号	ブ ラ ン		大 き さ			状 態 (上部、内部など)	加 工 遺 物		
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深きcm		土 器	石 器	その他
20	◇			70	60	焼土あり			焼土有
21	◇			120	80				
22	長楕円			30	20				
23	円形			170	120	ロームマウンド!			
24	円形			100		ロームマウンド! 縄文時代土壌			
25	楕円形			240	110	ロームマウンド!			
B1	円形			50	70	弥生時代土壌			
B2	長方形			130	80				
	配石1			200	100	内側に石林立			

六 反 田 遺 跡

1	ロームマウンド		長 180	短 160	14	マウンド上に焼土			
2	楕円		長 128	短 80	32				
3	楕円		長 110	短 80	18				
4	長楕円		長径 350	短径 155	84				
5	円形	フラスコ		65	40	覆土黄褐色土		石スイ石斧	
6	円形			85	85	内部に石・焼土・木炭あり	底部近くに土器破片	石斧	
7	円形		径80		55	底面は平ら、覆土褐色土	中期前平土器		

大 東 遺 跡

1	長円		100	85	34	底平 水リコミ……ローム ツケキ……黒色土			
2	タマゴ	スリ鉢	105	140	35	石多入る 木炭多			
3	不整円		70	70	46				
4	長方		100	150	41	底平 木炭片多			
5	円	フラスコ	90	90	80	底平 110			
6	円	フラスコ	110	110	70	◇ 130			
7	円	フラスコ	90	90	54	◇ 110			
8	円	フラスコ	100	100	60	◇ 110			
9	円	フラスコ	90	90	60	◇ 110	青磁片		中世
10	円	フラスコ	80	80	50	◇ 60 珪石を認る			
11	円		80	80	30	南半分を 10に切られる			

上 壊 一 覧 表

番号	プラン		大 き さ			状 態 (上部、内部など)	加 工 遺 物		
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深さcm		土 器	石 器	その他
12	円		80	80	18				
13	円		106	106	26	浅いピット有り			
14	円		90	90	40	敷はほとんど直			
15	円	フラスコ	85	85	65	フク土……ローム混り黒色土			
16	円		175	175	35	*			
17	円		75	75	47				
18	円		100	100	90				
19	円		100	100	100				
20	円	スリ鉢	260	260	40				
21	不整円	*	156	156	20	フク土……ローム混り黒色土			
22	円		90	90	20	*			
23	円		100	100	40	* 西側で6cm袋状に入り込む			
24	円		60	60	20	*			
25	円		100	100	25	*			
26	円	スリ鉢	120	120	55	*			
27	不整円	*	60	60	13	*			
28	円		110	110	24	* D29により切られる			
29	円		90	90	62	* D28を切っている			
30	円	スリ鉢	90	90	10	*			
31	円	フラスコ	120	120	74	*			
32	不整円	スリ鉢	120	120	43	ロームを削り込み フク土はローム混り黒色土			
33	円	フラスコ	100	100	30	* 東で20cm袋状になる			
34	不整円		120	120	23	* D35に切られる			
35	円	スリ鉢	100	100	51	* D34を切る			
36	不整円		110	110	47	* 南側にピット有り			
37	円		95	95	74	* 子供時代の石2こ座に15cm のこみし大石2こ張り出をもつ	常滑片		
38	*		100	100	37	* D39と切り合っている			
39	*		100	100	41	* D38と切り合っている			
40	不整円	フラスコ	80	80	46	*			
41	円	*	70	70	23	*			
42	*		80	80	20	* D44に切られる			

土 城 一 覧 表

大 東 遺 跡

番号	プ ラ ン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 工 遺 物		
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深さcm		土 器	石 器	その他
43	*	スリ鉢	70	70	20	*D44に切られる			
44	*		110	110	63	*42・D43を切る			
45	楕 円		150	80	42	*			
46	円	フラスコ	100	100	70	*			
47	*		110	110	47	*長軸50短軸30横17cmほどの石1こあり			
48	*		90	90	34	*長軸60cm位の石が2個入りこんでいる			
49	*		90	90	92	*底径130			
50	*		100	100	30	*			
51	*	フラスコ	100	100	90	*西でD52をわずかに切る			
52	*	*	100	100	50	*D51をわずかに切る 土面に子供頭大の石1こ有り			
53	*	*	100	100	100	*中段より10cm陥状となる底に 大小さまざまな石4個がある			
54	*		110	110	42				
55	不整楕円	スリ鉢	220	160	76	*底に子供頭大の石3個ある			
56	円	*	150	150	20				
57	不整形		250	250	40				
58	楕 円	スリ鉢	130	100	15				
59	不整楕円		90	150	15	D60に切られる			
60	円		150	150	35				
61	不整楕円		190		25				
62	*		160	270	60	中央に長軸100短軸30深さ50の 落ち込みがある			
63	円		180	180	35	小ピットが3つある D64を切る			
64	*		130	130	20	小ピットが3つある D68に で切られる			

酒 屋 前 遺 跡

番号	プ ラ ン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 工 遺 物		
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深さcm		土 器	石 器	その他
1	円 形		径90		40				?
2	楕円形		100	80	20				中比
3	円 形		径100		18				*
4	*		120		35				*
5	長方形		130	190	20	部員石			?
6	円 形	フラスコ状	130		130				?
7	不 整 長方形		150	220	60				?

土 境 一 覧 表

番号	ブ ラ ン		火 き き			状 態 (上部, 内部など)	加 工 遣 物			
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深さcm		上 器	石 器	その他	
8	横円形		80	60	20		深鉢片			加E
9	+		140	110	130		深鉢片	磨斧1		+
10	+		180	210	180		深鉢片	横瓦2 石盤1		+
11	+		220	150	160		深鉢片			+
12	+		140	120	50		深鉢片	石皿1		+
13	円形		径100		120					+
14	横円形		130	120	30		深鉢片			+
15	+		180	160	140		深鉢片	横瓦1 打穿1		+
16	+		110	120	20	黄土あり	深鉢片	打穿1 四石1	門板:	+
17	+		150	160	60		つば付 深鉢片	スクリュー 鉄釘, 打穿1		+
18	+		370	300	90	ローママウンド		打穿1 スクリュー		+
19	楕円 長方形		120	160	50	一部集石 粘土あり	青磁片			中世
20	円形		径70		40				鉄釘	+
21	+		径90		27					+
22	+		径110		27					+
23	横円形		100	75	7					+
24	円形		100							+
25	+		125							+
26	横円形		120	100	40		浅鉢片			加E
27	円形		145		70					中世
28	長方形		170	140	55					+
29	円形		径140		70					+
30	+		径120		60					+
31	+		径115		85					+
32	円形		径110		50					中世
33	横円形		140	160	70		深鉢片	横瓦1		加E
34	円形		径60		50					中世
35	横円形		145	150	50	集石完備				+
36	円形		径90		20	+				+
37	+		95		25					加E
38	+		80		20		深鉢片			+

土 壌 一 覧 表

番号	プラン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 工 造 物			
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深さcm		土 器	石 器	その他	
39	+		80		70					+
40	+		90		12		深鉢片			+
41	+		125		5					+
42	+		95		30					+
43	+		90		50					+
44	+		90		10			横刃1		+
45	+		95		30	溝1に切られる				+
46	+		80		70					+
47	+		125		40	溝1に切られる				+
48	+		100		30		深鉢片			+
49	+		110		26	焼土あり	+			+
50	+		115		15	+	+			+
51	+		110		30		+			+
52	+		110		70	焼土あり				+
53	+		105		25		深鉢片			+
54	+		100		25		+	横刃1		+
55	+		125		30	溝1に切られる	+			+
56	+		125		40		+	打弁1		+
57	+		80		70				刀子1	中世
58	+		210		75		深鉢片 蓋	打弁2 毛皿1		加E
59	+		100		65		深鉢片		円板2	+
60	+	フラスコ状	115		65		+			+
61	+		50		40					+
62	+		85		12	溝1に切られる 焼土あり				+
63	円形		径160		40		深鉢片	石皿1 磨石1		加E
64	不整形		110	60	35					+
65	円形		径200		100		深鉢片			+
66	+		120		85		+	打弁1		+
67	+		110		50	上部集石あり	+	石皿1 磨石1		+
68	+		130		55		+	スクレイ イパー1		+
69	+		180		90					+

土 壊 一 覧 表

番 分	プ ラ ン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 工 途 物		
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	高さcm		土 器	石 器	その他
70	*		* 100		60		深鉢片	打片磨石1	*
71	*		* 130		86	焼土あり	*	磨石1	*
72	*		* 150		50		*	磨石1	*
73	*		* 180		35		*		*
74	長楕円形		170	100	40				*
75	円形		径 70		20		深鉢片	横刃1 打片2	*
76	*		* 140		70				*
77	*		* 170		40		深鉢片		*
78	*		* 130		120				*
79	不整形		150	120	20			石皿I	*
80	円形		径 50		50	40×40×10cmのフタ石あり			*
81	隅丸 長方形		95	65	32				中世
82	不整形		90	80	40				*
83	円形		* 145		34	黒石充填			*
84	*		* 230		45				*
85	*		径 170		40	黒石充填	大目片 片口片	鉄滓	*
86	*		* 90		40				?
87	半月形		260	120	115				?
88	円形		径 120		33		深鉢片		加E
89	楕円形		140	155	40	土壊をとりまいてピット5ヶあり	*		*
90	*		220	125	63				*
91	長方形		90	140	53		深鉢片		*
92	円形		径 120		18		*	打片2	*
93	*		* 70		31				*
94	円形		径 125		20				人骨粉 ?
95	*		* 75		67				?
96	*		* 53		34	焼土あり			人骨粉 ?
97	*		* 90		41				?
98	不整形 楕円形		210	95	33				?
99	*		210	105	42				?
100	円形		径 95		100				中世

土 城 一 覧 表

滝沢井原遺跡

番号	プラン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 工 遺 物		
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深さcm		土 器	石 器	その他
101	*		* 75		51				*
102	不整形		140	170	42		スリ鉢片		鉄 滓 *
103	円 形		径 80		13				釘 *
104	*		* 110		26				*
105	楕円形		110	120	50		深鉢片		加E
106	円 形		径 120		105		深鉢片		*
107	*		* 130		50		深鉢片	土 器	*

小垣外・辻垣外遺跡

1	方 形	不 整 長方形	110	95	20	覆上中に石組			炭
2	円 形	すり鉢	210	195	65	*			
3	方 形	長方形	115	100	35	山茶碗をコーナーよりにおく			山茶碗
4	円 形	袋 状	100	97	80	円形プランにそって表面に石組			
5	長楕円	すり鉢	90	50	25				くろみの 炭化物
6	不整形円	段をもつ	165	140	70	上面から内部に石を充填	黒ノ内		骨 片
7	円 形	長方形	110	110	55	覆上中に石組			
8	*	*	110	90	45				
9	*	*	110	110	45			打 斧	
10	*	袋 状	110	110	75				
11	不整形円	すり鉢	360	190	110	ローママウンド			
12	円 形	舟 底	75	70	25	上部に礎1			
13	*	*	100	70	35	西にピット内部に礎1し入る	前期末		
14	*	*	190	240	27	ローママウンド	加 E		
15	不 明	不 明				ローママウンド	前期末		
16	円 形	舟 底	185	175	23				
17	*	*	100	105	35	底部に礎1			
18	方 形	袋 状	100	115	75		中期初葉		
19	円 形	*	120	110	100	はり出しを持つ内部に礎			
20	不整形円	*	150	100	150	ローママウンド(?)	加 E	石 鏡	
21	双 円		75	80	35	有段小さい方はP11か			
22	方 形		190	180	50	上部に石組			

土 壌 一 覧 表

番号	ブ ラ ン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 工 造 物		
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深さcm		土 器	石 器	その他
0	円 形		175		40	上部に礫多、底面にも密着			
1	卵 形		84	96	38	炭化物			縄前末
2	円 形	フラスコ形	50		45	底面に4ヶの小礫			〃
3	〃	〃	100		53	〃			〃
4	楕円形		60	105	26				
5	円 形		195		10	底面に礫、径30cmのビット			縄 後
6	卵 形		115	105					
7	楕円形		205	230	85	北東壁は階段状			縄 後
8	隅丸方形		175	300	40			打器(3) 打 錘	〃
9	円 形		120		113			磨石 スクレイパー	縄前末
10	〃		80		15			石 化 行礫(2)	
11	不 整 楕円形		120	75	70	西半部 階段状			
12	卵 形		110	80	66	上部に礫多		磨石片	縄 後
13	円 形	フラスコ形	110		53	部田より33cm上部にかたい ローム84層土あり		石 ヒ 石礫(2)	縄前末
14	〃		90		19				
15	〃		110		50				
16	〃	フラスコ形	110		51	炭化物			縄前末
17	〃		85		30				縄 中
18	〃		85		37				〃
19	楕円形	フラスコ形	51	43		炭化物	底 部	打石片	〃
20	隅丸方形		70	150	50	東隅ビット		横 刃	〃
21	円 形		75		30			横刃・凹石・ スクレイパー	〃
22			295	240	100	ロームマウンド、炭化物多		互 石	縄 後
23	円 形		105		70				〃
24	楕円形		80	130	37	自然石2ヶ			縄 中
25	下盤方形		95		36				〃
26	楕円形		60	75	19				
27	〃		60	100	18				
28	不整円形		70		28				
29	〃		120	100	28	炭化物			縄 中
30	不整方形		170	105	20	ビット3ヶ			縄前末

土 塚 一 覧 表

小塚外・辻塚外遺跡

番号	プラン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 工 遺 跡		
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深さcm		土 器	石 器	その他
31	円形	フラスコ形	105		80	炭化物			
32	◇		185		100	上部に張り床と焼土塊			縄文末
33	楕円形		100	150	27				
34	円形		80	120	36				縄中
35	不整形		185	150	25	炭化物、3ヶのピット状窪み			
36	楕円形		270	200	25	上面に自然石・東上面焼土	注 口	打石斧類の 石鏃玉石鏃	縄後
37	円形		48		32	焼土			縄中
38	楕円形		130	80	23	上面に石3ヶ			
39	円形		75		50				
40	◇		50		30				縄中
41						版面にこぼし大の石を敷く			
42		フラスコ形	130	120	82	◇			
44	長方形		60	80	20		山茶碗		中世
44	台形		140× 110	130	17	浅いピット3ヶあり			
45	楕円形		100	132	52				
46	◇		100	90	40	こぼし大の石がつまる		打石斧	
47	◇		65	60	35				
48	長方形		110	170	20	上面に自然石が散在する		横刃	
49	楕円形		115	55	55	心壁寄りにピット			
50	◇		250	225	60	南西部はロームでおおわれる 心壁寄りにピット		打石斧・ 横刃	縄中
51	円形	フラスコ形	75		55	炭化物			◇
52	◇		150		20	土塊 53に切られる		打石斧・ 横刃	◇
53	◇		150		70				◇
54	◇	フラスコ形	195		79	10-50cmの深に 300粒ヶの石つ まる	山茶碗		中世
55	◇		115		26				
56	不整形		60		99			石鏃	縄中
57	円形		80		39				◇
58	◇		15		15				
59	◇		110		13				
60	◇				34				
61	楕円形		100	85	35	3号床面がはられる			

土 壌 - 電 表

小塚外・辻塚外遺跡

番号	ア ラ ン		大 き さ			状 態 (上部、内部など)	加 工 遺 物		
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深さcm		土 器	石 器	その他
62	楕円形			115	35				
63	不整形		100	70	80				
64	不整形		95	105	20	土層63に遮られる 表面自然石1ヶ			
65	◇		140	130	90				
66	◇		110	95	30	炭化物			
67	◇		400	380	95	ローママウンド		打石斧・石鏃	縄 中
68	◇		100	105	50	焼土	むしろ土		中 世
69	円 形		120		21			打石斧	縄 中
70	◇		150		57	フク土に数点の礎		◇	中 世
71	◇		75		58	炭化物			
72	◇		110		65				縄 中
73	◇		100		47			打石斧	
74	半円形		180	260	35	ローママウンド			縄 中
75	片 形		170		49				◇
76	◇		100		118	自然大礫			
77	◇		145		116				縄 中
78	◇		120		50				中 世
79	◇		90		54	西半分にローママウンド			縄 中
80	不整形 長方形		100	70	37	西側にローママウンド			
81	不整形		75	45	10	南半分にローママウンド			縄 中
82	楕円形		120	75	40	◇ ◇			
83	◇		75	90	25	北半分に ◇			
84	卵 形		130		47	炭化物			縄 中
85	不整形		85		60				
86	片 形		110		28				
87	◇		75		26				
88	◇		69		20				
89	◇		69		20				
90	◇		80		50			横 刃	
91	不整形 楕円形		240	170	65	炭化物 北壁急傾斜			縄 中
92	◇		365	200	105	◇ ◇			◇

土 壤 ・ 覧 表

小壇外・辻壇外遺跡

号	プ ラ ン		大 き さ			状 態 (上部, 内部など)	加 工 遺 物		
	平 面	断 面	東西cm	南北cm	深さcm		土 器	石 器	その他
93	不 揃 円形		145	70	36			打石斧	縄 中
94	楕円形		85		42	炭化物 東壁にピット1ヶ			＊
95	＊		90		102	＊			＊
96	＊		90	170	102	＊			
97	＊	フラスコ形	150		38	人頭大の礫がつまる			縄 後
98	円 形		120		43	炭化物			縄前末
99	＊		115		10				＊
100	＊	フラスコ形	80		40				＊
101	＊		75		70				＊
102	＊	フラスコ形	160		60			横 刀	＊
103	＊		50		70				＊
104	＊		110		75				＊
105	＊	フラスコ形	60		65	上面に少量の焼土・くるみの炭化物			＊
106	楕円形		140	120	20	フク土上部人頭大の石1ヶ			＊
107	円 形		110		35				＊
108	＊		105		40	土器底面が逆位で出土			＊
109	＊	フラスコ形	110		60	フク土に人頭大の石2ヶ			＊ 破
100	楕円形		325	240	113	北西壁階段状、北壁にローム堆積			
111	＊		125	175	102	上面は土器集中箇所Aによりは り深される。炭化物			縄 後

三 壺 淵 遺 跡

1	円 形		径 48		40	内部より中期初頭土器 (高日本系土器を伴う)				
---	-----	--	------	--	----	---------------------------	--	--	--	--

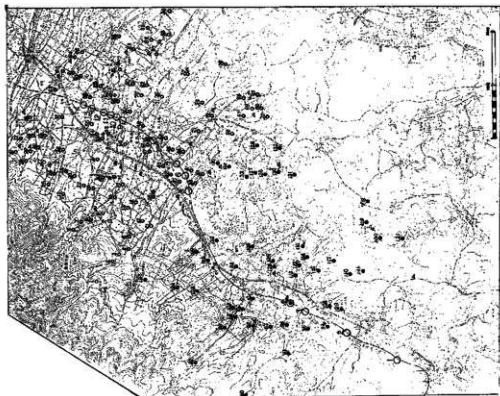
土 壌 - 覧 表

上の金谷遺跡

番号	プラン		大 き さ			状 態 (上部、内部など)	加 工 遺 物		
	平 面	土 器	東西cm	南北cm	深さcm		土 器	石 器	その他
1	楕円形	すり鉢	260	350	不明 (湧水)				
2	不整円形	+	200	240	不明 (湧水)	+	土師器		
3	楕円形		110	70	40	底面が北東に広がる 褐色土より掘る			
4	不整円形		125	140	35				
5	円 形		240	240	60	砂層・黒褐色土層・黒褐色土層 色上の互いの層土・底に石	須惠器山岳 鏡土師器		
6	不 整 長方形		180	245	36	底面に石 褐色土層より掘る次軸片			
7	隅丸方形		160	150	24	砂層を掘る			
8	+		145	140	30	上部に粘土焼土 礫石	須惠器 鏡砂土師片		
9	不 整 長方形		150	130	10	底面に石 褐色土層を掘る	須惠器片		木 炭
10	+		100	120	25		土師器片		
11	楕円形		340	260	不明 (湧水)	褐色土のマウンド ピット3ヶ	縄文鏡		
12	円 形	すり鉢	60	60	30	砂層を掘る			
13	+		150	150	15	砂層を掘る底中央に石			
14	+		110	110	10	F15を切る			
15	+		80	80	70	F15に切られる			
16	長方形		110	140	30				

第7表 土製円盤一覽表

図	番号	遺跡名	遺構	縦 mm	横 mm	厚さmm	重さg	部位	時期
第129	1	YNO	その他	39.0	41.0	11.5	20.5	胴	加E
第129	2	SKC	土壇16	37.5	42.5	10.5	19.0	胴	加E
第129	3	SKC	土壇59	37.0	41.0	9.0	17.5	胴	加E
第129	4	SKC	土壇59	44.0	41.0	13.5	24.5	胴	加E
第129	5	KGB	6 住	22.0	25.0	8.5	9.5	胴	加E
第129	6	KGB	6 住	32.0	31.0	9.0	15.0	胴	加E
第129	7	KGB	その他	22.0	28.0	12.0	16.0	胴	加E
第129	8	KGB	その他	25.0	22.0	7.5	7.5	胴	加E
第129	9	KGB	9 住	30.5	35.0	7.0	14.5	胴上部	加E
第129	10	KGB	その他	52.0	49.0	8.5	30.5	胴上部	加E
第129	11	KGB	その他	40.0	34.5	11.0	23.5	胴	加E
第129	12	KGB	焼土群	40.0	40.0	8.0	25.5	胴	加E
第129	13	KGB	焼土群	31.0	28.0	11.0	11.0	胴	加E
第129	14	KGB	焼土群	26.5	21.0	9.0	7.5	胴	加E
第129	15	KGB	土壇12	40.5	38.0	5.0	12.0	胴	加E
第129		KGB	土壇12	31.0	27.5	5.5	8.5	胴	加E
第129	17	KGB	土壇12	23.0	23.0	6.0	7.0	胴	加E
第129	18	KGB	土壇12	25.0	22.0	5.5	6.5	胴	加E
第129	19	UKO	その他	34.5	33.0	12.0	19.0	胴	加E

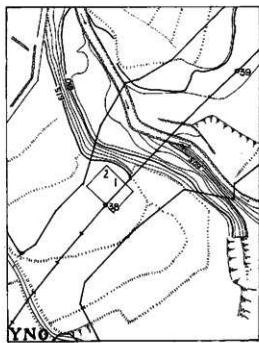


○用地的遺跡 ○伊賀良地区遺跡 ●山本地区遺跡 〽 古道

1. 中央道市地内及び周辺の遺跡分布図



2. かつき川橋遺跡 (1:2000)

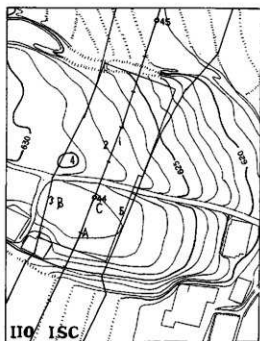


3. 柳山遺跡 (1:2000) (1・2 住居址)

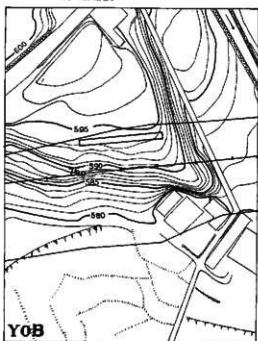
第1図 飯田市地内中央道用地内遺跡分布図及び地形図



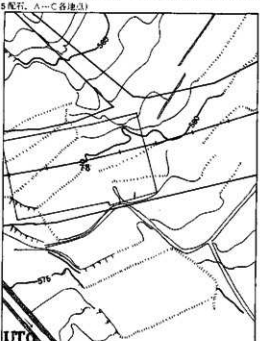
1. 山田遺跡



2. 石子塚古墳・石子塚遺跡 : 1-3.....方影堀溝跡, 4古溝, 5尾石, A-C各池田

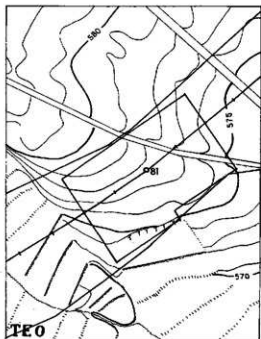


3. ようじ塚遺跡

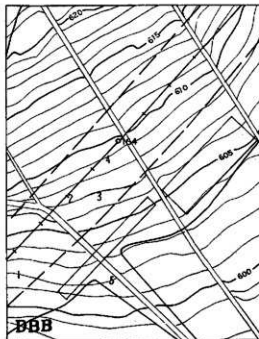


4. 上ノ平東部遺跡

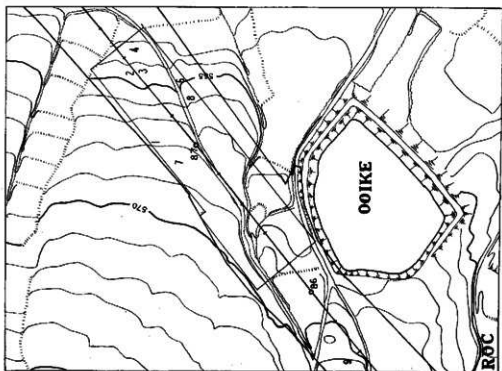
第2図 飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図 (1:2000)



1. 寺山遺跡

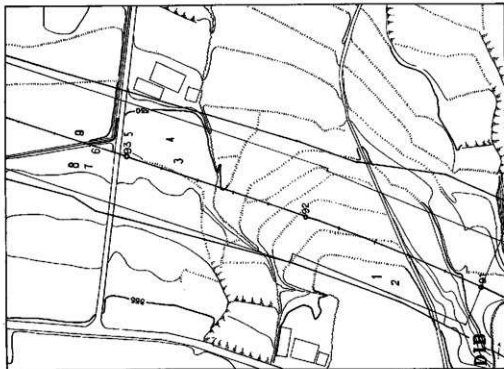


2. 大門原B遺跡(1~6位址)

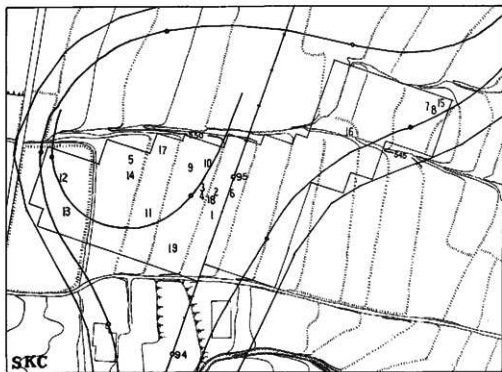


3. 穴原田遺跡(1~6位址, 7~9土層)

第4圖 飯田市地内中央道用地内各遺跡地形圖 (1:2000)

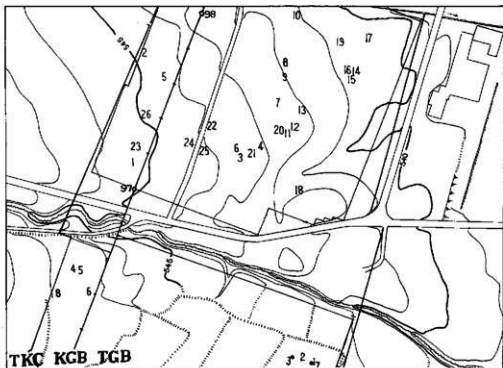


1. 大塚遺跡 (1~4住居址, 5~9土器群A~E)

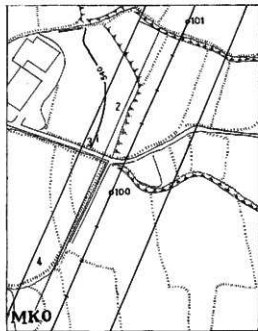


酒類遺跡 (1~16) 住居址・17壑穴遺構・18土墳・19埴輪状遺構

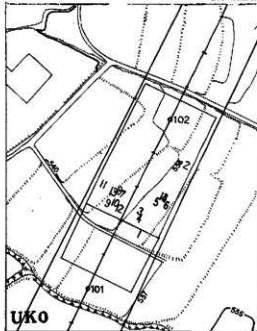
第3圖 飯田市地内中央道用地内各遺跡地形図 (1:2000)



1 滝沢中沢遺跡・小畑外遺跡・比柄外遺跡（F1-7住居址、8方形淵溝墓、上1-22住居址、23柱穴群、24・25土器片集中、26、焼土群）

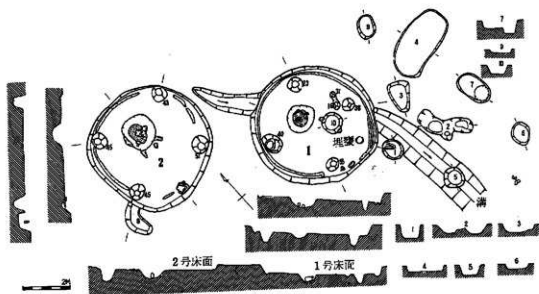


2. 三波洲遺跡（1-3住居址、4、土器）

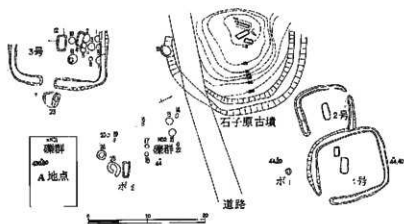


3. 上の余谷遺跡（1-13住居址、14柱穴群）

第5図 飯出市地内中央道用地内各遺跡地形図（1：2000）

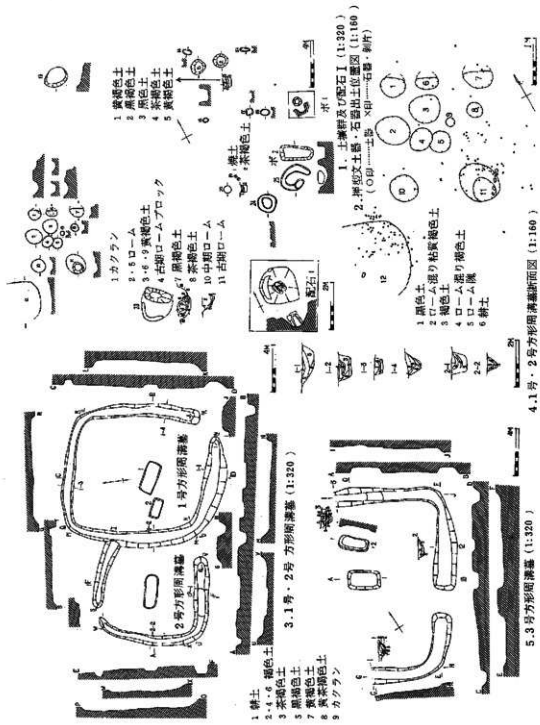


1. 柳田遺跡 1号2号住居址及び1号~10号土城図 (1:160)

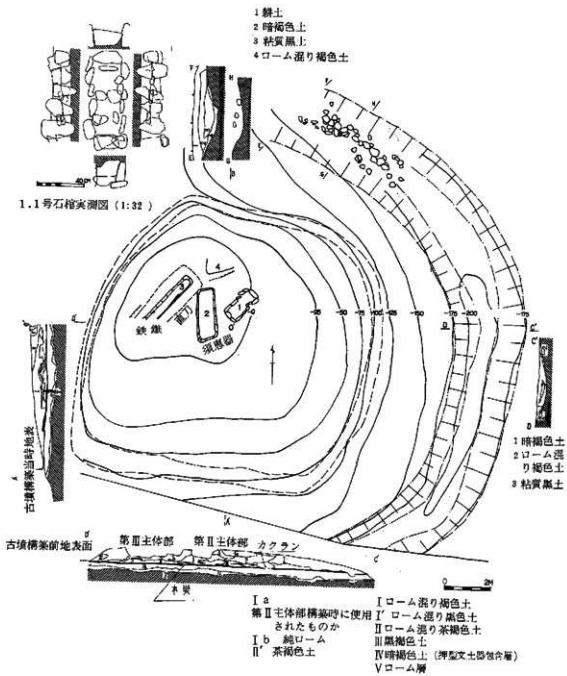


2. 石子原古墳・石子原遺跡・遺構全体図 (1:640)

第6図 柳田遺跡・石子原古墳・石子原遺跡遺構全体図

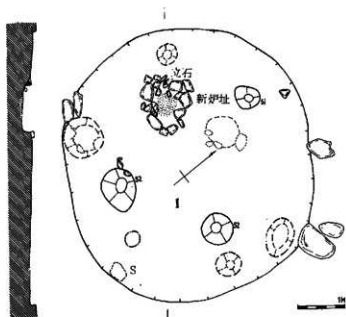


第7図 石子原遺跡土坑群及び方形周溝墓

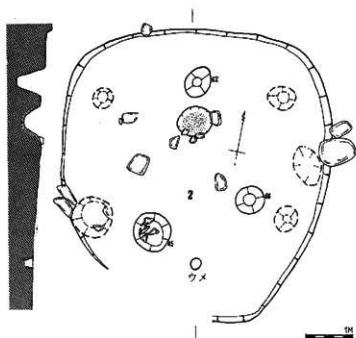


1.1号石棺実測図 (1:32)

第8図 石子原古墳実測図

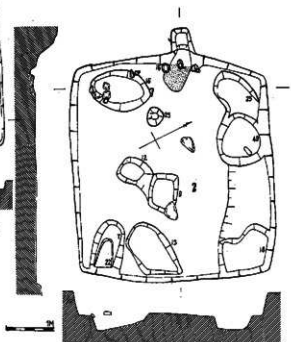
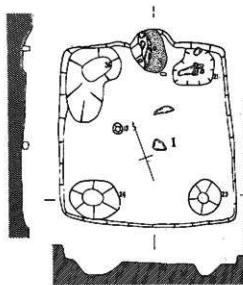


1. 1号住居址

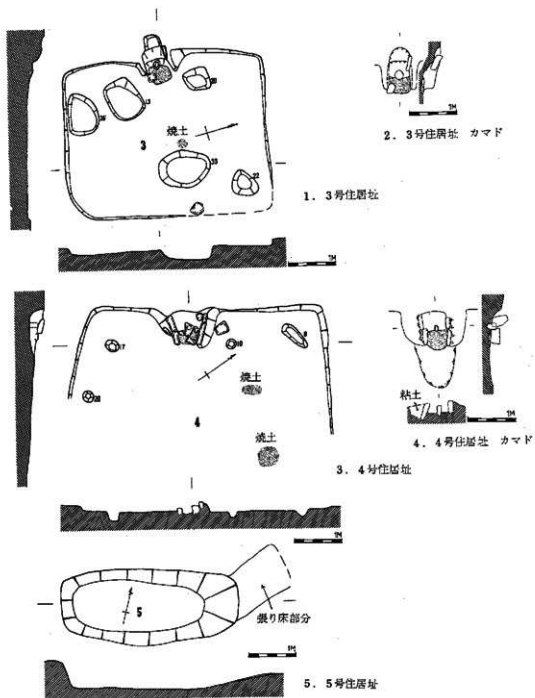


2. 2号住居址

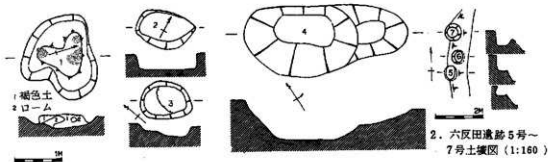
第9図 上の平東部遺跡1号・2号住居址(1:80)



第10図 六反田遺跡遺構全体図及び1号・2号住居址

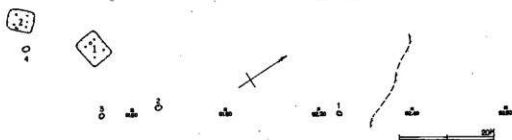


第11図 六反田遺跡3号・4号・5号住居址(1:80)

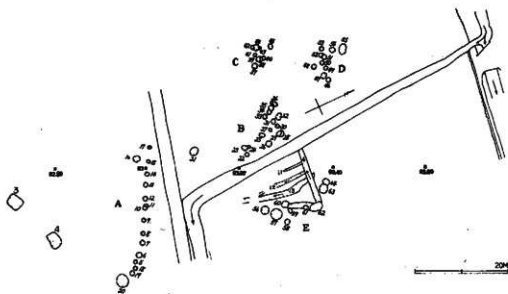


1. 六反田遺跡 1号～4号土坑図 (1:80)

2. 六反田遺跡5号～7号土坑図 (1:180)

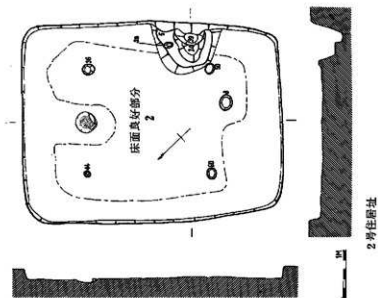
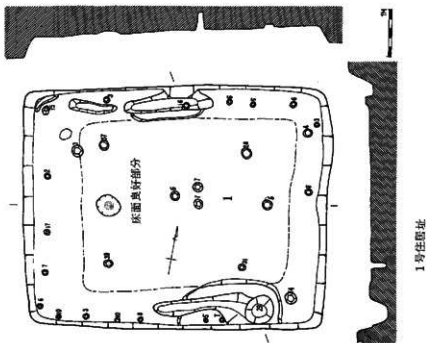


3. 大東遺跡A～C地区遺構全体図 (1:800)

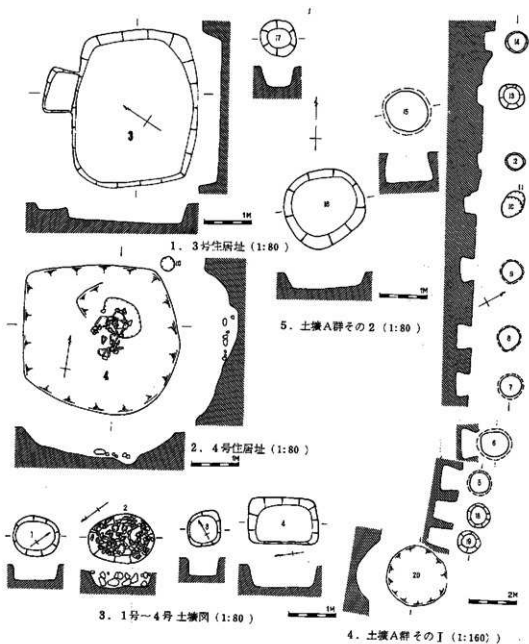


4. 大東遺跡D～E地区遺構全体図 (1:800)
(1～4 住居址, 1～64 土坑, A～E 土坑群)

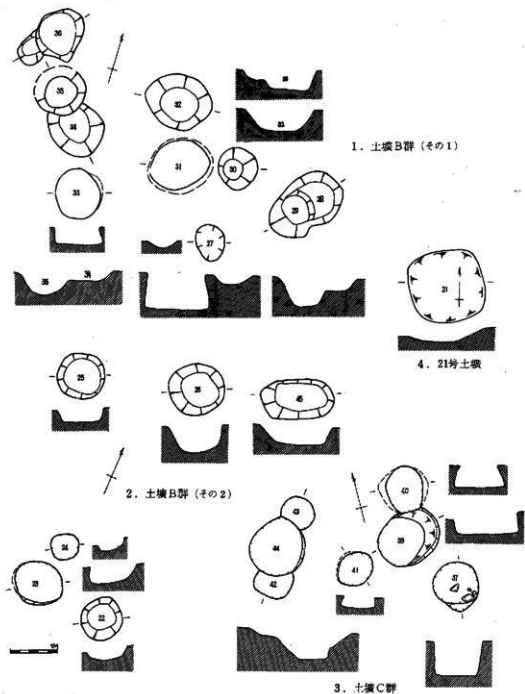
第12図 六反田遺跡土坑図及び大東遺跡遺構全体図



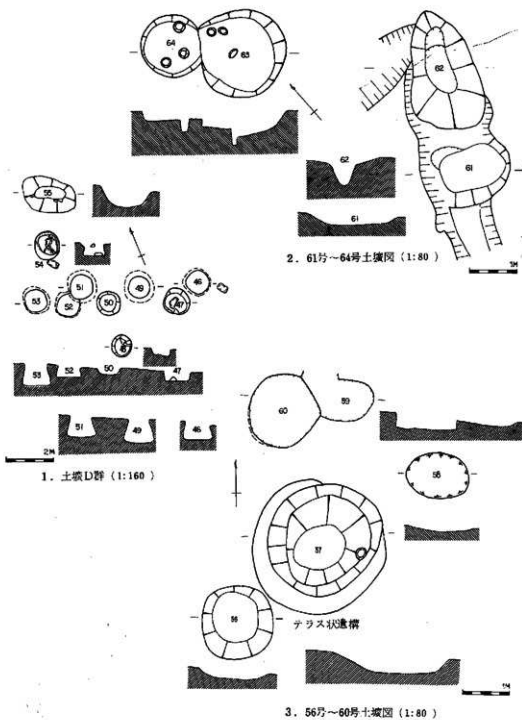
第13图 大塚遺跡1号・2号住居址(1:80)



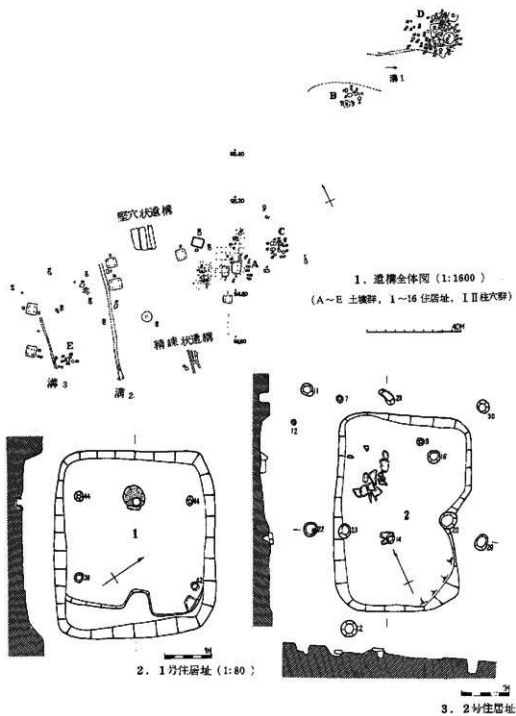
第14図 大東遺跡3号・4号住居址及び土坑図



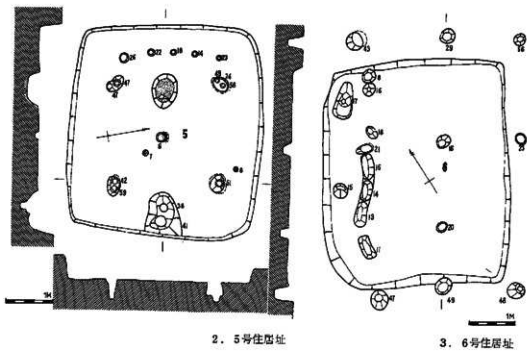
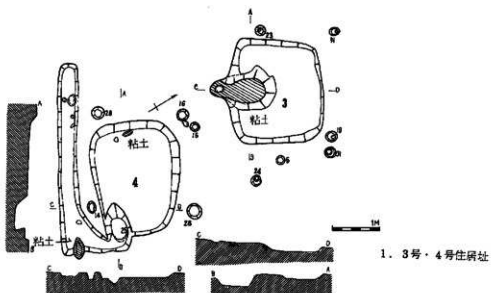
第15図 大東遺跡土坑図(1:80)



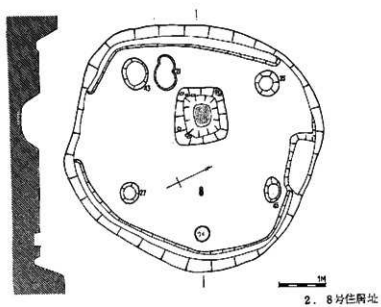
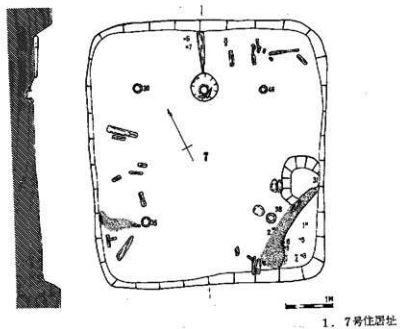
第16図 大東遺跡土壇図



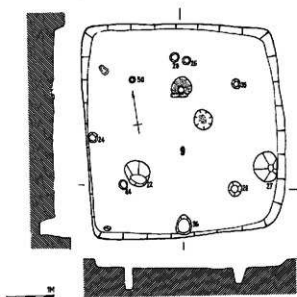
第17図 酒屋前遺構全体図及び1号・2号住居址



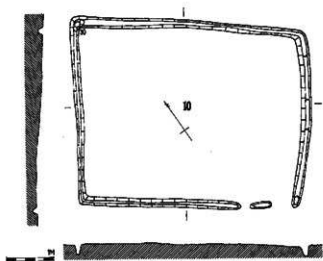
第18图 酒屋前遺跡3号·4号·5号·6号住居址(1:80)



第19图 酒屋前遺跡7号・8号住居址(1:80)

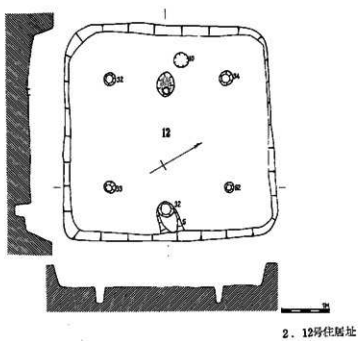
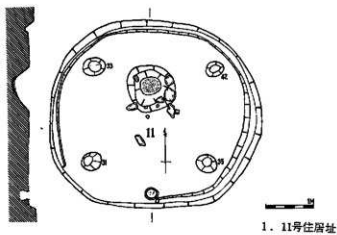


1. 9号住居址

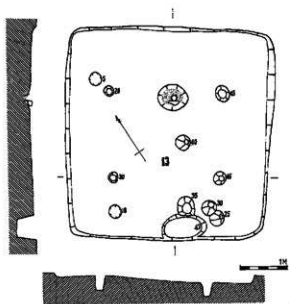


2. 10号住居址

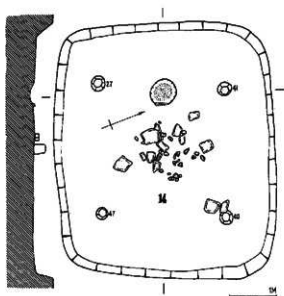
第20区 酒屋前遺跡9号・10号住居址 (1:80)



第 21 图 酒屋前遺跡 11 号・12 号住居址 (1 : 80)

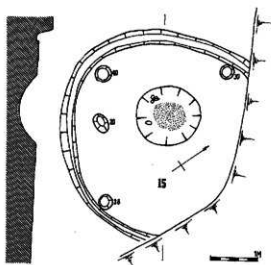


1. 13号住居址

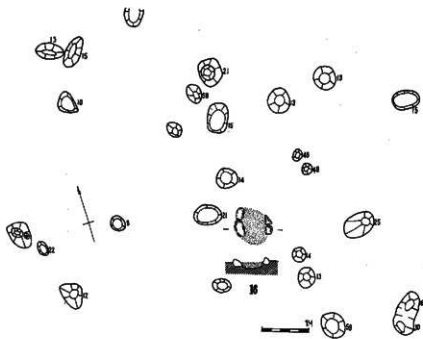


2. 14号住居址

第22图 酒屋前遺跡13号・14号住居址 (1:80)

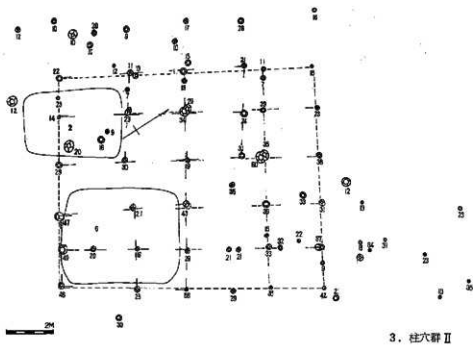
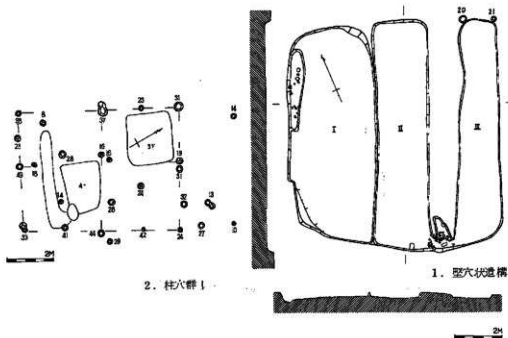


1. 15号住居址

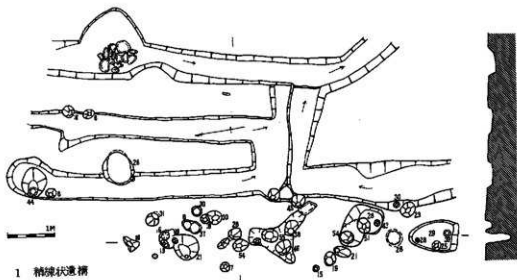


2. 16号住居址

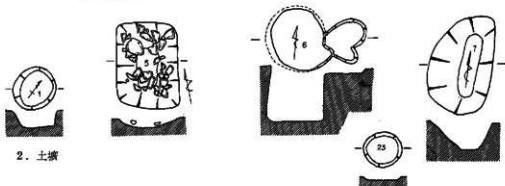
第23图 酒屋前遺跡15号・16号住居址(1:80)



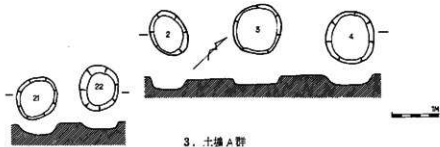
第 24 図 酒屋前遺跡竪穴状遺構及び柱穴群 I・II (1 : 160)



1 棒状排水溝

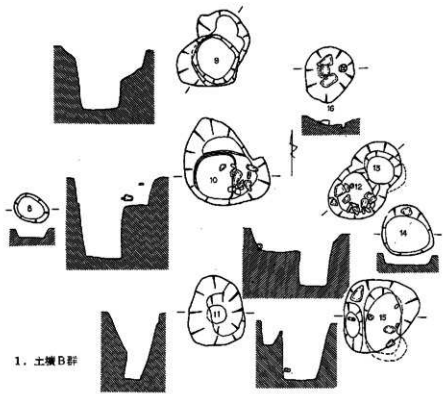


2. 土坑

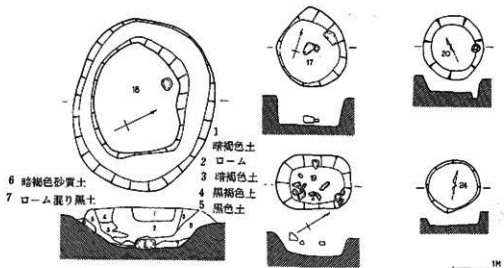


3. 土坑A群

第25図 酒屋前遺跡棒状排水溝遺構及び土坑図 (1:80)

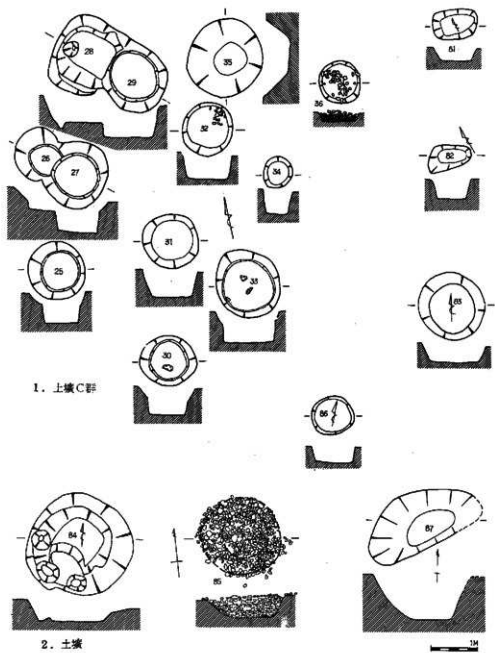


1. 土壌B群

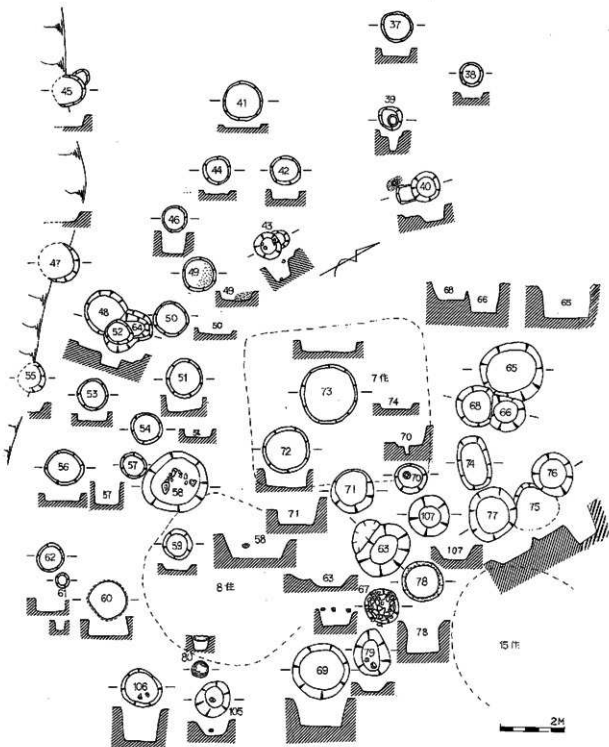


2. 土壌

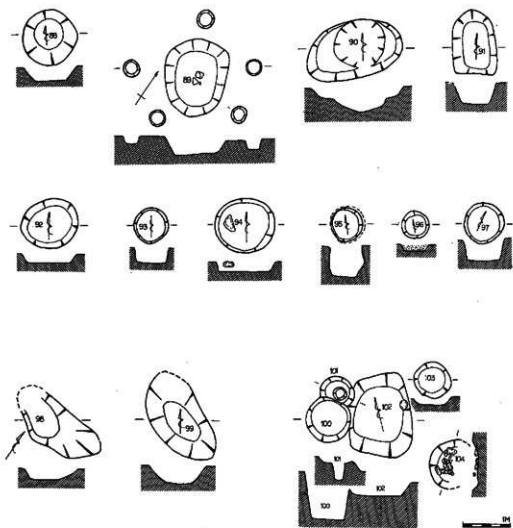
第26図 酒屋前遺跡土壌図 (1:80)



第27圖 酒屋前遺跡土城圖 (1:80)

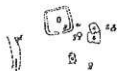


第28区 酒屋前遺跡土坑D群 (1:120)



七塚B群

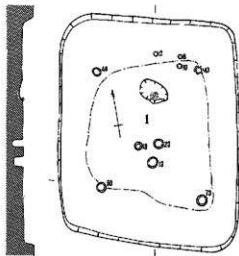
第 29 区 酒屋前遺跡土壇区 (1 : 80)



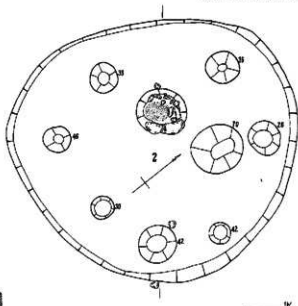
102



1. 遺構全体図 (1:800)

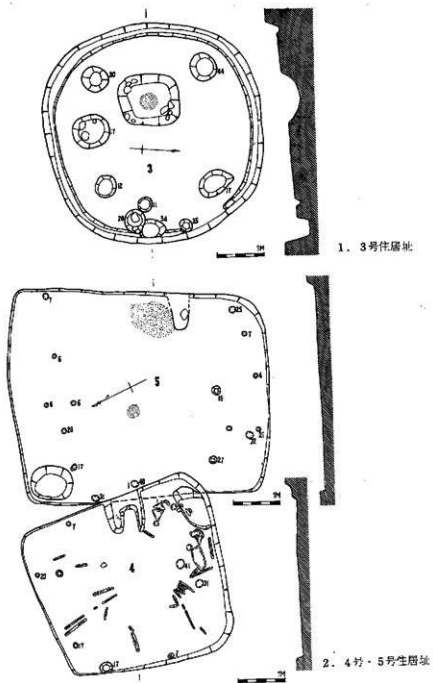


2. 1号住居址 (1:80)

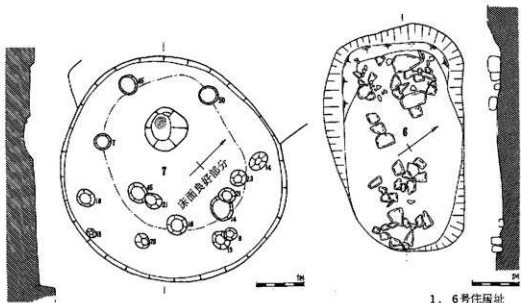


3. 2号住居址 (1:80)

第30区 滝沢井坑遺跡遺構全体図及び1号・2号住居址

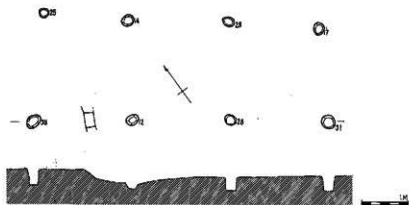


第31图 滝沢井尻遺跡3号・4号・5号住居址(1:80)



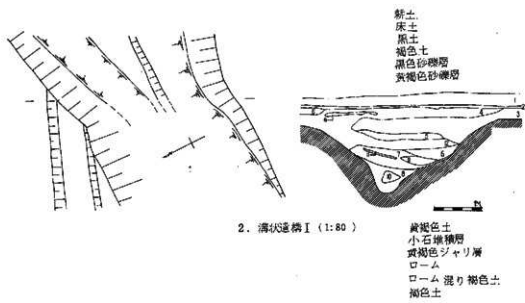
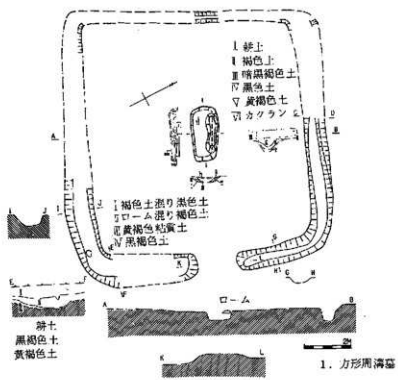
2. 7号住居址

1. 6号住居址

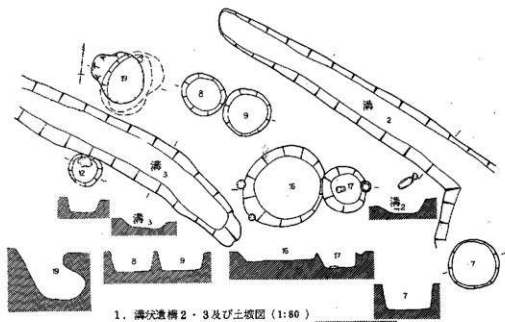


3. 柱穴址

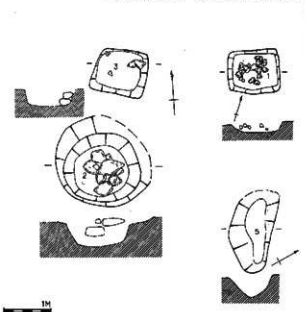
第32区 滝沢井尻遺跡6号・7号住居址及び柱穴址 (1:80)



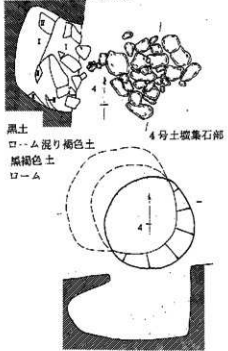
第 33 図 滝沢井遺跡跡方形周溝墓及び溝状遺構 I



1. 溝状遺構 2・3 及び土坑図 (1:80)



2. 1号～3号・5号土坑図 (1:80)

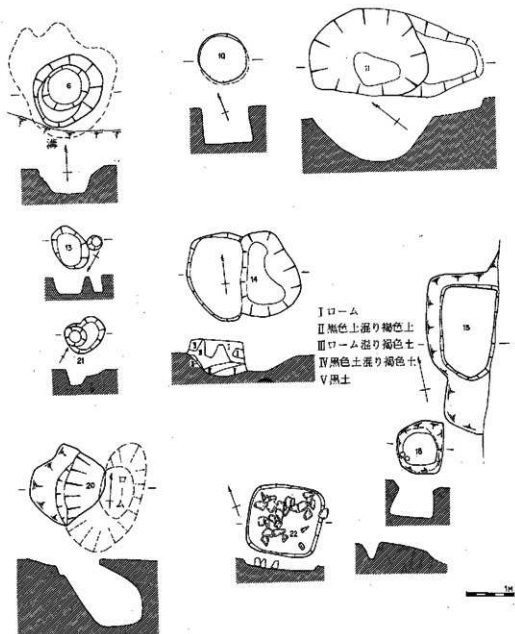


黒土
ローム混り褐色土
灰褐色土
ローム

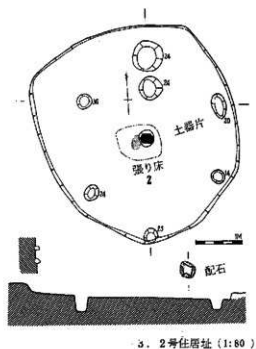
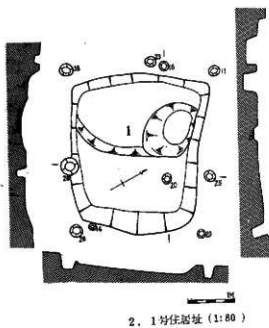
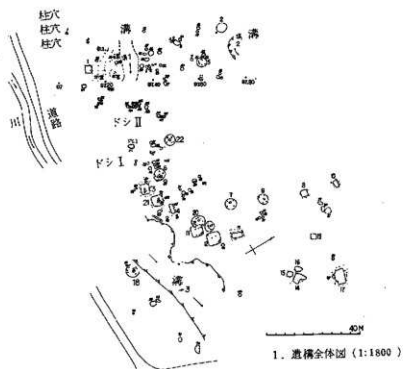
4号土坑集石部

3. 4号土坑図 (1:40)

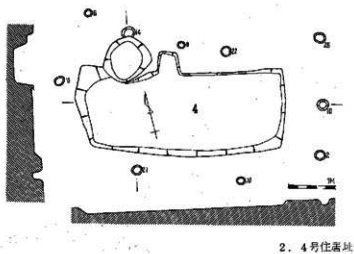
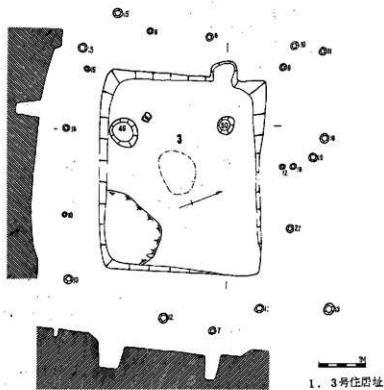
第 34 図 滝沢井尻遺跡溝状遺構 2・3 及び土坑図



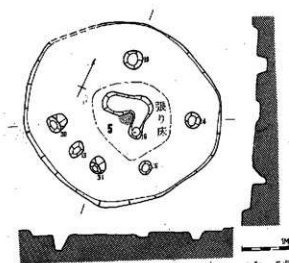
第35区 滝沢井尻遺跡土城區 (1:80)



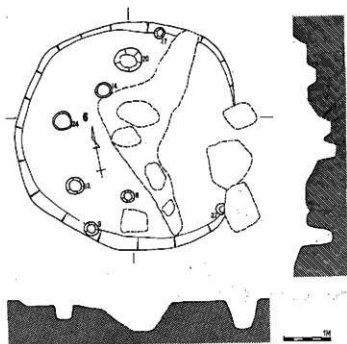
第36図 小垣外・辻垣外遺跡遺構全体図及び1号・2号住居址



第37图 小垣外・辻垣外遺跡3号・4号住居址(1:80)

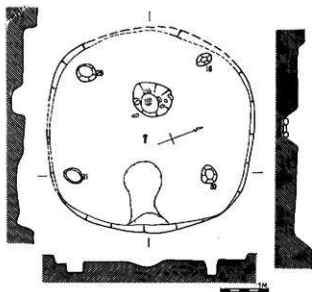


1. 5号住居址

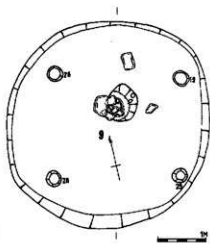


2. 6号住居址

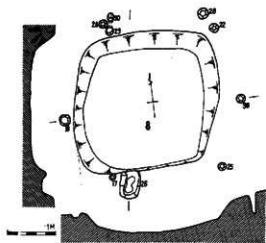
第38図 小垣外・辻垣外遺跡5号・6号



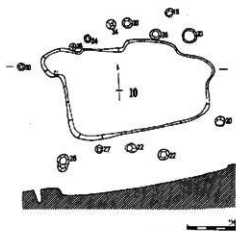
1. 7号住居址



3. 9号住居址

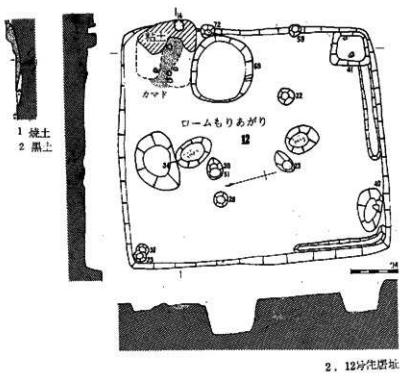
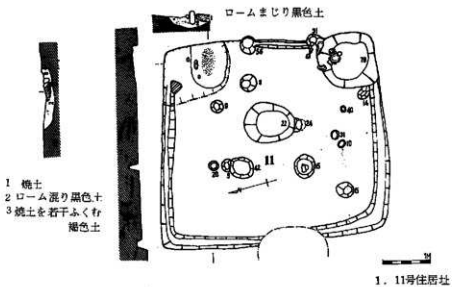


2. 8号住居址

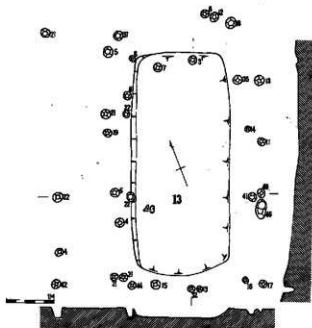


4. 10号住居址

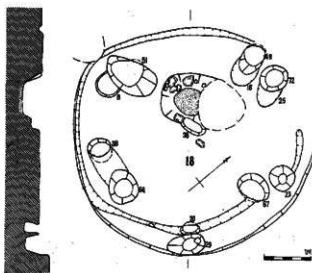
第39图 小垣外・辻垣外遺跡7号・8号・9号・10号住居址(1:80)



第40区 小垣外・辻垣外遺跡11号・12号住居址 (1:80)

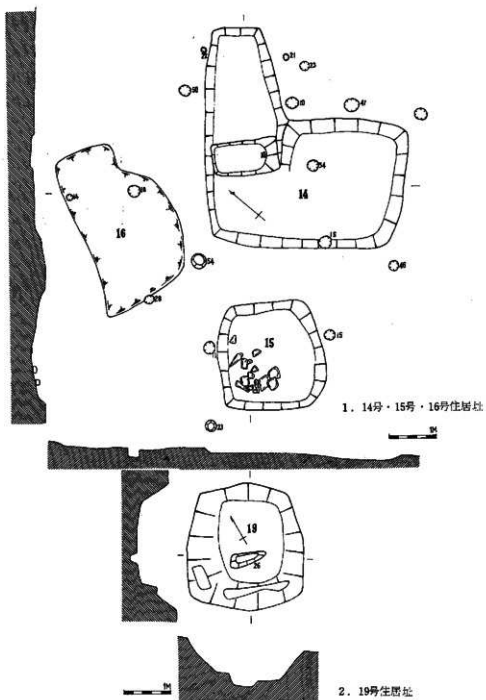


1. 13号住居址

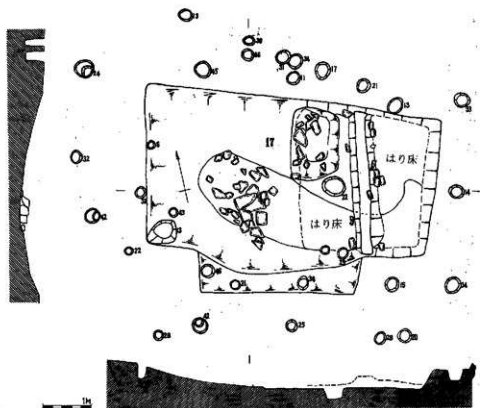


2. 18号住居址

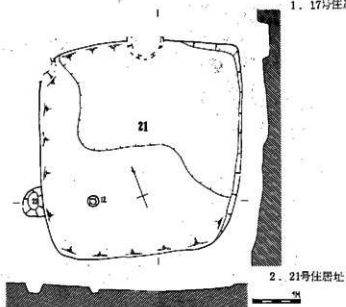
第41区 小垣外・辻垣外遺跡13号・18号住居址 (1:80)



第42图 小垣外・辻垣外・跡14号・15号・16号・19号住居址(1:80)

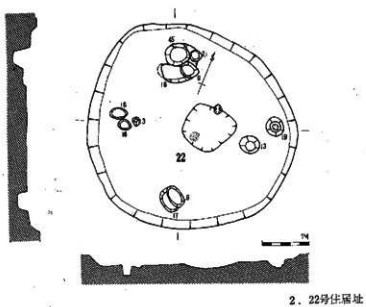
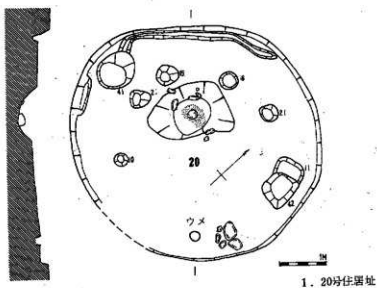


1. 17号住居址

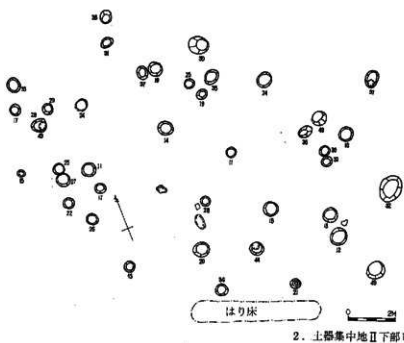
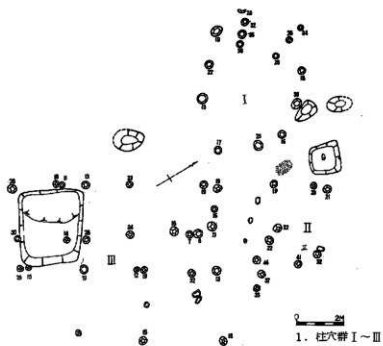


2. 21号住居址

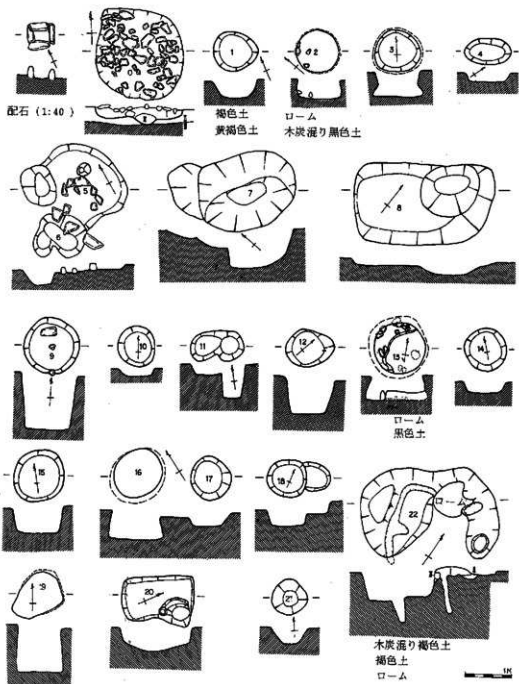
第 43 図 小垣外・辻垣外遺跡17号・21号住居址 (1 : 80)



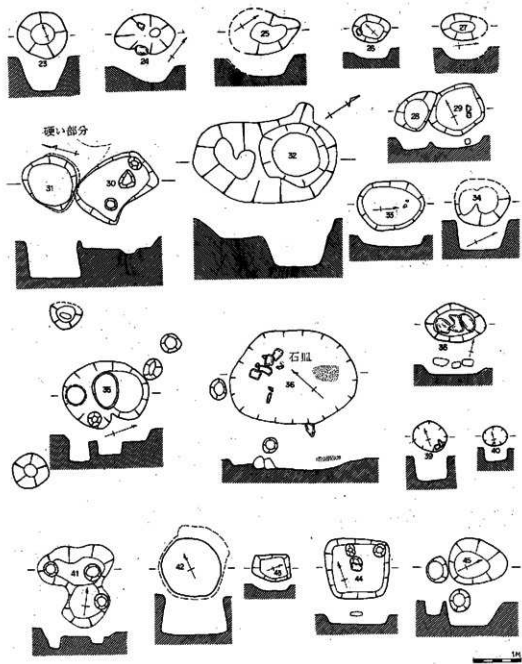
第 44 圖 小垣外・辻垣外遺跡 20 号・22 号住居址 (1 : 80)



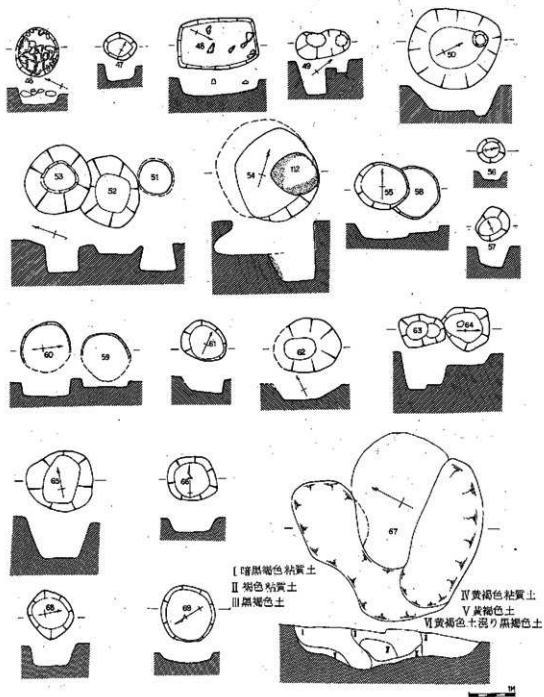
第 45 図 小垣外・辻垣外・遺跡柱穴群及び土器集中地 II (1 : 80)



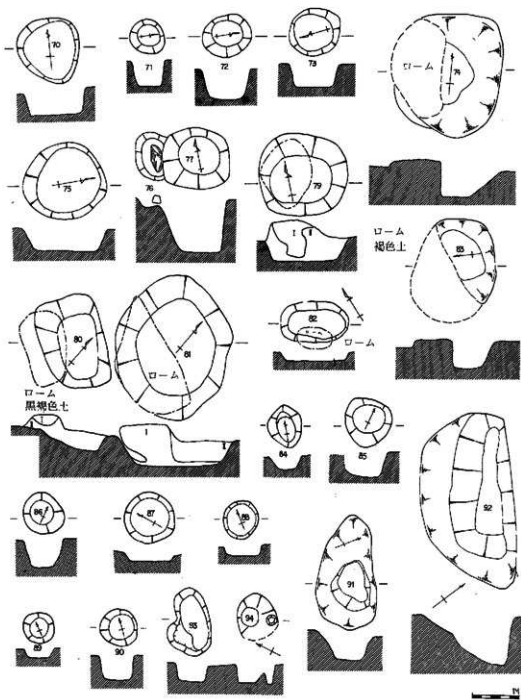
第46図 小垣外・辻垣外遺跡配石及び0号~22号土壌図(1:80)



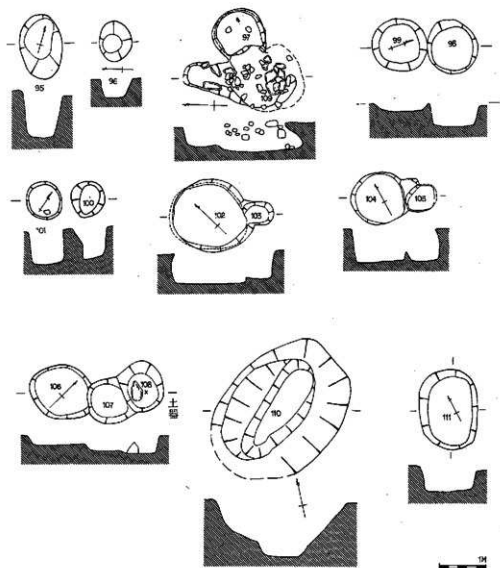
第47区 小埴外・辻埴外遺跡23～45号土埴図(1:80)



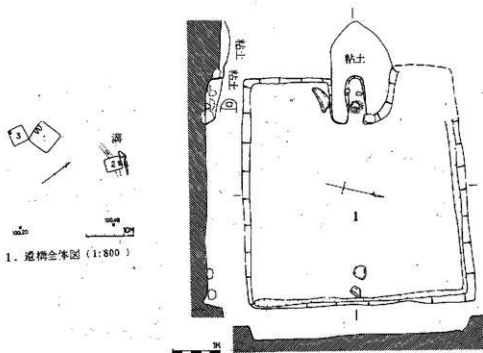
第48图 小垣外·辻垣外遺跡46~69号·112号土坑区(1:80)



第 49 图 小垣外・辻垣外遺跡70~94号土壁図 (1 : 80)

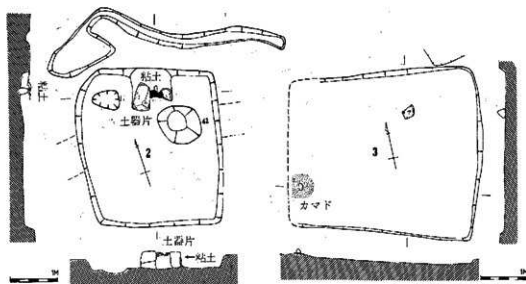


第 50 图 小垣外・辻垣外遺跡 95 号～ 111 号土壌図 (1 : 80)



1. 遺構全体図 (1:800)

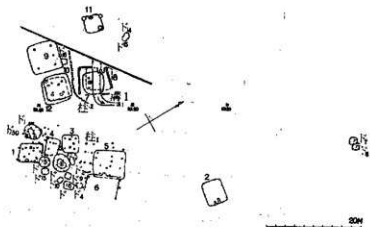
2. 1号住居址 (1:80)



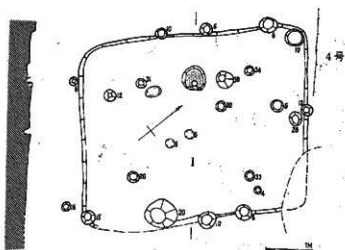
3. 2号住居址 (1:80)

4. 3号住居址 (1:80)

第51図 三葦満遺跡遺構全体図及び1号・2号・3号住居址

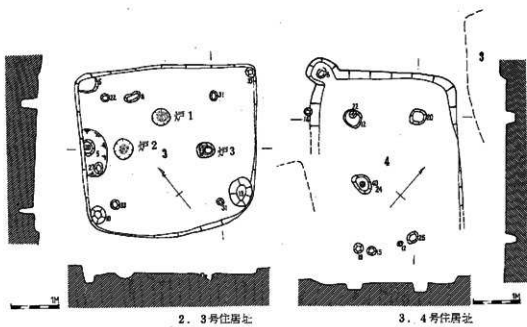
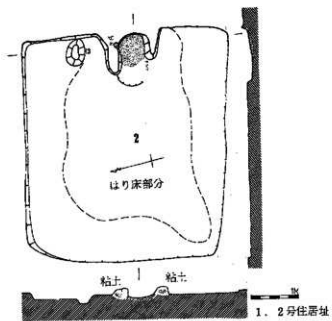


1. 遺構全体図 (1:800)

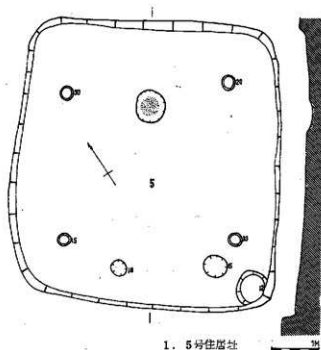


2. 1号住居址 (1:80)

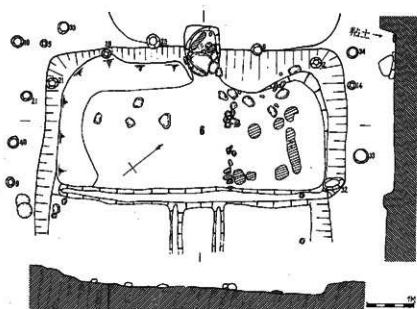
第52図 上の金谷遺跡遺構全体図及び1号住居址



第53図 上の金谷遺跡2号・3号・4号住居址 (1:80)

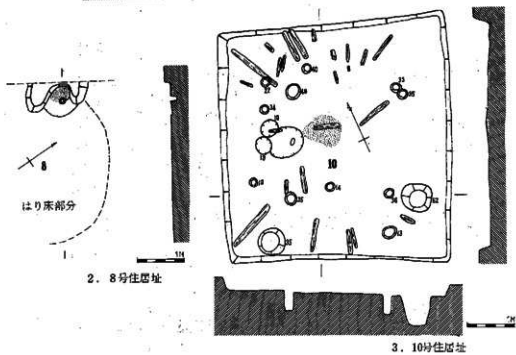
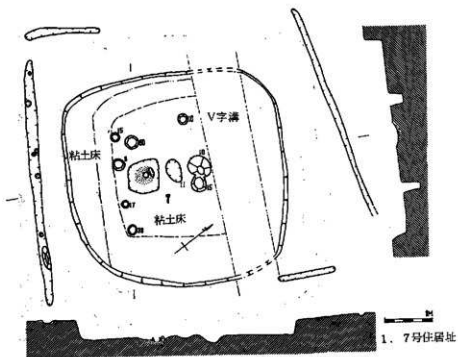


1. 5号住居址

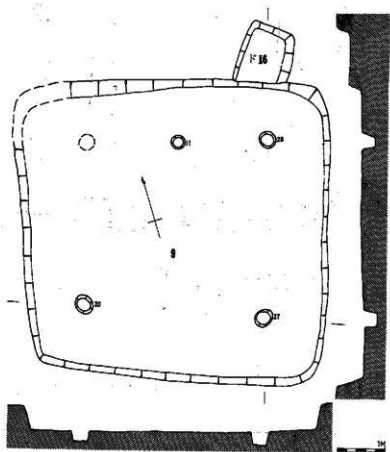


2. 6号住居址

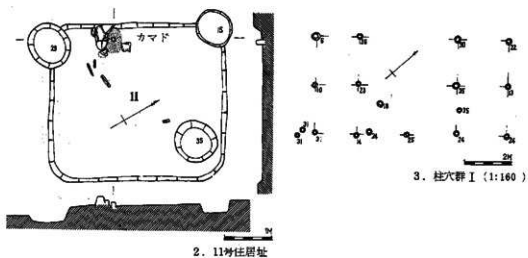
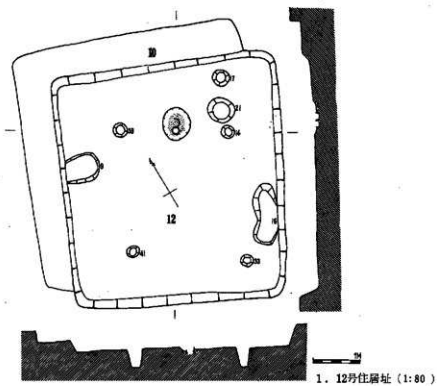
第54図 上の金谷遺跡5号・6号住居址 (1:80)



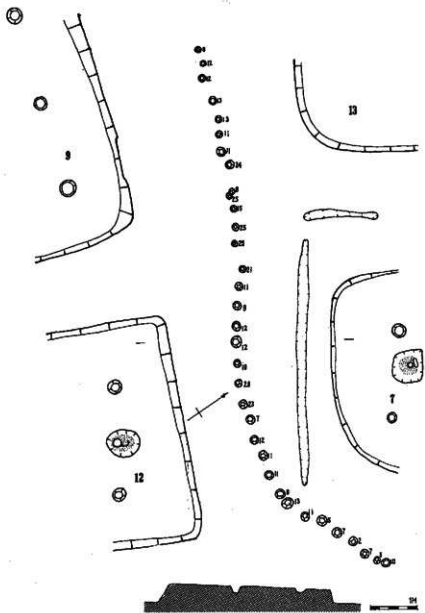
第 55 図 上の金谷遺跡 7 号・8 号・住居址 (1 : 80)



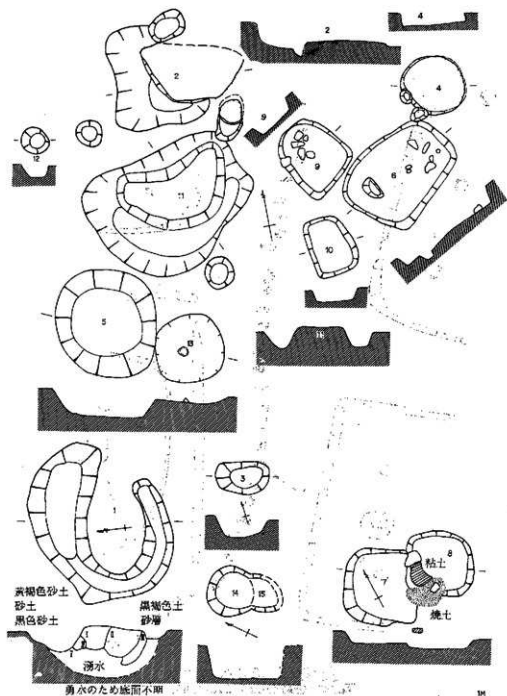
第56図 上の金谷遺跡9号住居址及び14号土壇図(1:80)



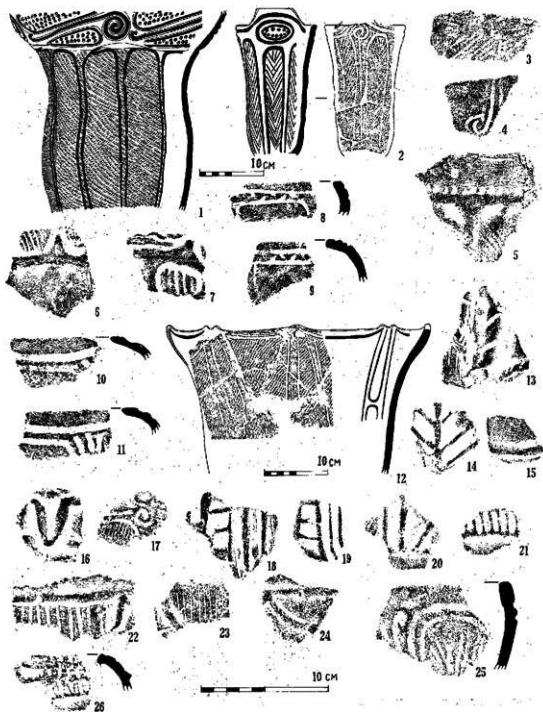
第57図 上の金谷遺跡11号・12号住居址及び柱穴群I



第58図 上の金谷遺跡柱穴群Ⅱ (1:80)



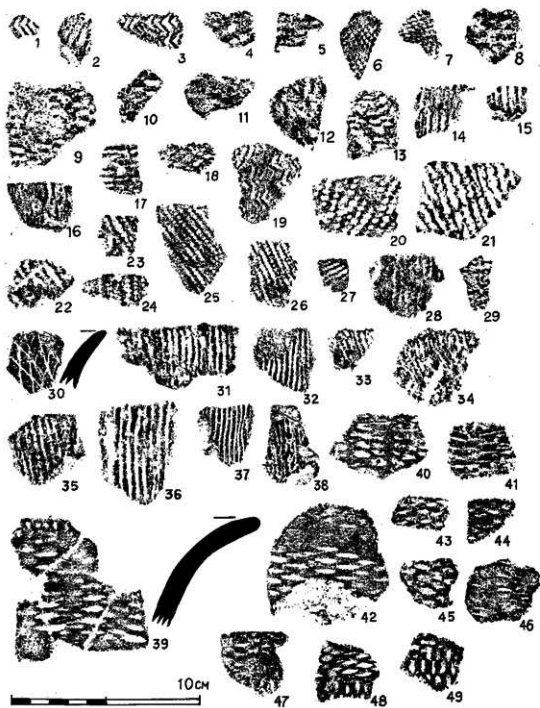
第59図 上の金谷遺跡土壌図 (1:80)



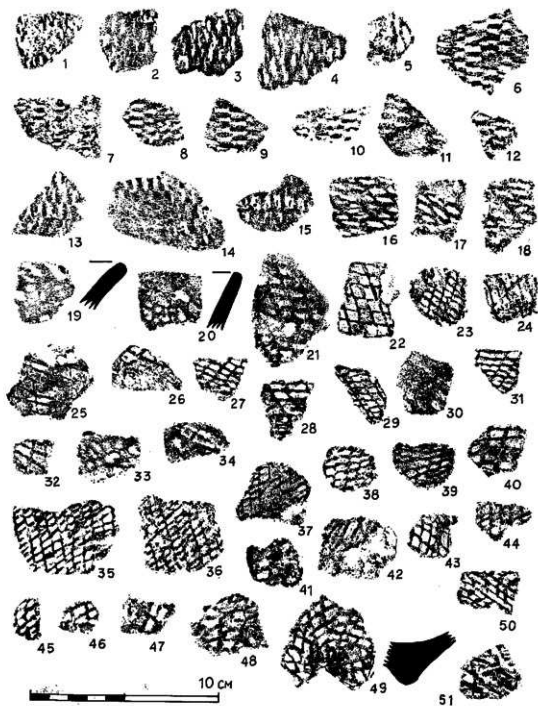
第60図 柳山遺跡出土土器 (1:3, 但し1・2・12, 1:6)

(1・2 1号作付址, 3~9 2号作付址,

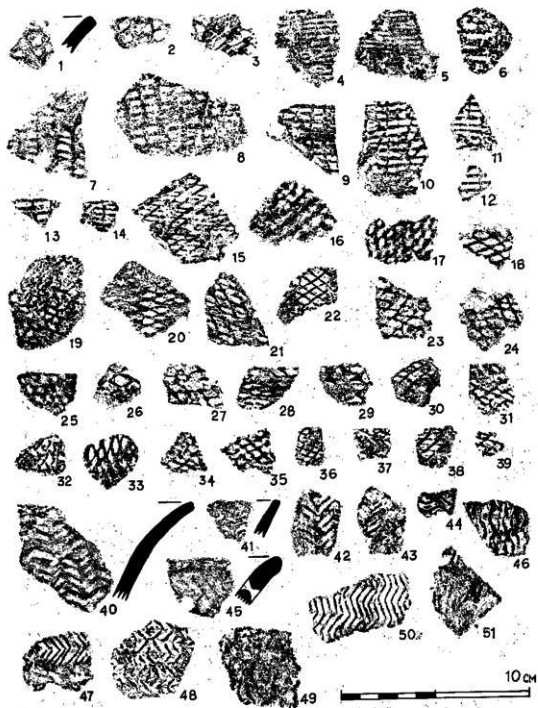
10~11 土坑1, 12 土坑4, 13~15 土塚5, 16~17 土塚8, 18~26 その他)



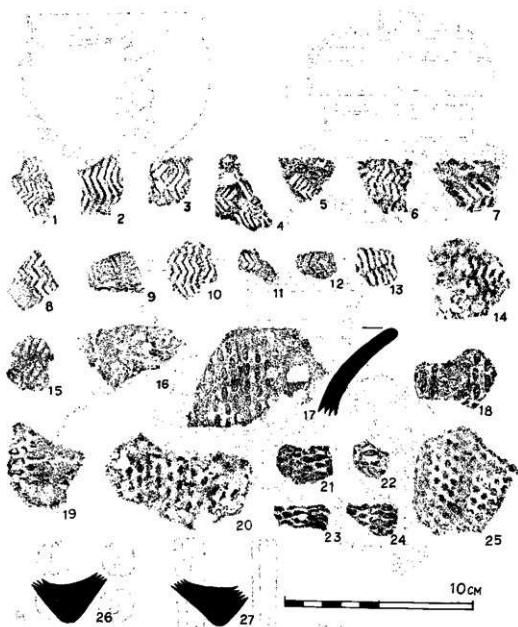
第61図 石子原遺跡出土土器 (1:2), (1土破1, 2土破3, 3土破4, 4土破7, 5-7土破8, 8-11土破11, 12-19土破12, 20-49その他)



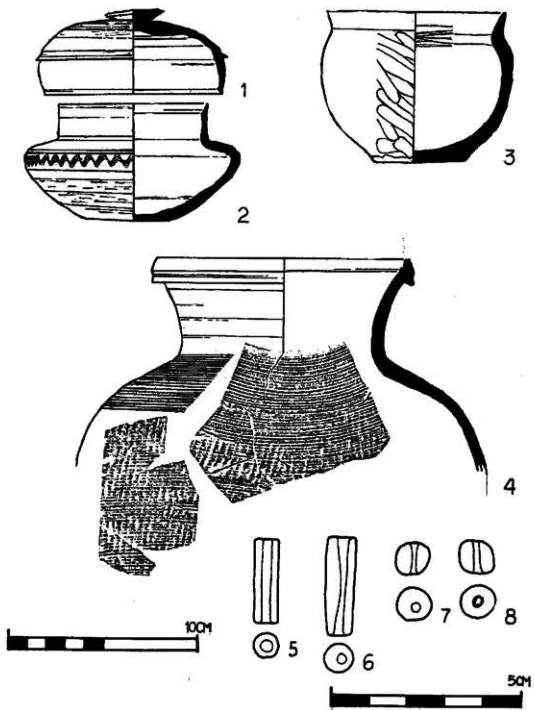
第62图 石子原遺跡出土土器(1:2)



第63圖 石子原遺跡出土土器 (1:2)

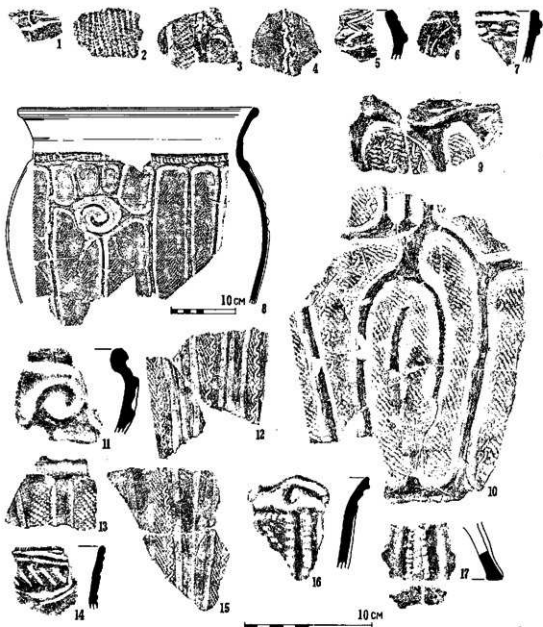


第64圖 石子原遺跡出土土器 (1・2)

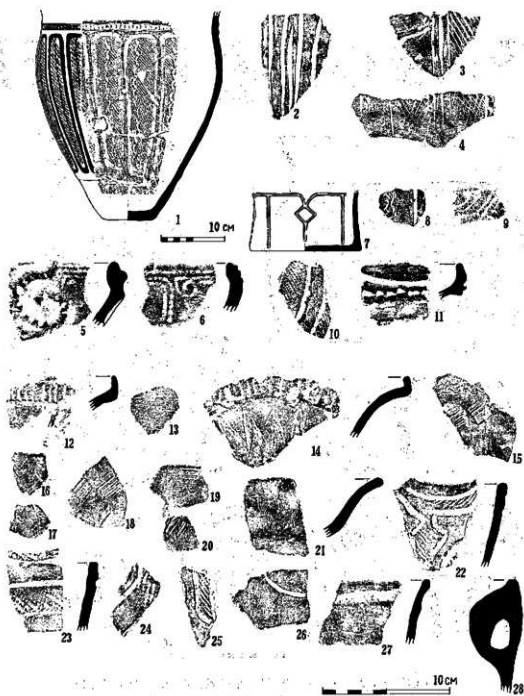


第65区 石子原古墳及び石子原遺跡出土土器・石製品 (1:1, 但し1~4, 1:2)

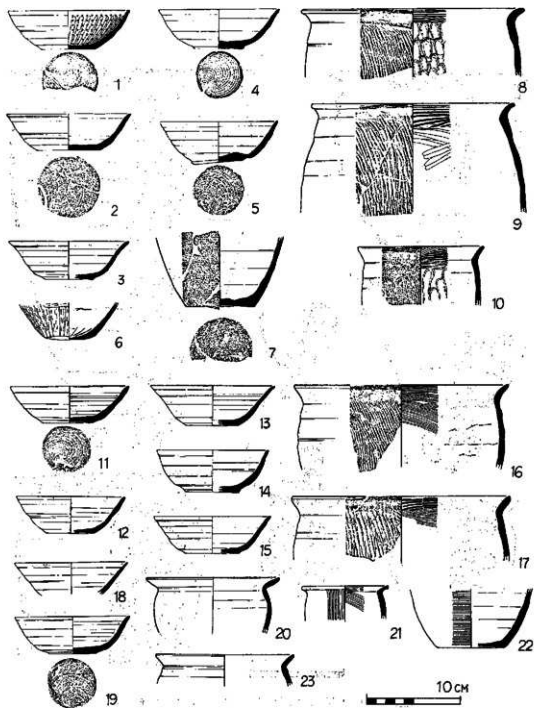
(1~3 2丹土器, 4~6 刺土; 7・8 1号方形用簡蓋主体部)



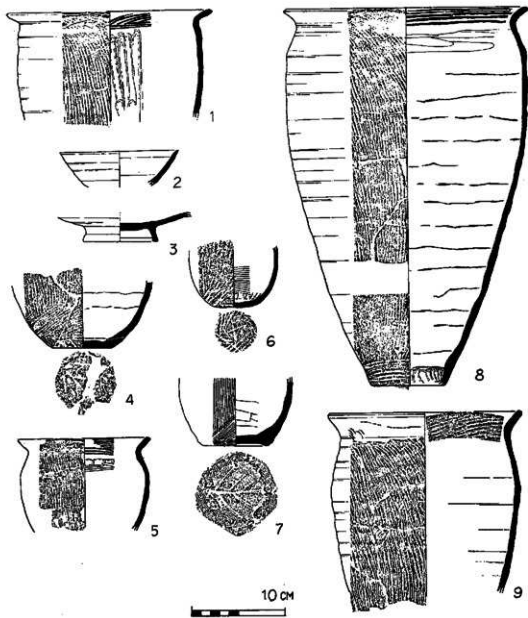
第66図石子原遺跡(1~7)及び上の平東部遺跡(8~17)出土土器
 (1:3, 但し8, 1:6)(1~7 その他, 8~10 1号住居址, 11~17 2号住居址)



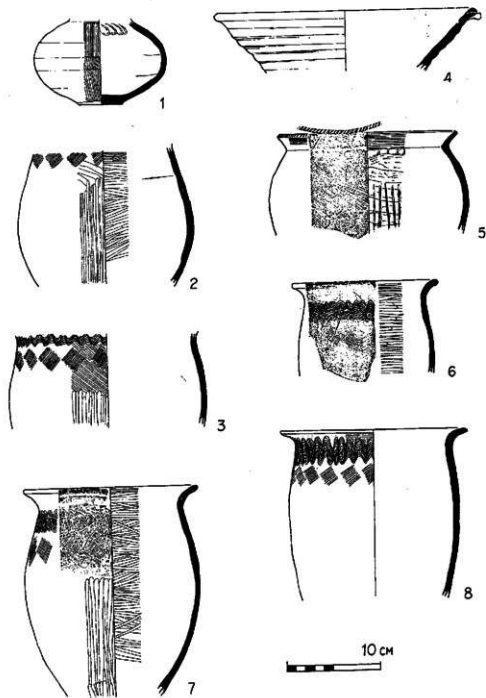
第67図 上の平東部遺跡(1~4)・六反田遺跡(5~11)及び大東遺跡(12~28)
出土土器(1:3, 但し1・7 1:6)



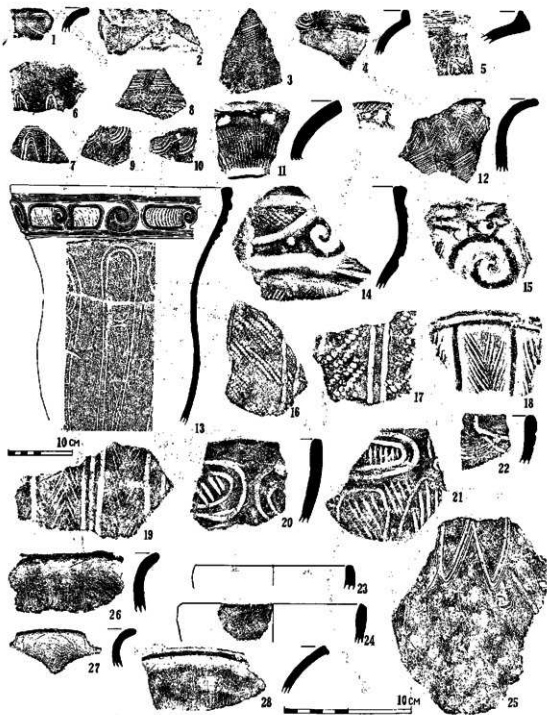
第68圖 六田田遺跡出土七器 (1:4) ①-10 1.5H, 11-17 2.5H, 18-23 3.5, E1



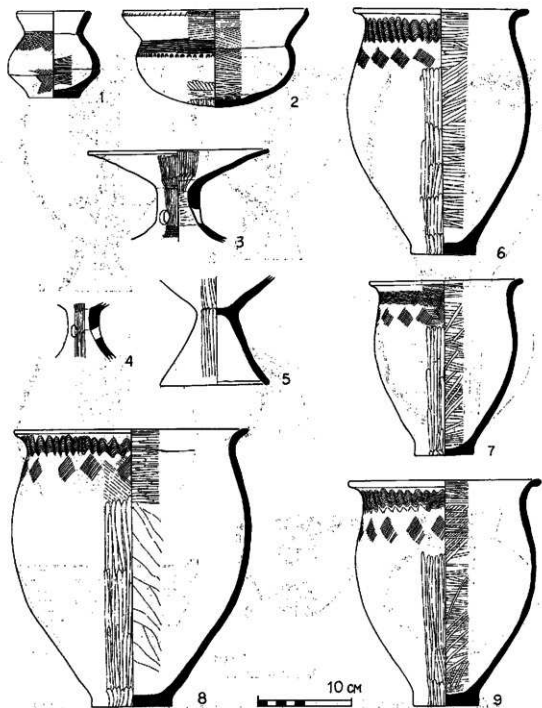
第69图 六反田遺跡出土土器(1:4)(1 3号作, 2~9 4号作)



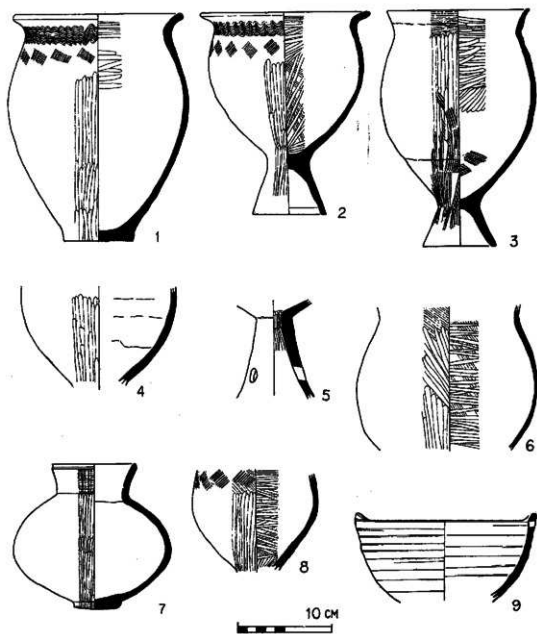
第70图 酒屋前遗址出土土器 (1:4) (1-3 1号坑, 4 4号坑, 5-8 5号坑)



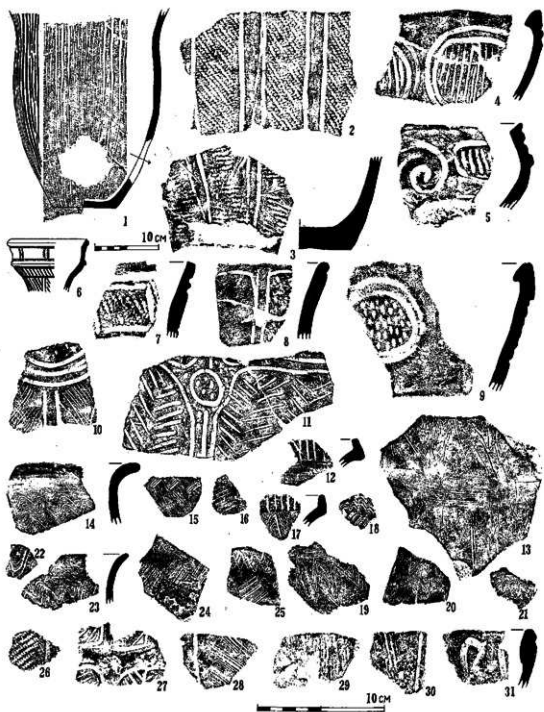
第71图 酒屋前遺跡出土土器 (1:3, 但し13, 1:6)



第72图 涇陽前遺跡7号住居址出土土器(1:4)



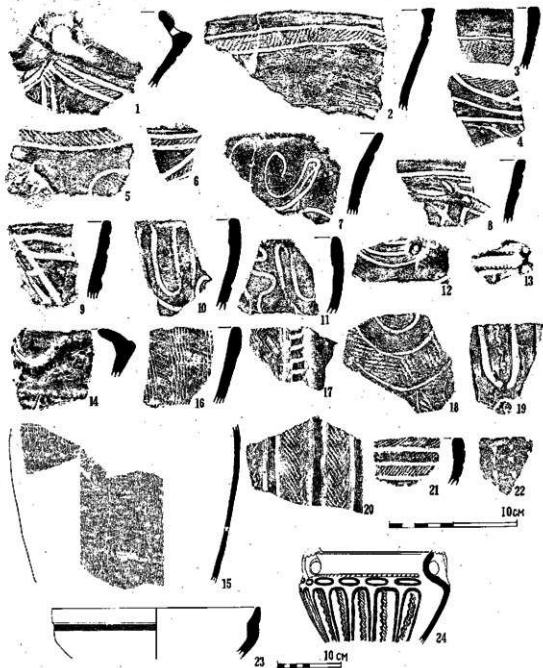
第73图 酒屋前遗址出土土器 (1:4) (1~4 7号住, 5 9号住, 6 12号住, 7·8 13号住, 9满3)



第74図 酒屋前遺跡出土土器 (1:3, 須し1・6, 1:6)

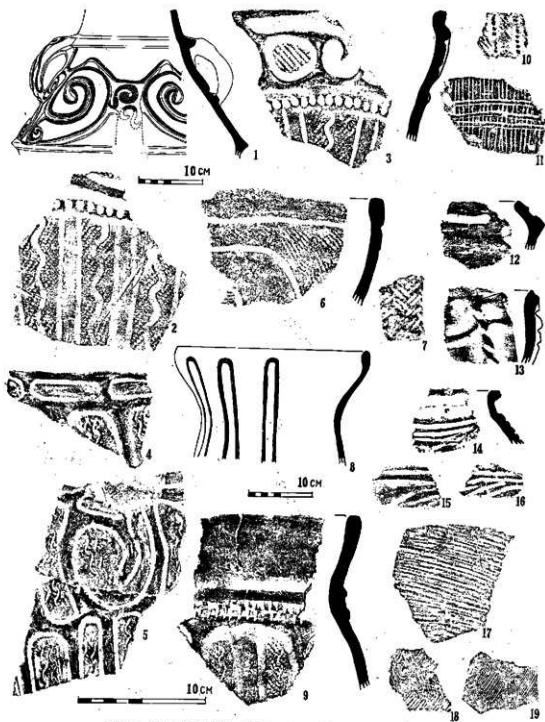
(1~11 11号住居址)

12~16 12号住居址, 17~21 13号住居址, 22~25 14号住居址, 26~31 15号住居址)

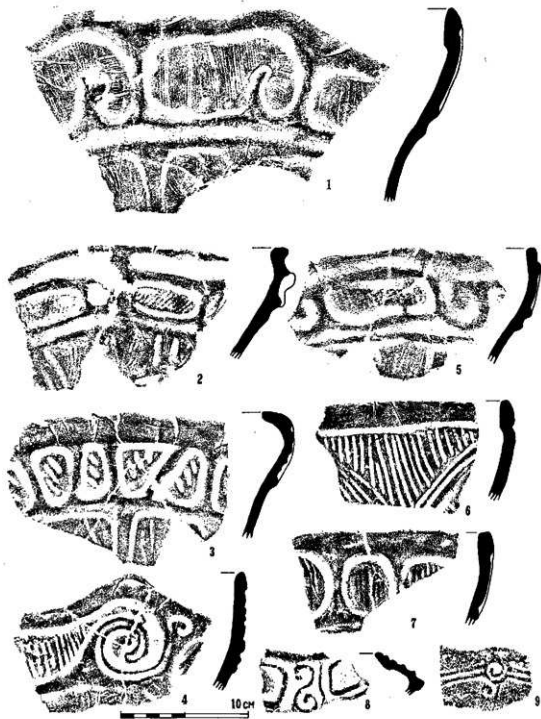


第75図 酒屋前遺跡出土土器 (1:3, 但し15・23・24, 1:6)

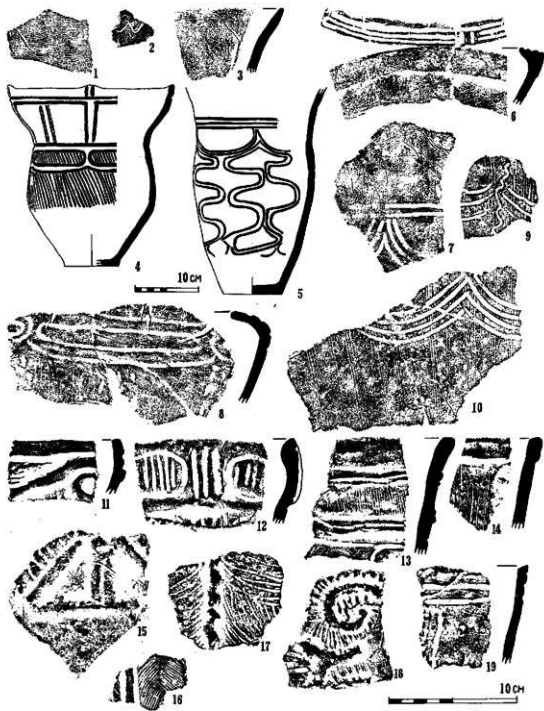
(1~14 16) 徳島址, 15 土城 8, 16・17 七歌
 10, 18 土城 11, 19 土城 12, 20 土城 15, 21・22 21・22 七歌 16, 23 土城 26, 24 土城 53)



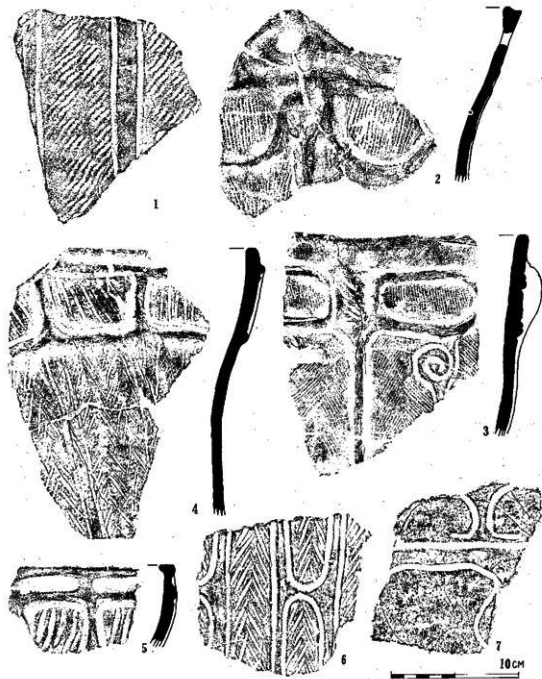
第76図 酒屋前遺跡出土土器(1:3, 但し1・8, 1:6)
 (1・2 土紋17, 3
 土紋54, 4・5 土紋65, 6・7 土紋70, 8 土紋75, 9 土紋92, 10-19 その他)



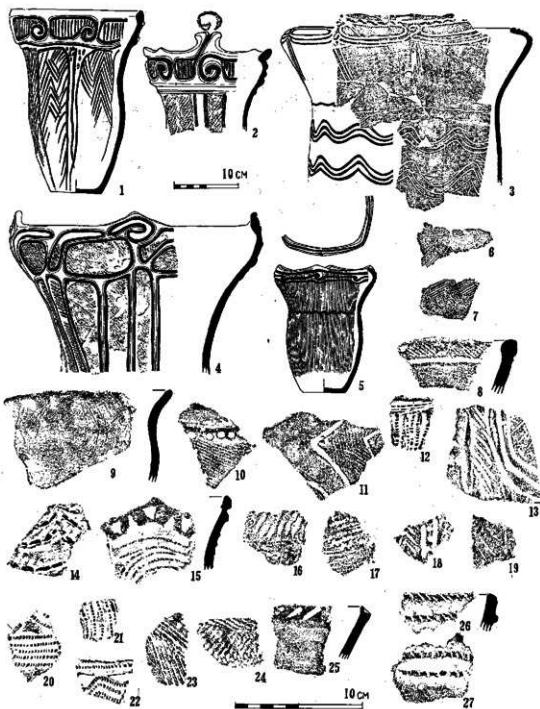
第77图 酒尾前边跡土塚58出土土器(1:3)



第78图 河内井尻遺跡出土土器 (1:3, 但し4・5, 1:6)
 (1-3 1号住居址, 4-19 2号作册址)



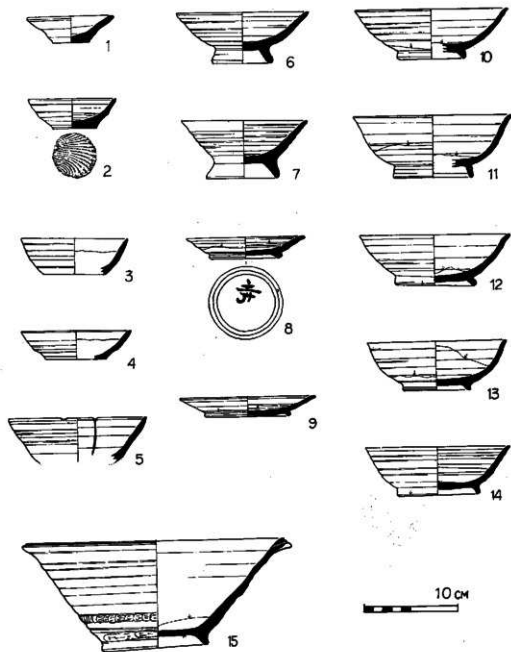
第79图 滝沢井尻遺跡3号住居址出土土器(1:3)



第80図 滝沢井尻遺跡出土土器(1:3但し1~5 1:6)

(1・2 3号位附址)

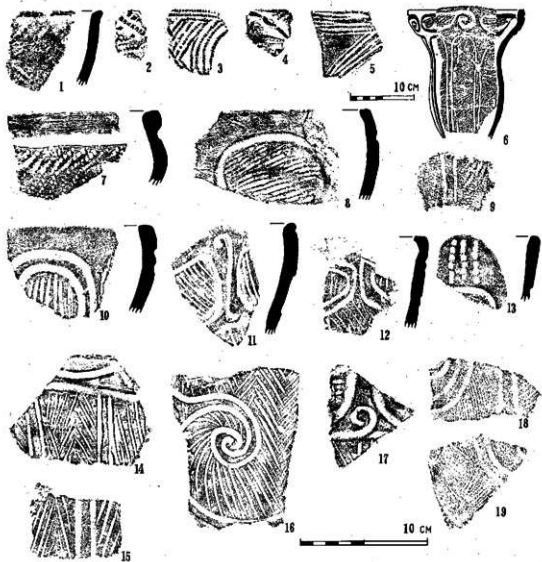
3~5 7号位附址, 6・7 方形周溝墓, 8・9 溝3, 10・11 土塚6, 12 土
 塚13, 13 土塚14, 14 土塚15, 15~17 土塚18, 18・19 土塚20, 20~27 その他)



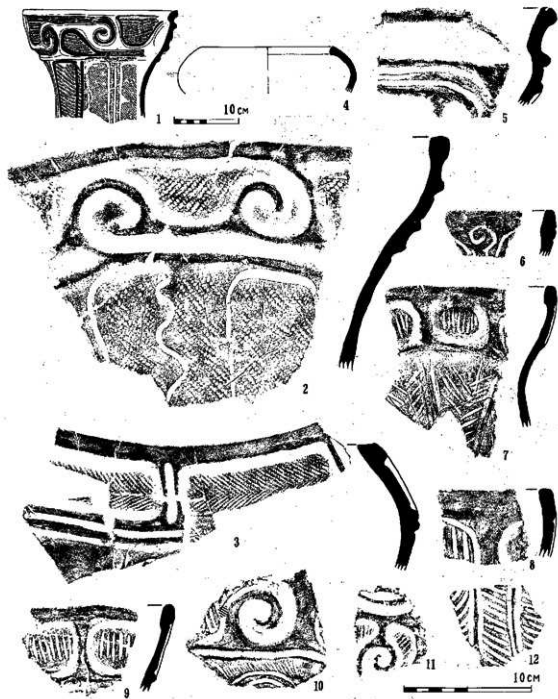
第81图 滝沢井原遺跡出土土器(1:4) (1~14 4号住, 15土庫3)



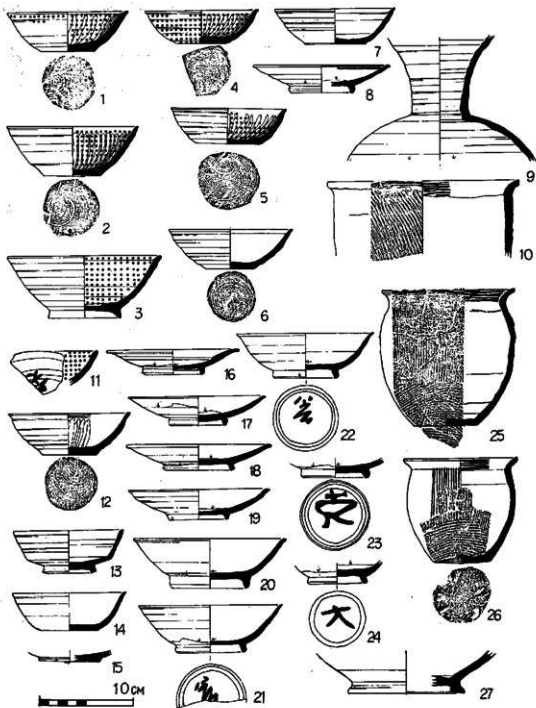
第82图小垣外·辻垣外迹跡出土土器 (1:3)
 (1~11 2分住遗址, 12~18 5分住遗址)



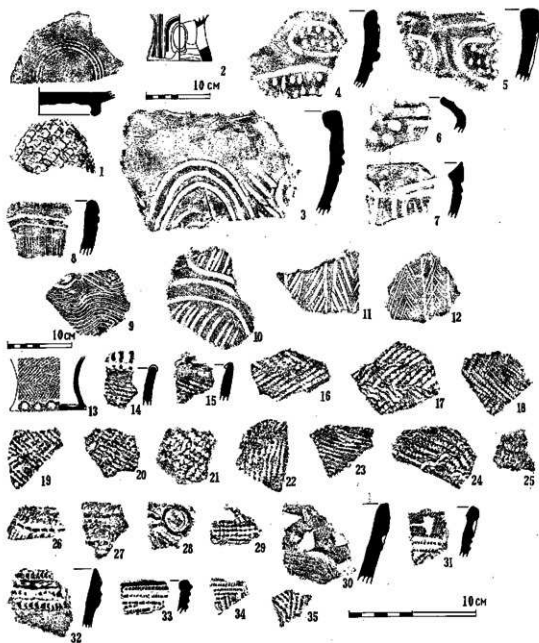
第83区 小墳外・辻垣外遺跡出土土器 (1:3, 但し6, 1:6)
 (1-5 6号住居址, 6-19 7号住居址)



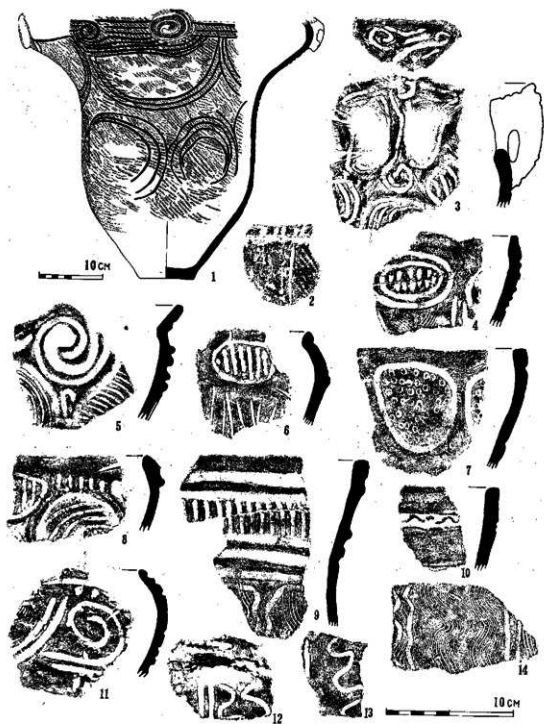
第84図 小皿外・辻垣外遺跡9号住居址出土之土器 (1:3, 但し1・2, 1:6)



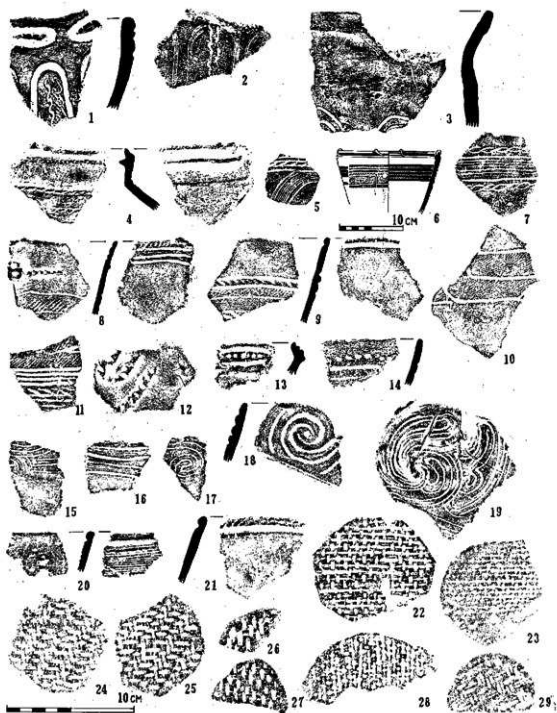
第85图 小垣外·辻垣外遺跡出土土器(1:4) (1-10 11号作, 11-27 12号作)



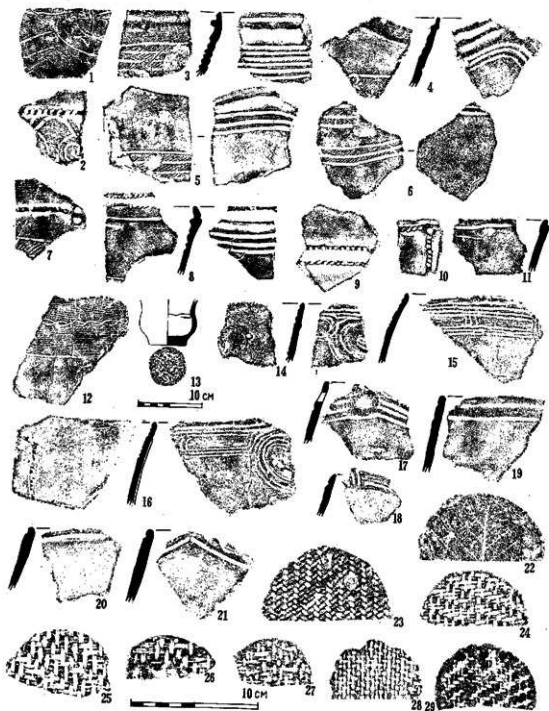
第86图 小畑外・辻垣外遺跡出土土器 (1:3, 但し2・13, 1:6)
 (1 16号住居址, 2-12 18号住居址, 13-35 22号住居址)



第87图 小堀外・辻外外遺跡20号住居址出土土器 (1:3, 但し1, 1:6)



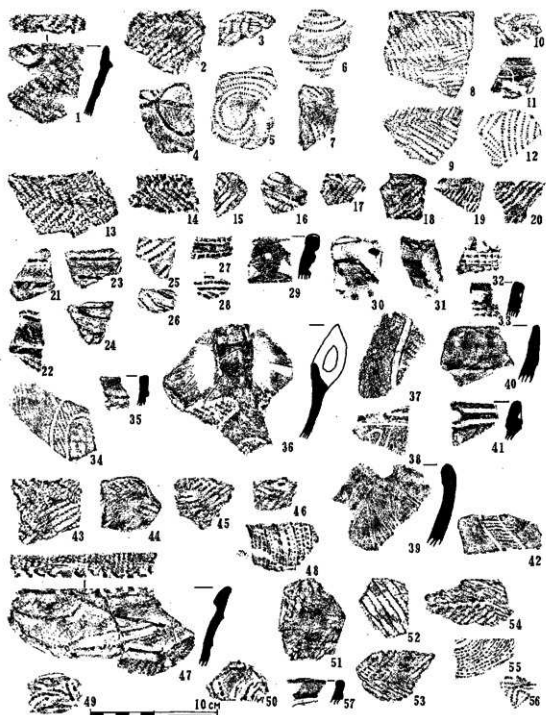
第88圖小畑外・社垣外遺跡出土土器 (1:3, 但し6, 1:6)
 (1-3 柱穴群Ⅱ, 4-29 土器集中地Ⅰ)



第89图 小垣外・辻垣外遺跡土器集中地Ⅱ出土土器(1:，但し13, 1:6)



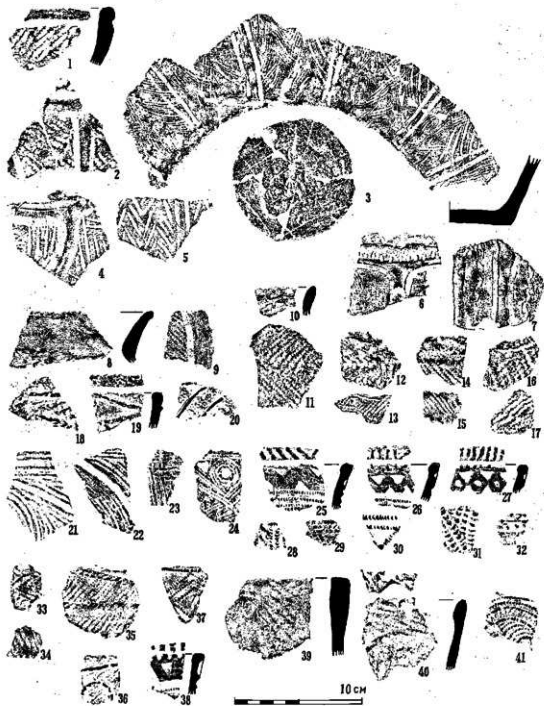
第90图 小垣外·辻垣外遺跡出土土器(1:3)(1-23號1冊, 24-27號2)



第91图 小坂外·辻垣外遺跡出土土器 (1:3)
 (1~7土器1, 8~12土器2, 13~33土器3, 34~35土器5,
 36~38土器7, 39~42土器8, 43~50土器9, 51~57土器13)

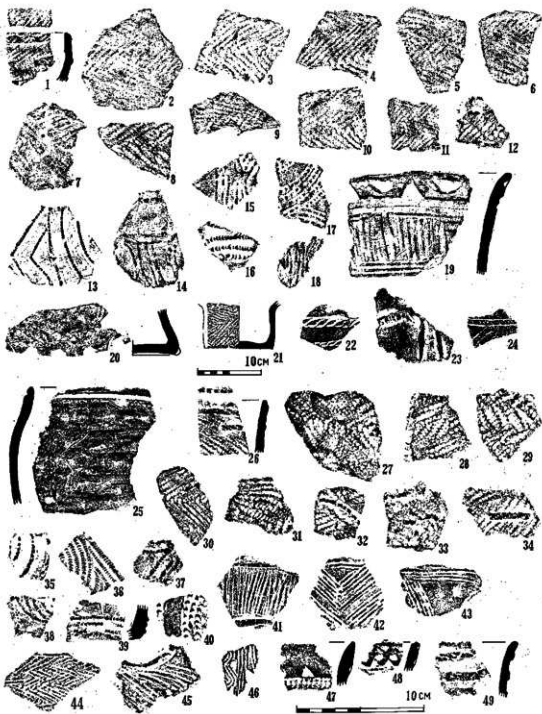


第92圖 小垣外・辻垣外遺跡出土土器(1:3)
 (1~15上横12, 16~24上横16, 25~28七横22, 29~31土
 横30, 32~35土横36, 36~38上横50, 39~43上横52, 44十横68)

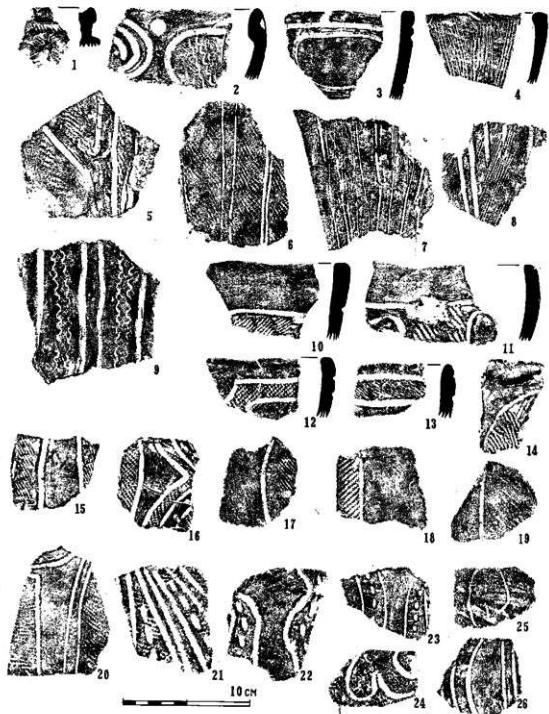


第93图 小短外·灶垣外遺跡出土土器(1:3)

(1~3 上層19, 4~5 上層70, 6~7 土層90,
8~9 土層97, 10~32 土層98, 33~38 土層99, 39~41 土層 107)



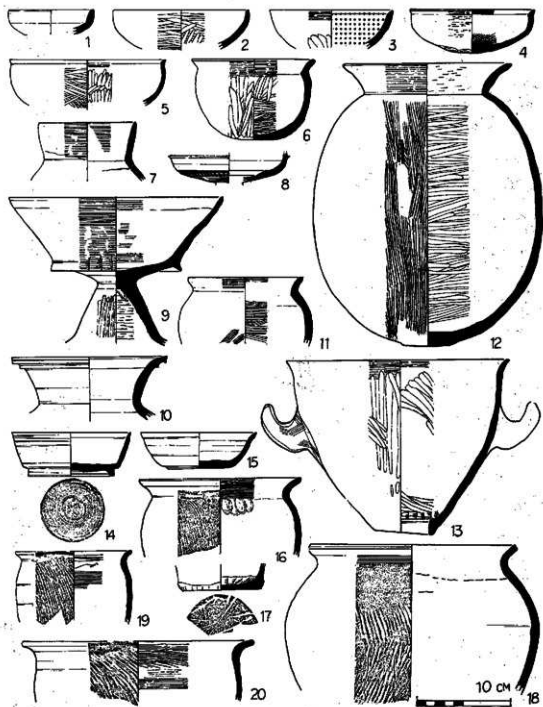
第94图 小以外・辻垣外遺跡出土土器（1：3，但し21，1：6）
 （1～20土曜 102，21土曜 108，22～25土曜 111，26～49その他）



第95图 小坝外·社坝外遗址出土土器 (1:3)



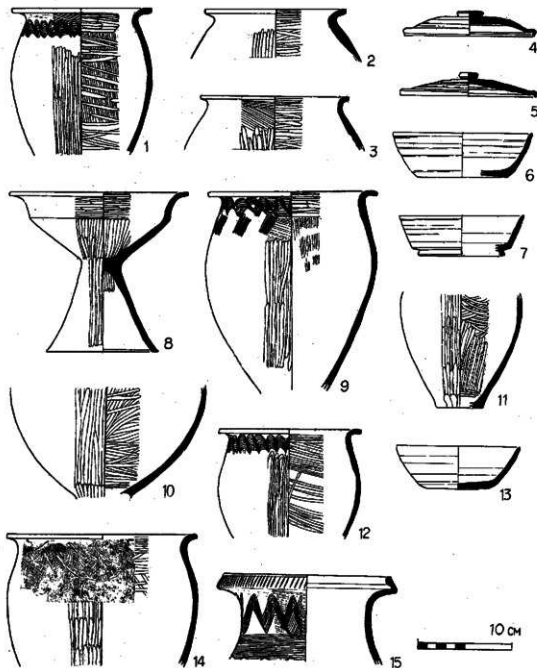
第96区 小垣外·辻垣外遺跡出土土器 (1:3)



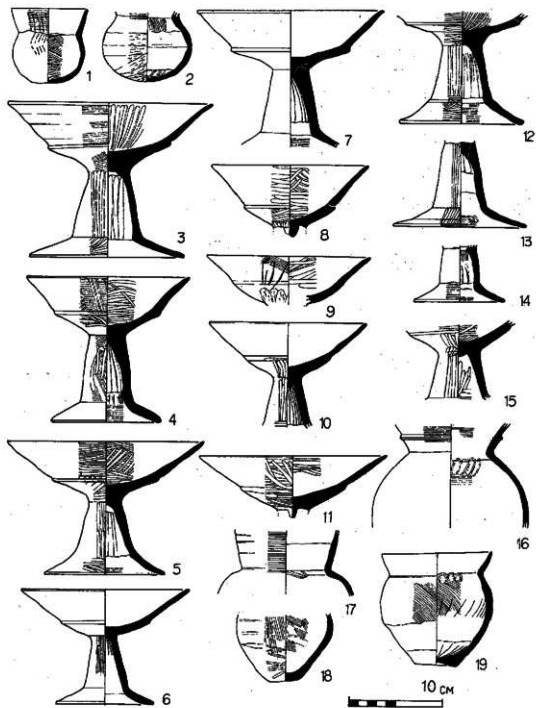
第97图 三奈洲遗址出土土器 (1:4) (1~13 1号住, 14~18 2号住, 19~20 3号住)



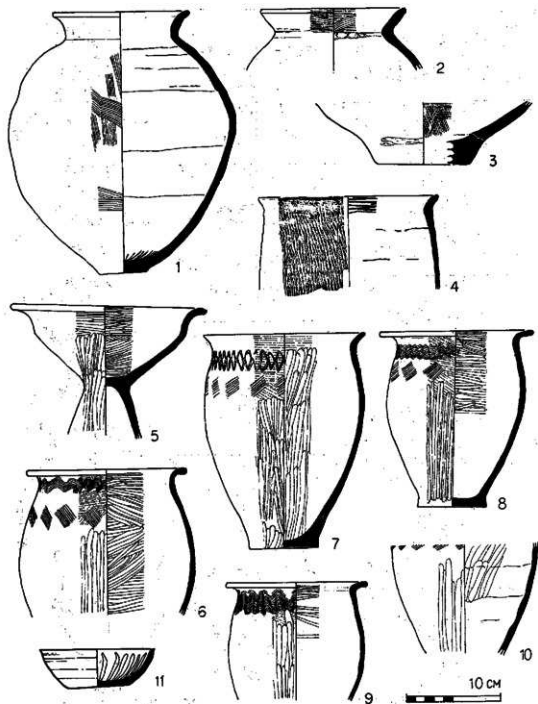
第98図 三壺洲遺跡 (1~14) 及び土の金谷遺跡出土土器 (1:3)
 (1~8 七塚1, 9~14 その他, 15・16 1号住居址,
 17 3号住居址, 18 5号住居址, 19~23 9号住居址, 24~39 12号作樂社 39~40 その他)



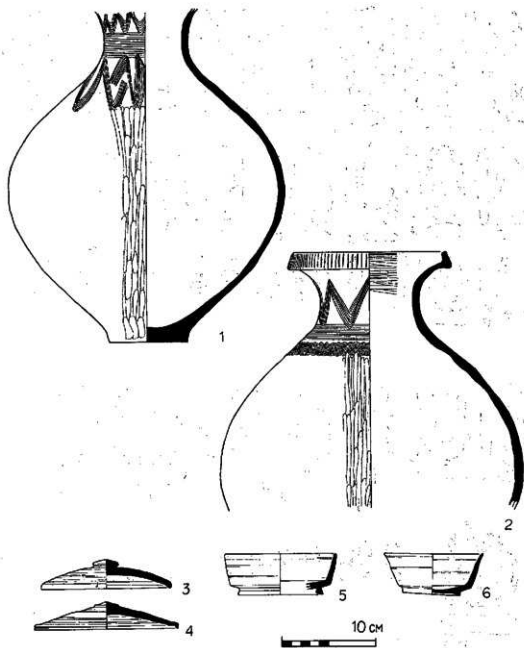
第99図 上の金谷遺跡出土土器 (1:4) (1-3 1号住, 4-7 2号住,
8-10 3号住, 11 5号住, 12 7号住, 13 8号住, 14・15 9号住)



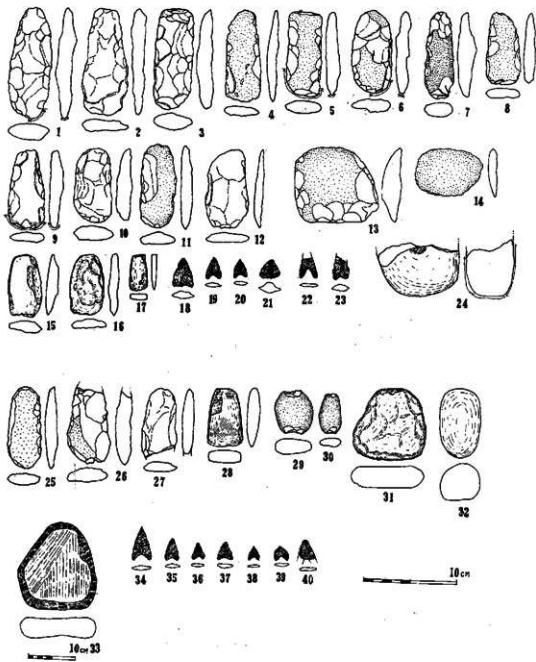
第100図 上の金谷遺跡10号住居址出土土器(1:4)



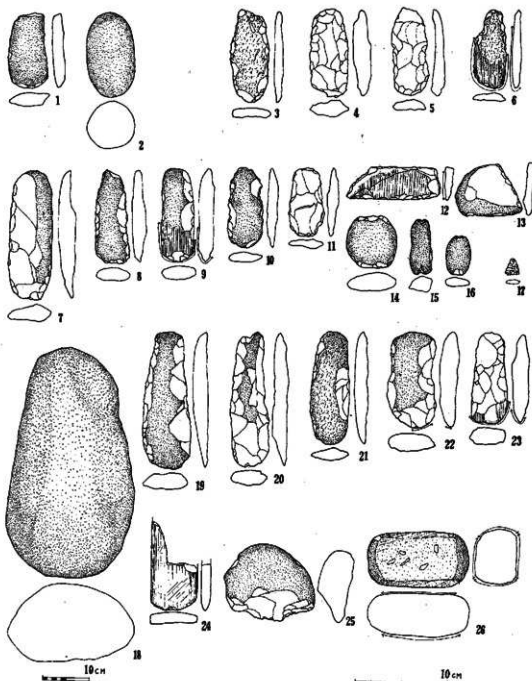
第101図 上の金谷遺跡出土土器(1:4) (1-3 1034E, 4-11 1137E, 5-10 1233E)



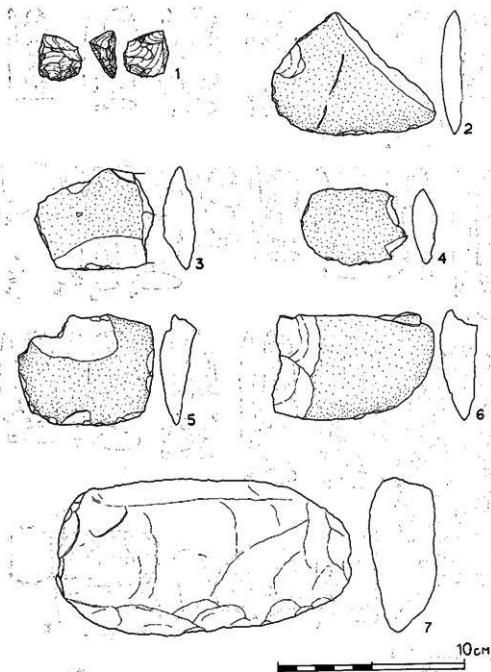
第102図 上の金谷遺跡出土土器(1:4) (1・2 12号器, 3・5 7号器, 6 6号器)



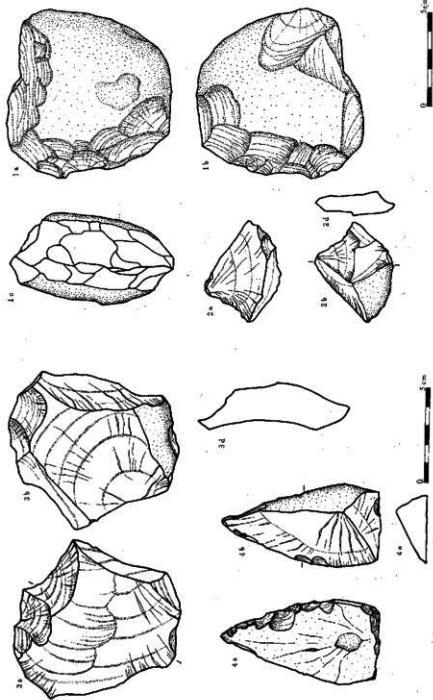
第103図 柳田遺跡出土石器 (1:4, 但し33, 1:8) (1-24 1号住居址, 25-40 2号住居址)



第104図 柳田遺跡(1~16)・山田遺跡の7及び石子原遺跡(18~26)出土石器(1:4, 但し18, 1:8)(1・2 土壞4, 3~6土壞5, 7~16 その他, 17 その他, 18 配石, 19~26 その他)



第105圖 石子原産跡出土石器 (1:2) (1-2 I. 或 4, 3-7 I. 或 12)



第 106 圖 石子原遺跡出土石器 (伴塚文土器群中?)

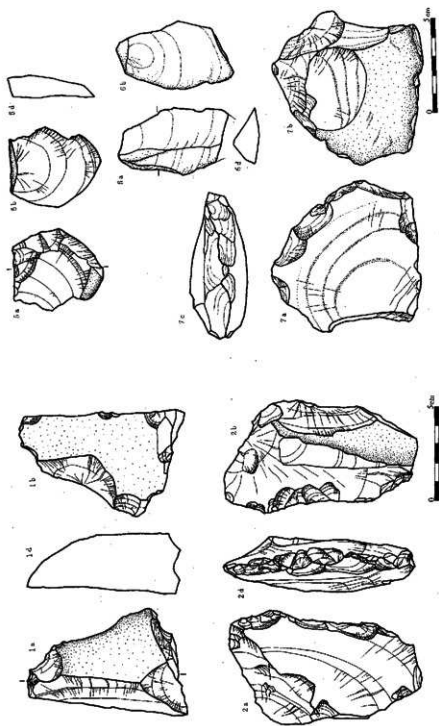
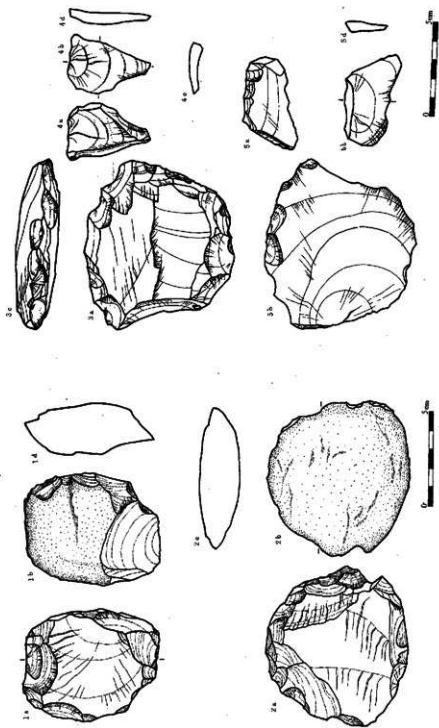
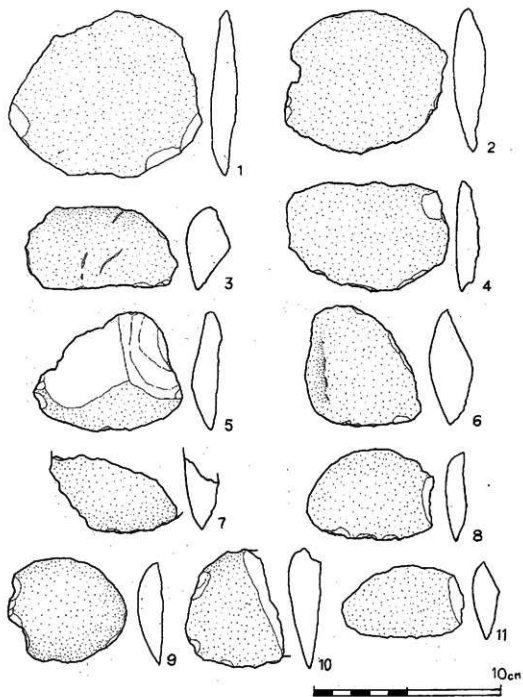


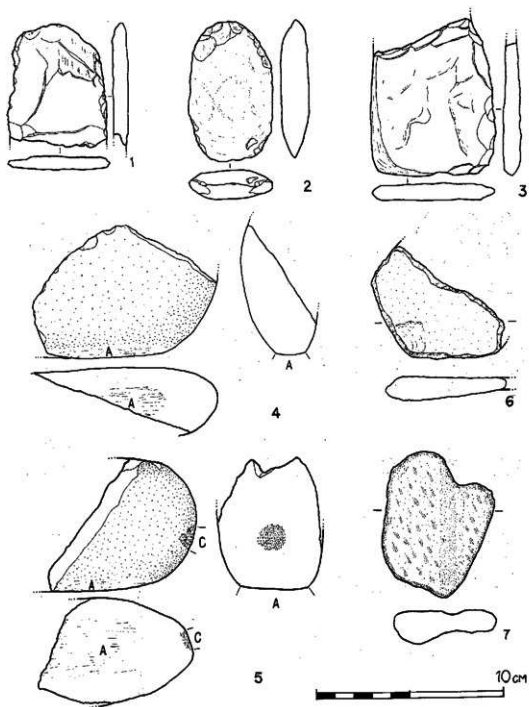
图 107 石质器 石质器出土石器 石质器出土石器



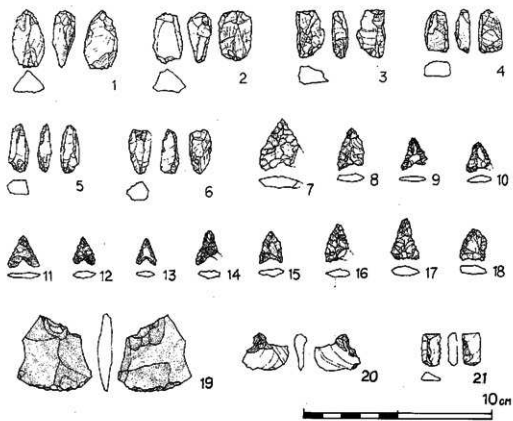
第108圖 石子原遺跡出土石器 (標型文化層伴出)



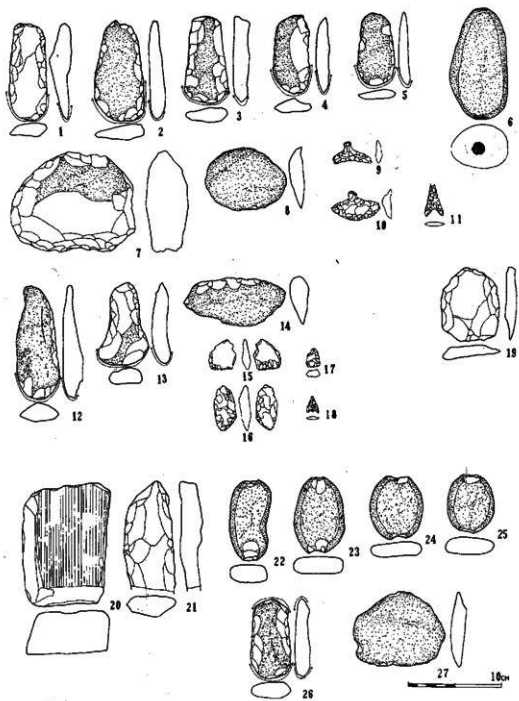
第109图 石子原遺跡出土石器 (1:2) (1~11押型文土器押出)



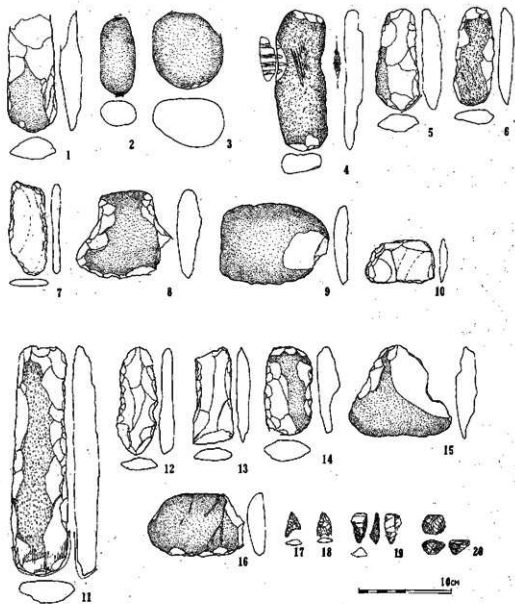
第110圖 石子原遺跡出土石器(1:2)(1~7種型文土器伴出)



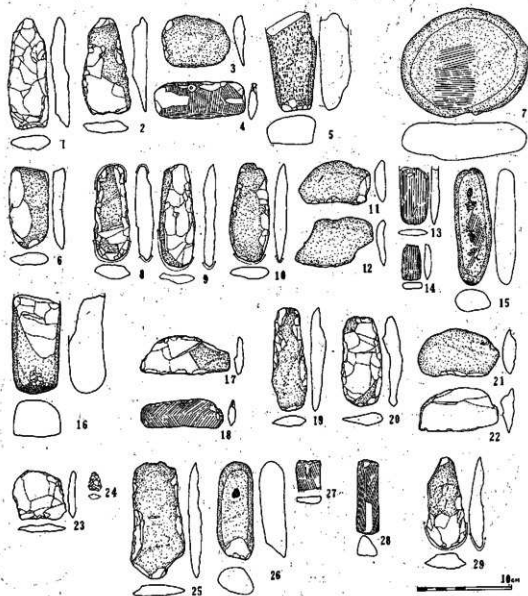
第111圖 石子原遺跡出土石器(1:2)(1~21種型文士器作由)



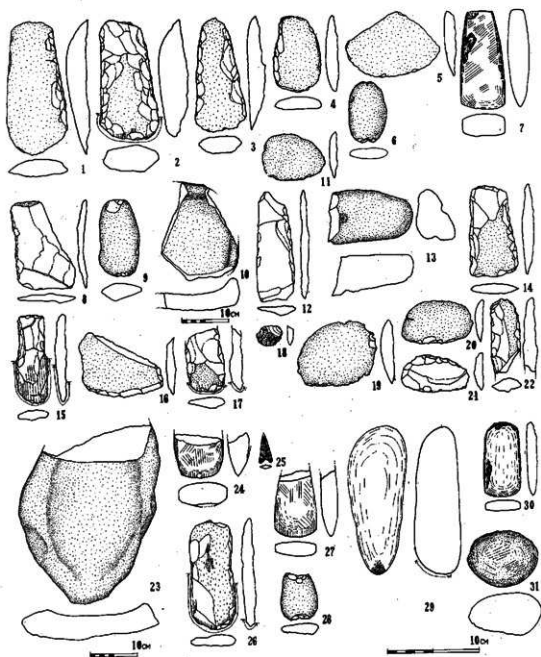
第112図 上の平東部遺跡(1~18)・寺山遺跡(19)及び六反田遺跡(20~27)出土石器
 (1:4)(1~11 1号住居址, 12~18 その他, 19 その他, 20 1号住居址, 21~25 土塚5, 26 土塚7,
 27 その他)



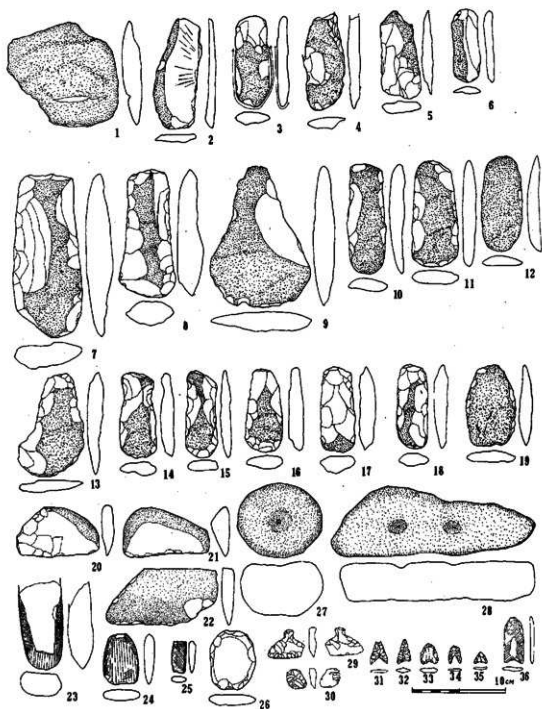
第113図 大東遺跡出土石器 (1:4) (1~3 1号住居址, 4~10 2号住居址, 11~18 その他)



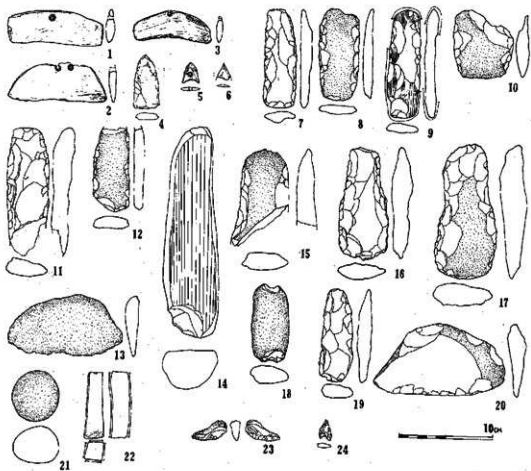
第114图 酒屋前遗址出土石器(1:4)(1~5 1号住居址, 6 6号住居址, 7 7号住居址, 8~16 8号住居址, 17·18 9号住居址, 19~24 11号住居址, 25~27 13号住居址, 28 14号住居址, 29 15号住居址)



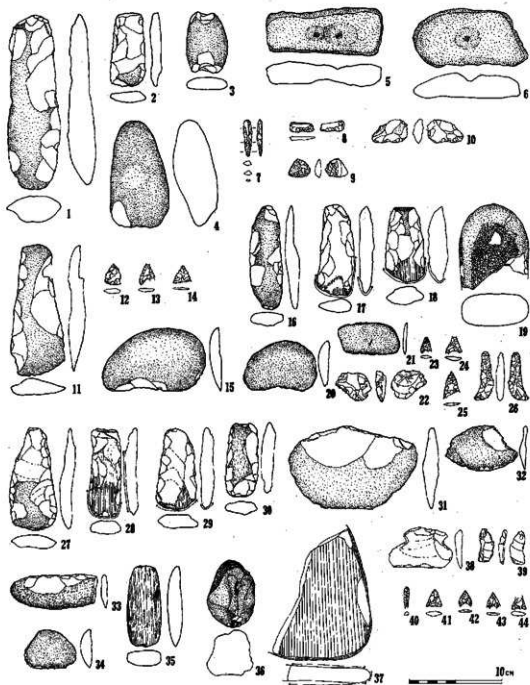
第115図 酒屋前遺跡出土石器 (1:4, 但し10・23・1:8) (1~6 16号住居址, 7 土壌9, 8・9 土壌10, 10 土壌12, 11・12 土壌15, 13・14 土壌16, 15・16 土壌17, 17・18 土壌18, 19 土壌33, 20 土壌44, 21 土壌54, 22 土壌56, 23 土壌58, 24~25 土壌63, 26 土壌66, 27~29 土壌67, 30 土壌71, 31 土壌72)



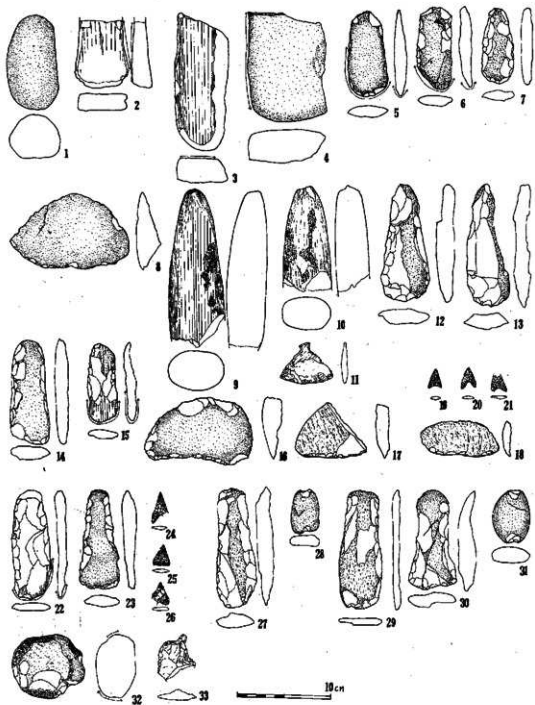
第116図 酒尾前遺跡出土石器 (1:4) (1~3 土壌75, 4 土壌83, 5・6 土壌92, 7~36 その他)



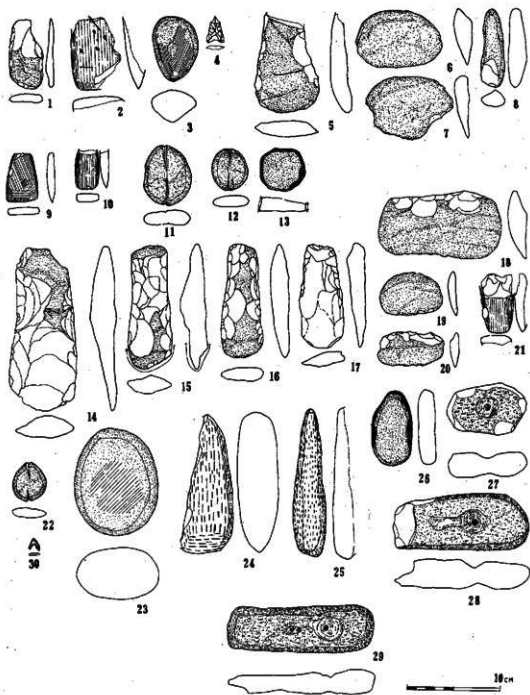
第117図 滝沢井尻遺跡出土石器 (1~4) (1~6 1号住居址, 7~10 2号住居址, 11~13 3号住居址, 14 4号住居址, 15 5号住居址, 16 滝沢遺構3, 17 土壌9, 18 土壌20, 19~24 その他)



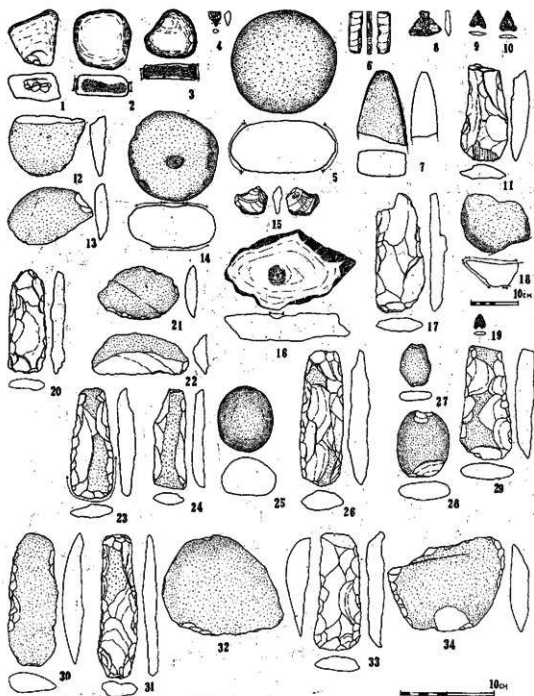
第118图 小垣外·辻垣外遺跡出土石器(1:4)(1~10 2号住居址, 11~14 5号住居址, 15 6号住居址, 16~26 7号住居址, 27~44 9号住居址)



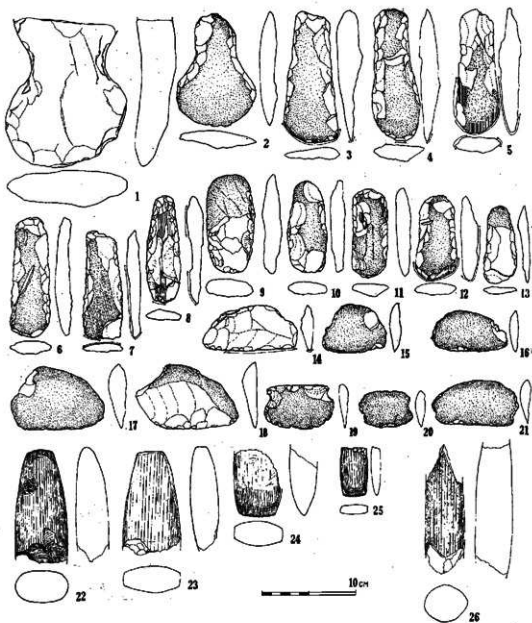
第119图 小垣外·让垣外遺跡出土石器 (1:4) (1·2 11号住居址, 3 12号住居址, 4 15号住居址, 5~11 16号住居址, 12~21 20号住居址, 22~26 22号住居址, 27·28 柱穴群Ⅰ, 29~33 柱穴群Ⅱ)



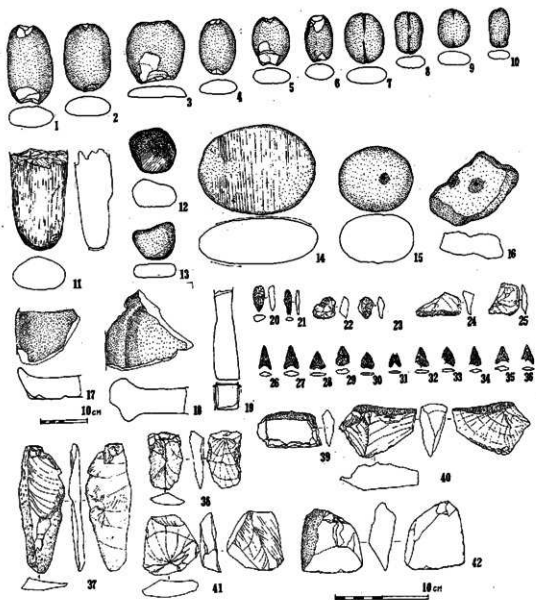
第120图 小垣外·辻垣外遺跡出土石器(1:4)(1~4 土器集I, 5~13 土器集II, 14~30 烧土群)



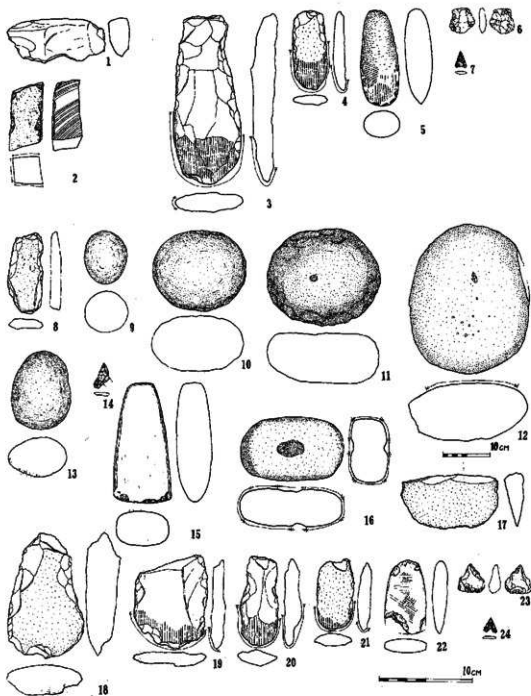
第121图 小垣外・辻垣外遺跡出土石器(1:4, 但し18, 1:8)(1~4 土壌8, 5~6 土壌9, 7 土壌12, 8~10 土壌13, 11 土壌19, 12 土壌20, 13~15 土壌21, 16 土壌22, 17~19 土壌36, 20 土壌46, 21 土壌48, 22~23 土壌50, 24~25 土壌52, 26~27 土壌54, 28~29 土壌67, 30 土壌69, 31 土壌70, 32 土壌90, 33 土壌93, 34 土壌102)



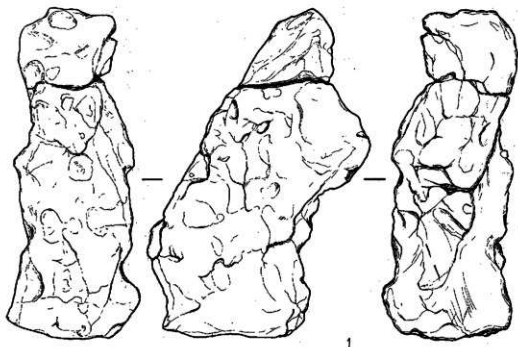
第 122 図 小垣外・辻垣外遺跡出土石器 (1 : 4) (1~26 その他)



第 123 圖 小垣外・辻垣外遺跡出土石器 (1 : 4, 但し 17・18, 1 : 8) (1~42 その他)



第 124 図 三並岡遺跡 (1~7) 及び上の金谷遺跡 (8~24) 出土土器 (1:4, 但し 12, 1:8)
 (1・2 3号住居址, 3~7 その他, 8~12 1号住居址, 13 3号住居址 14 5号住居址, 15 9号住居址,
 16~17 12号住居址, 18~24 その他)



3



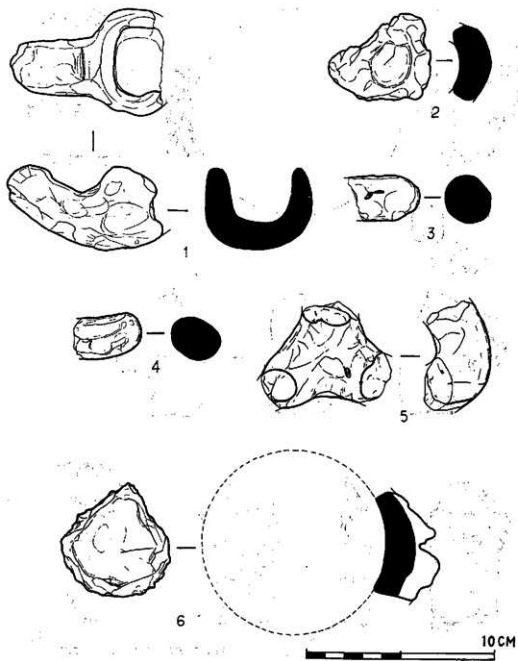
4



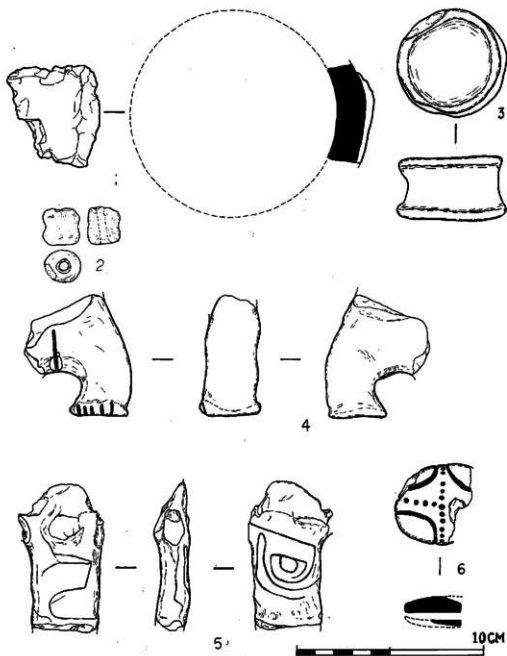
5

10CM

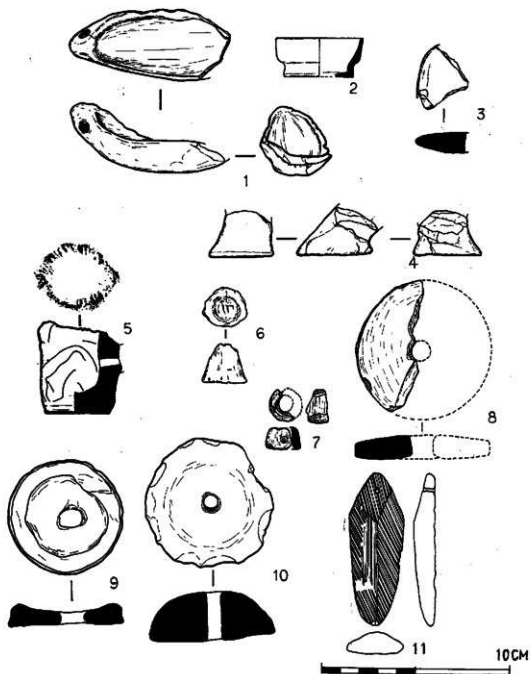
第125図 上の平東部遺跡(1)・寺山遺跡(2)・酒屋前遺跡(3~5)出土
土器品及び石製品(1:2) (1. 1号住居址南側ピット, 3~5 精製状遺物)



第126図 酒屋前遺跡精練状遺構出土土製品（1：2）

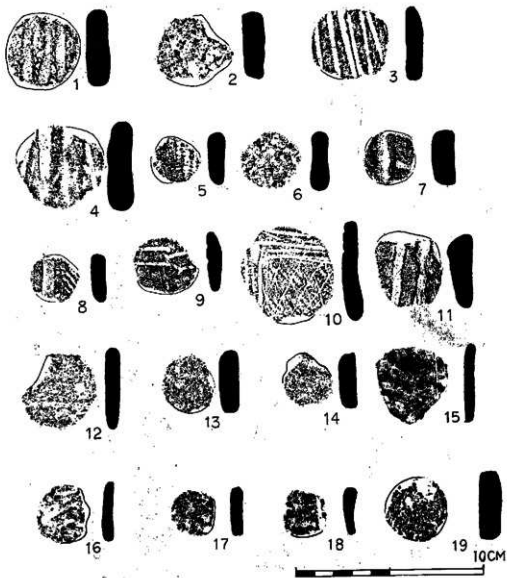


第127図 酒屋前遺跡(1)・滝沢井尻遺跡(2)・小垣外・辻垣外遺跡(3~6)
 出上上製品及び石製品(1:2)(1. 榊俵遺構, 4~6 焼土群, 2・3・5その他)

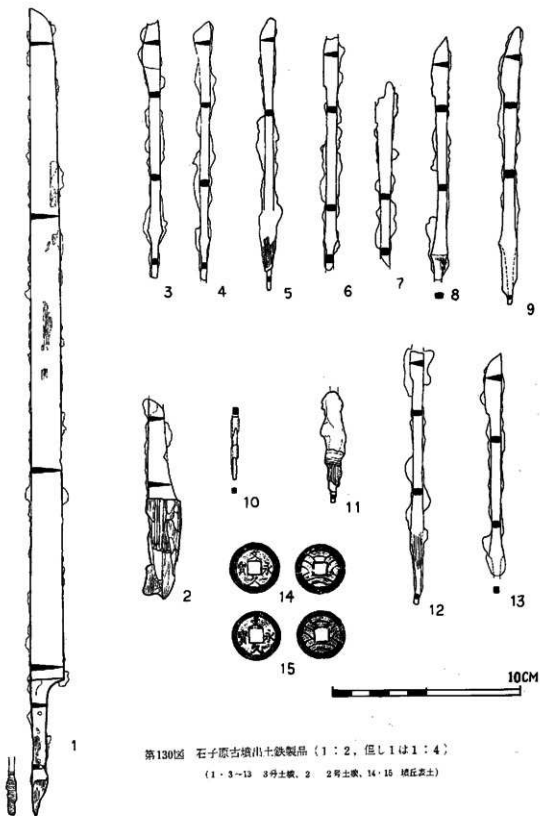


第128図 小垣外・比垣外遺跡(1~5・7・8)・三壺淵遺跡(6)・上の金谷遺跡(9~11)出土土製品及び石製品(1:2)

(1 横土師, 2 5号住, 3 6号住, 6 1号住, 7 土師36, 8 17号住, 9 7号住, 10 8号住, 4・5・11その他)

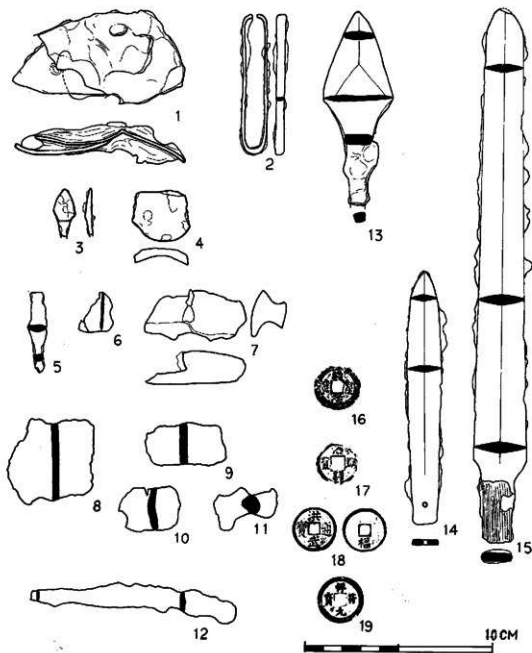


第129段 柳田遺跡(1)・福屋前遺跡(2~6)・小垣外・辻垣外遺跡(7~18)・
 上の金谷遺跡09出土土製円板(1:2) (2 土製16, 3・4
 土製50, 5・6 6号住, 9 9号住, 12~14 築1期, 15~18 土製12, 1・7・8・10・11・19 その他)

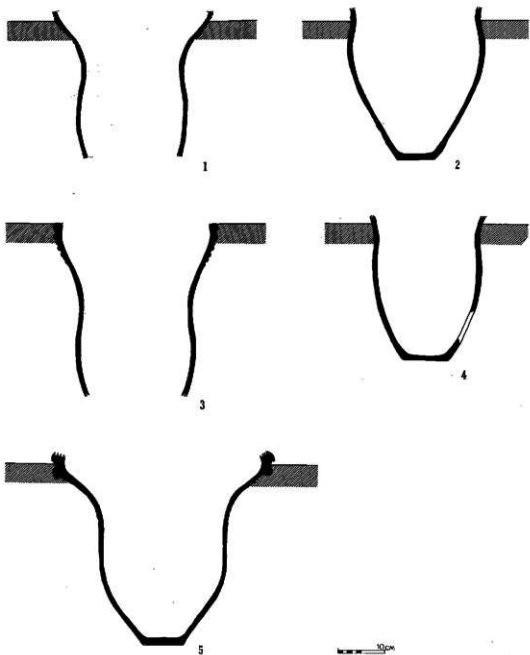


第130図 石子原古墳出土鉄製品（1：2，但し1は1：4）

（1・3～13 3斗土藏，2 2斗土藏，14・15 槌丘土藏）



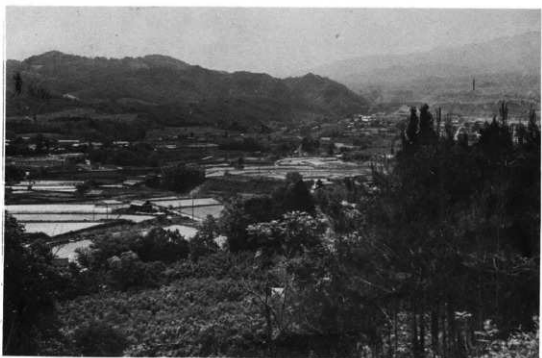
第131図 酒屋前遺跡(1~13)・滝沢井尻遺跡(14・15)・小畑外・辻垣外遺跡・三盛岡遺跡(17)・上の金谷遺跡(18・19)出土鉄製品及び古銭(1:2) (1・2 2号工, 3・4 12号住, 5~7 型穴状遺構2号, 8~11 増設状遺構, 12 土庫57, 13・16~19 その他, 14・15 方那川溝墓土版)



第132図 柳田遺跡(1)・上の平東部遺跡(2)・酒屋前遺跡(3・4)及び小垣外遺跡(5)埋葬状態図(1:8)
 (1・2 2号住居址, 3 8号住居址, 4 11号住居址, 5 20号住居址)



1. かぶき畑遺跡遠景（東より）



2. 柳田遺跡遠景（北西より）



3. 山本地区の遺跡 航空写真

1 柳田遺跡 2 山田遺跡 3 石子原遺跡・石子原古墳



4. 1号住居址



5. 同 炉



6. 同 埋甕



7. 1号住居址出土埋甕



8. 同 鉢形土器



9. 2号住居址

10. 同入口部ピットと石蓋





11. 押型文土器ピット群と方形周溝墓3号の墓壇



12. ローム・マウンド土壇断面



13. ローム・マウンド土壇と墓壇



14. 配石最上の石



15. 配石上部石蓋



16. 配石の石蓋を取除く



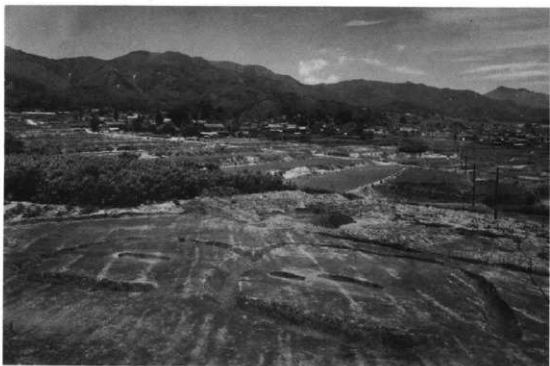
17. 上より中央に石棒ある



18. 配石の上部の石囲を除く



19. 石囲を取除く 石棒が立つ



20. 方形周溝墓1・2号(南より)



21. 1号の墓壇



22. 1号の主墓壇のガラス小玉 出土状態



23. 2号の墓 木炭の状態



24. 2号の墓



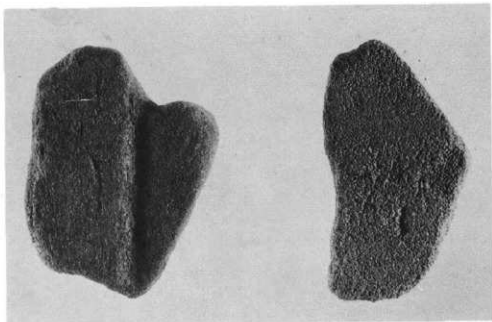
25. 2号の墓の骨片出土状態



26. 方形周溝墓3号



27. 同 北側溝断面



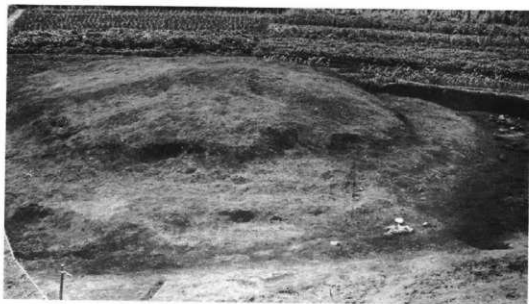
28. 矢柄研磨器と砥石



29. 古墳2号墓域出土須恵器



30. 同 土師器



31. 墳丘全景（東より）



32. 北側掘埋土の上部にある配石



33. 1号墓塚上面



34. 同 中段の面



35. 同 下部面



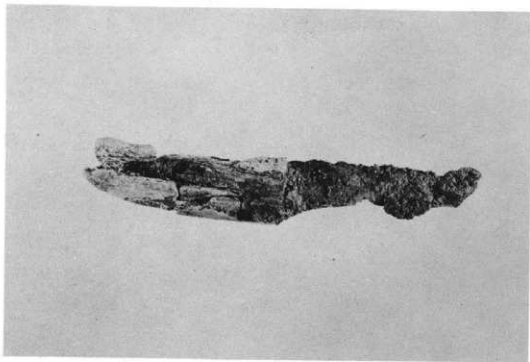
36. 2号墓塚



37. 2号墓城須恵器・土師器出土状態



38. 同 刀子出土状態



39. 同 鹿角藪刀子 苗



40. 3号墓塚



41. 同 断面



43. 鉄刀出土状態



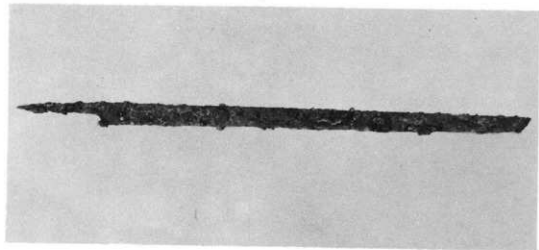
42. 同 鉄刀・鉄礫の出土状態



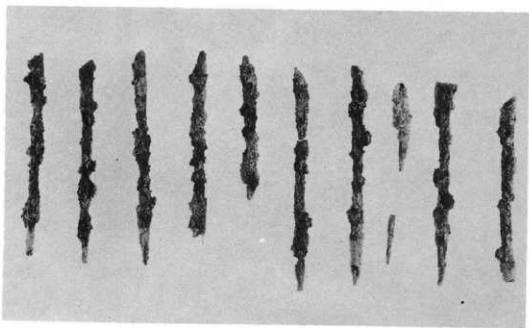
44. 鉄刀柄部



45. 鉄礫出土状態



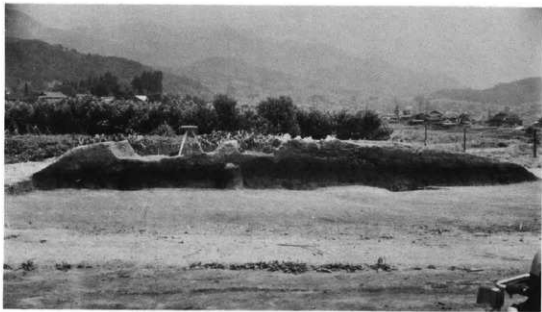
46. 3号墓出土鉄刀



47. 同 鉄釘



48. 1・2・3号墓城（南西より）



49. 墳丘東西線断面（黒土より上部が盛土）（南より）

第十八回 伊賀良地区南部の遺跡

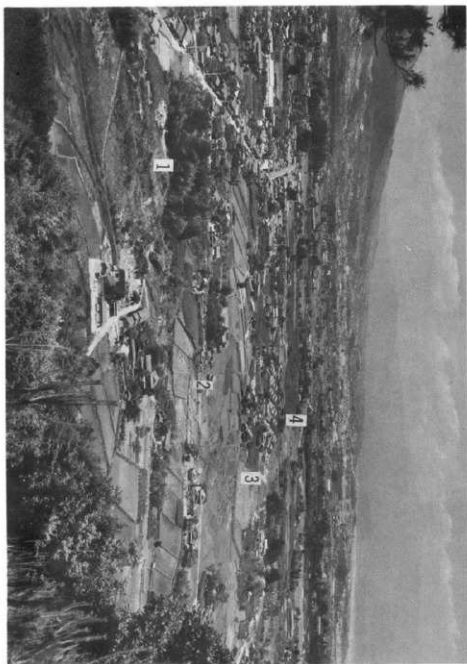
58. 4遺跡遺界(南より)

1 よろじ原遺跡

2 上の平東部遺跡

3 守山遺跡

4 六区田遺跡





51. 1号住居址



52. 同 炉



53. 塑像の埋っていた柱穴

第二十図 上の平東部遺跡出土土塑像





55. 2号住居址



56. 同 埋突



57. 柱穴



58. 1号住居址



59. 2号住居址



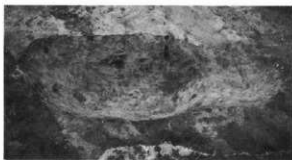
60. 3号住居跡



61. 4号住居址



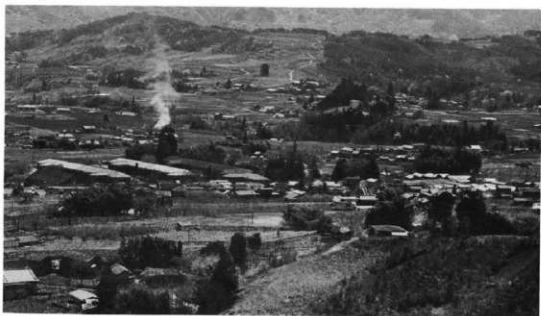
62. 5号住居址



63. 土壇4



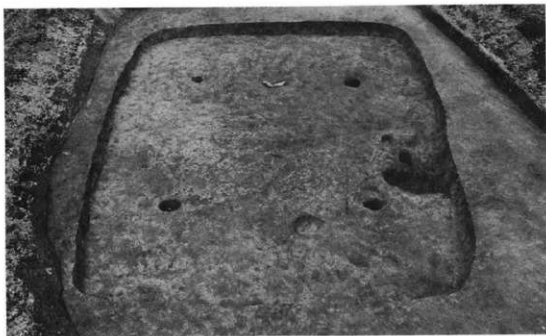
64. 土取場？



65. 大東遺跡遺景（北西より）



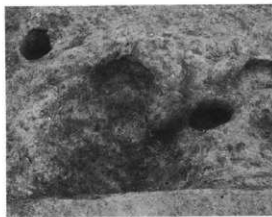
66. 1号住居址



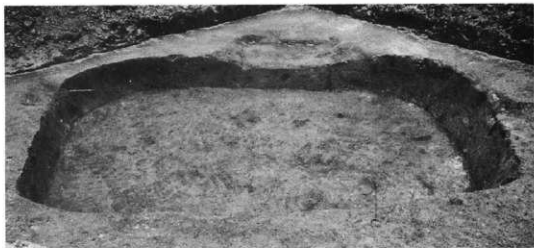
67. 2号住居址



68. 同 炉



69. 同 貯藏穴



70. 3号住居址



71. 4号住居跡



72. 土墳群A



73. 土墳群B



74. 土墳群C



75. 土墳群D



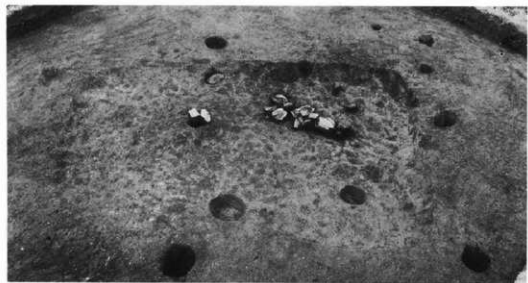
76. 土墳群Eと溝1~3



77. 5遺跡の航空写真 1 酒屋前遺跡 2 滝沢井尻遺跡 3 小垣外・辻垣外遺跡
4 三壺淵遺跡 5 上の金谷遺跡 6 山岸遺跡



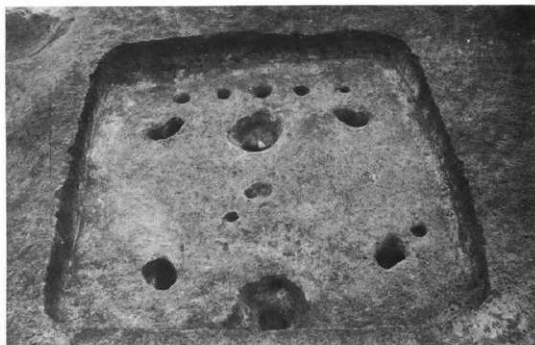
78. 1号住居址



79. 2号住居址



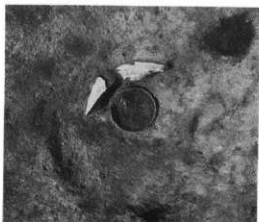
80. 3・4号住居址 柱穴群1



81. 5号住居址



82. 6号住居址 柱穴群2



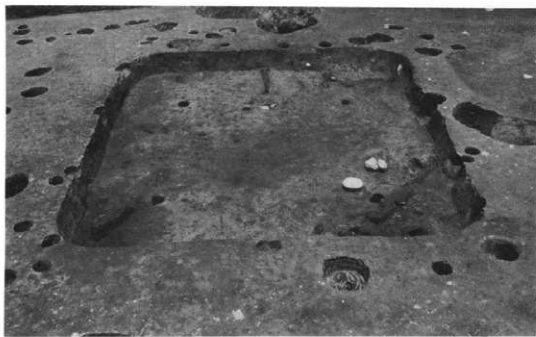
83. 7号住居址炉



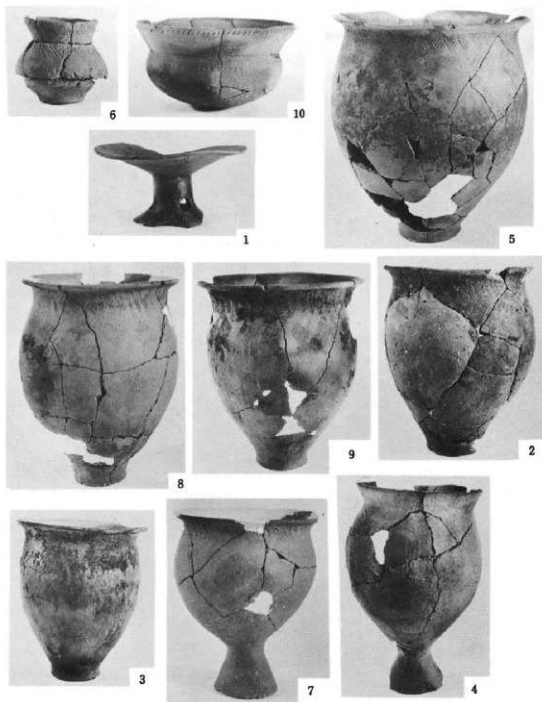
84. 7号住居址土器出土状態



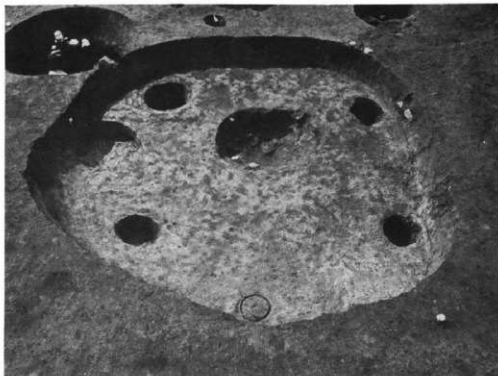
85. 7号住居址土器出土状態



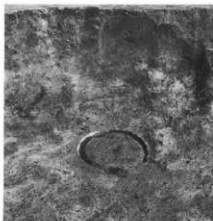
86. 7号住居址



87. 7号住居址出土土器（数字は遺構図出土位置番号）



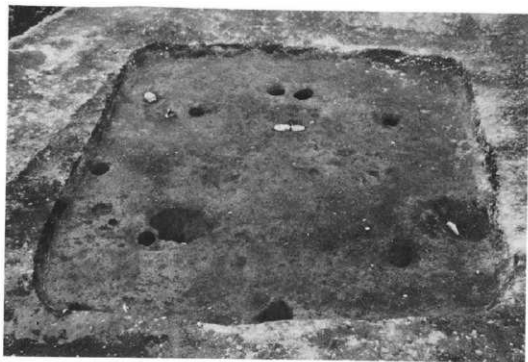
88. 8号住居址



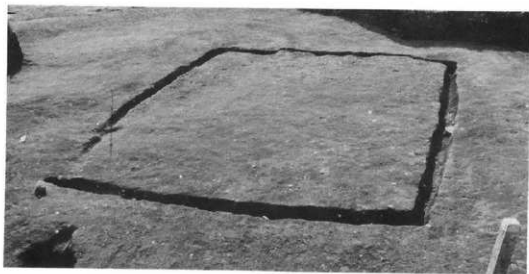
89. 同 埋甕の上面



90. 同 埋甕断面



91. 9号住居址



92. 10号住居址